

エトB-61

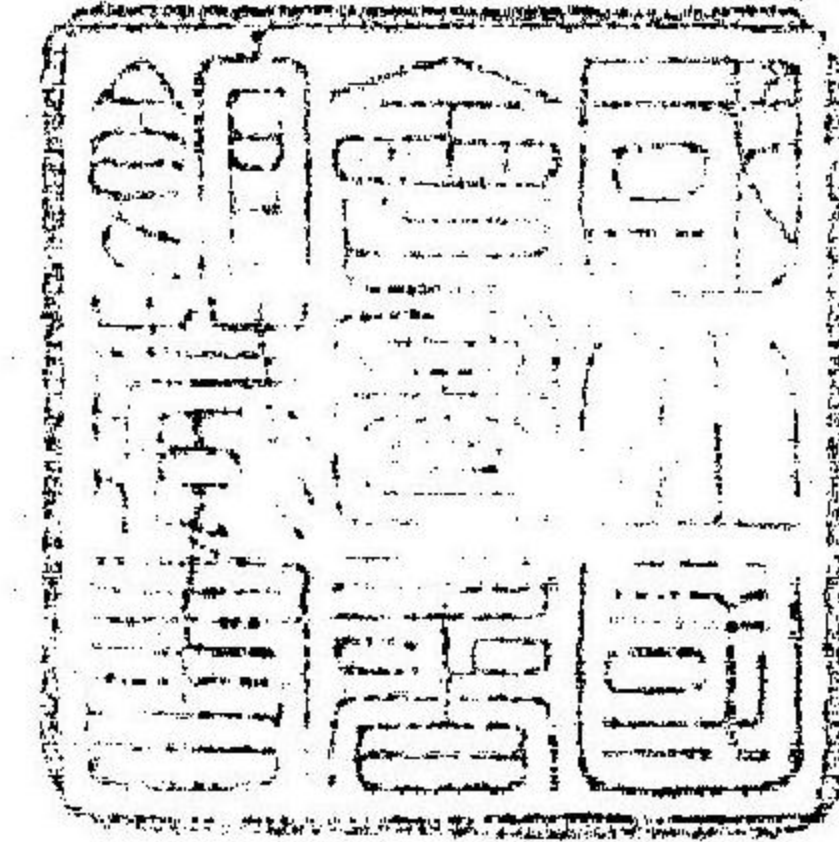
文學博士外山正一述

山存稿

後編

東京丸善株式會社

049.1  
7c 5876



山存稿 後編 目次

上

社會評論

- 開成學校講義室開席の演説
- 哲學館開館祝詞
- 加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す
- 社會結合三大一統露西亞の感恩
- 志願兵諸君に告ぐ
- 社會改良と耶蘇教との關係
- 女子の教育を論じ併せて耶蘇教擴張の法を説く
- 耶蘇教擴張の新法
- 基督敎信者の覺悟
- 佛敎僧侶の責任
- 史學上迷信の裨益

、山存稿後編目次

一三頁  
一一七  
一四七  
一〇四  
一一六  
一五五  
一七三  
一九〇  
二五七  
二七一



300967

、山存稿

學教上に於ける聖權の利害

英雄崇拜

加藤氏の廢娼論を駁す

藝妓について

蓄妾尙ほ公許なり

メイル記者に謝す

更にメイル記者に謝す

何ぞ衛生會雜誌を懲治せざる

今日我邦人民の道德の有様

改むべき或禮式

社會學上の問題

吾人の義務

長野中學校に於ける演說

修身大綱

帝國大學と學士との關係について

二

三〇二

三一六

三二〇

三四七

三五〇

三五五

三五九

三六三

三六六

三七三

三八〇

四〇九

四四六

四五七

四八八

議員歳費額改正意見  
 京都經濟協會に於ける演說  
 故矢田部博士追悼會に於ける演說  
 藩閥の將來

### 議會演說

貴族院に於ける發言目錄  
 戶籍法議案に對する演說  
 貴族院規則修正案に對する演說  
 田畑地價特別修正法律案に對する演說  
 公立圖書館國庫補助法案に對する演說  
 古墳墓保護に關する建議案  
 古墳墓保護に關する演說  
 豫算案に對する演說  
 高等學校及大學増設に關する建議案に對する演說

、山存稿後編目次

三

七一

七一七

七二九

七四〇

七五七

七六九

七七一

七七七

七九九

藝文觀

新體詩及び朗讀法 三頁  
 日本繪畫の未來 三四  
 演劇改良論私考 七七  
 音樂の改良に就て 一〇七  
 漢字を廢すべし 一一五  
 三宅氏の文を讀みて百驚を喫したり 一四三  
 漢字を廢し英語を熾に興すは今日の急務なり 一四六  
 羅馬字を主張する者に告ぐ 一五六  
 漢字破 一六〇  
 羅馬字會の趣意 一七二  
 西洋語學を學ぶことの必要 一八〇  
 洋語を學び學科を研究するの必要なること 一八九

詞藻

新體詩抄序 二〇三  
 プルウムフ<sup>ポ</sup>ールド氏兵士歸郷の詩 二〇五  
 テニンソン氏輕騎隊進撃の詩 二〇九  
 ロングフェルロー氏人生の詩 二一二  
 拔刀隊 二一五  
 チャールス、キングスレー氏悲歌 二一九  
 ウルゼーの詩曲 二二〇  
 社會學の原理に題す 二二二  
 失題 二二八  
 シネキスビール氏ハムレット中の一節 二三〇  
 耶蘇辨惑并序 二三三  
 迷ひ子 二六五  
 豊太閤 二六六

富士山	二六八
新體詩	二七〇
壽題	二七四
郭公	二七八
忘れがたみ	二七九
佐久間玄蕃	二八九
迷へる母	二九一
弔詞	二九三
往け往け日本男兒	二九五
我が海軍	二九八
旅順の英雄可兒大尉	三〇〇
我は喇叭手なり	三〇八
輸卒	三一〇
忘るゝな此の日を	三一四
神の命	三二〇

日本武尊	三二三
孝徳天皇	三四一
小中村博士の死去に際して	三四六
西郷隆盛	三五〇
靈驗皇子の仇討	四一八

英文

Raid on the Missionaries. ....	1—9
Social Reform and Christianity. ....	1—11

社  
會  
評  
論

## 開成學校講義室開席の演説

(明治十一年三月)

余輩の始めて此娑婆へ生れ來りし時は赤裸にして(黒裸或は白裸の如きは甚だ稀なり)其身體の働をも爲し得ず、唯母親の乳を飲み遺尿し、或は糞穢ヒツツの如くビークと啼くに過ぎず、實に慙むべきの有様なりしも、漸く生長するに隨ひ、次第に身體の働きをも爲し得るに至ると雖も、暫時は禽獸と等しく、其室内を運動するにも手足を用ひて稍々匍匐するに過ぎず、又漸くして遂に攀立ツクリダテするを得、稍々起つことを覚え、隨て立てば隨て倒れ、初めは一步にして倒るゝも、遂には幾歩を行くと雖も倒るゝことなきに至り、今余輩の如く自在に佇み居ることを得るに至れり。此れ嘗て屢々轉ろび倒れて、或は膝を傷け或は臂を毀り、漸くにして重力の中心をも意の如くに取り、この出來得るに至りし故にあらずや。

凡そ事物初めより十分に出來得べき者にあらず、其始必ず拙くして後には巧に至る一般の通義にして、丁稚ありて、然る後に番頭あり、蜷斗ありて、然る後に蛙あるは、何ぞ奇とするに足らんや、人の骨て拙なることと又或は己の身に有害なることと

して甚だ忌みし所のものは、却て後ちに巧を致し、或は己の身を保護するに要用なる經驗となるべし。今小兒の火を弄び行燈へ其火の燃へ移り之を消し止むる能はざる等のことあるに於ては、其父母たるものは之を以て甚だしき惡戯とし、嘗に之を警ましむるのみならず、之を鞭撻する者往々之れあり。然れども此の如きの經驗に依て紙の火に燃え易きを覺ゆるにあらざれば、何時火を弄び障子等へ火を付け家屋を焼失するのみならず、人命をも失ふ如きの事を爲すを免る能はざる可し。又茶碗或は椀などにある熱湯を覆へし手足を焼爛するが如きは、父母より受けし至重なる身體を害するとなれば、尤も忌むべきに似たり。雖ども、如斯經驗にあらざれば、焉んぞ熱湯の熱きを了知するを得べけんや。此に於て乎石川五右衛門の釜烹を見るに當つて、其必ず熱かるべきを思想し得るに至ると雖ども、若し嘗て己が指頭だも熱湯にして焼爛せしことなければ、五右衛門の釜烹を見るも却て五右衛門の釜中に在て何等の事を爲し居るやも更に了知し難かる可し。我邦の西俗を探り用ゆるに、其初め一として拙ならざるはなかりしなり。數年前我邦にて始て麵包を製せし時には、焼き立ての麵包は硬きこと石の如くにして、之を食せんとする必ず先づ二三日の間水中に浸せしに、今日は之と反し、麵包は焼立てを以て最良とす

るに至りしは、全く前に石の如き麵包を製せしとありしを以てなり。剪髮の如きも始めは極めて拙にして、剪痕斑らをなし、長きあり短きあり、或は黒色の毛氈を以て、雖壇を覆ひたる如きありて實に醜くありしも、近頃に至り眞の西俗の剪り方を心得たる者は、嘗て拙なる剪り方を爲し追々熟練せる故に、あらずや。初め我邦人の西洋服を着するに海軍士官の服を着するあり、陸軍士官の服を着するあり、又は上衣は海軍にして下衣は陸軍なるもあり、其醜きこと言ふ可からざりしも、今日各自の着する如き整ひたる服を着るに至るものは、戊辰の役に官軍杯の赤色又は黄色なる「ブランケット」を身に纏ひ、意氣揚々として市街を徘徊せることもありしを以てに、あらずや。當時其着せし「ブランケット」も今日に至りては大に下落し、遂に人力車夫の腰巻きと變せしは、又我國の一進歩と云はざるべからず。又今日に至りては、己の足に適ひたる靴を穿く者頗る多しと雖ども、往時は貴人高位の人と雖ども、此の如く貧澤を極はむる者甚だ尠なく、我使節となり海外へ派出せる者の中にも、尤の文半程の足にて十二文跣高とも云ふべき靴を穿ちて、嘗て彼の新聞紙にも掲げられたることありしが、斯く嗤笑を受けたりし故に、今日各々自己の足に適ひたる靴を穿る如きに至りしならん。



又今日の如く我邦に斬髮の行はるゝに至りしも順序のありしことなり。其初西式を好める者の野郎頭の前髪丈けを延ばし之を一方へ撫で付け、自から西式に變じたることと思ひ自得して居たりしも、今日此の如き風俗は人力車夫杯の社會に往々見懸くるに過ぎず、其次には漸く縮髮丈けを廢め、俗に慈姑の取手と云へる頭髪と變じ、遂に大奮發にて、彌々根からブツリとは行かず、聊か慈姑の取手を剪り之を撫付け、鬼一法眼流の撫付けとはなりたり。今日余儕の如き西洋人跣足と云はん斗りの短き剪髮の現今流行するに至りしものは、大に曩の慈姑の取手鬼一法眼流等の恩澤に依れるものと謂ふべし。家屋の構造も亦其如く始めは纔に室内に一片の「ケット」を布き、或は障子の小間の一二を硝子張りとし、以て西洋風の家屋なりとし得意なりしが、近來にては戸扉或は椽桷等を「ペンキ」にて塗るまでに至りしのみならず、遂には煉化石や石室等眞に西洋の家屋と同様の築造を爲すに至れり。凡そ天下の事都て拙より巧に至るは前條の如くにして、若し初より完全なるを欲し、拙なる事を厭ふに於ては、却て巧を致すことを得ざるべし、今世の中に西式の其半を眞似することを嘲り、衣服は日本製にて、靴は洋製、頭に西製の帽子を戴き、足に和製の下駄を穿く等のことを甚だ笑ふ者あれども、余を以て之を看るに、方今我邦

の堂々たる洋學者と稱する者と雖ども、其胸中は皆「ペンキ」塗りならざるを得ず、余輩の如きは未だ「ペンキ」塗りも全く終らざる者なれば、現今若りに勉強して「ペンキ」塗りを爲せる最中なる者なり。然れば今我國の學者にして「ペンキ」塗りなるを免かれざるに、剪髮縮の戸扉或は湯屋の天水桶等の「ペンキ」塗りを見て喋々嘲り笑ふは、却て人より臭き者身知らずと笑はるべき道理なり。又此輩の中近頃我邦に民權論を主張する者あり、而して其論する所往々過激に渉るを見、以爲らく、我邦民權論者の如き未だ眞の民論の何物たるを知らず、畢竟我邦の如き未開化の國に於て民權論を主張する如きは、未だ尙早かるべしと云へる者あり。然れども、縱令我國民權論者の説く所に大なる誤謬あるにもせよ、今日より互に討論すればこそ、遂には眞の民權論をも説くべきの地位に達すべけれど、其民權論の拙なきを厭ひ未だ民權を論ずるには其期尙ほ未だ早しとし手を袖にして待つに於ては、明治千年とも謂ふべき頃に至ると雖も、今日より民權論を説きて可なりと云へる日はあるべからず、明治千年の後に至り眞の民權論の起らんことを欲せば、今日の如き拙なる民權論と雖も、即ち其期を致すの楷梯なれば、拙なりとて之を厭ふべきにあらず。又茲に一つの民權論者あり、我政府は時に應せざるの方法を施行せられ、或は巨額の金圓

を無益に屬するの虚飾に費やさるゝ事あると認むるに於ては、是等の事は全く我  
 政體の君主政治なるが故にて、民權だに行はるれば政府斯く廣大なる煉化室や鐵  
 製の塙垣などを築造することは悉く止むべき様に心得、彼の紙幣局の煉化室や鐵  
 塙を指して、君主政治の用度の雜冗なることを罵り、或は曰く、看よ紙幣局の屋の頂  
 には鳳凰の飛べるあり、開成學校講義室の天井には、蒼鷹の翱翔のありなご口を  
 極めて嘗る者あれども、其鳳凰の如きは迷惑千萬ならん、決して支那や天竺の如き  
 君主專制の國より來りし者にあらず、却て夫の世界第一の民權國なる亞米利加な  
 ごより飛び來りしものならんと思はる、余を以て之を看るに、假令我國民權の行は  
 るゝに至るも、決して政府にて煉化石室を築造し石橋を架設する等のことは尙ほ  
 止まざるべし、又御布告の如きも増すとも減せざるべし、復た我國に民選議院の設  
 立せる時に方て、其議員の人民より選舉せらるゝ者は如何なる者ぞや、之を下にし  
 て湯屋の亭主や酒屋の主人等の、鶏の卵の孵るのや菜の芽の出るのが待遠ふてな  
 らぬ輩、之を上にしては上等社會の人物にて新聞紙の投書家などの輩ならん、其先  
 生達の投書中に就て推考するに、民選議院の設立せるも、政府の御世話は格別減す  
 べくとも思はれず、却て日本を一日も早く開明に進ましむ可き他の良策の澤山あ

るも知るべからず、譬へば甲の議員あり、マコーレイを引て生殺の權を有する者は、  
 教育を管るの權を有すると論じ、又ミルを引て教育の事は「デマンド」（譯）「ソブライ」  
 給の理屈には行かざるべし、如何となれば教育に於ては、其教育を受くべき者の自  
 ら其善惡を見認むること能はざればなり、餘の事はいざ知らず、教育だけは是非こ  
 も政府にて手を下さざるべからずと論せんに、議員一同此論を以て至當なりとし、  
 教育は政府にて擔當すべきものなりと決し、此に於て、豊人の爲に煉化造りの大學  
 校を建築せしに、又乙の議員の新選せられたるに、議員は極めてスペンセル家にて  
 忽ちマコーレイ、ミル等の論を辯駁し、政府にて人民教育の事を負擔するは其理な  
 きを論說せんに、如何にもスペンセルの論は當時英國すら未だ行はれ得ざるの名  
 論なるを以て、早く日本に於て施行すべしと主張し、直ちに豊人教育は先づ取消す  
 べしと布告するに方り、尋で又丙の議員ありホクスレイの「アドミニストラチフニ  
 ヒリズム」を擔ぎ出し、又スペンセルを論駁すべし、斯の如くなれば流石の民選議院  
 に於ても大に困窮し、其措置を失するに至るべし、然れば則ち假令民選議院を設置  
 せるも都て如斯にして、昨日行はれんとせしも今日は之を廢し、今日出す所の布告  
 も明日忽に取消す等のことある萬々なるべし。

若し夫れ今余の演ぶる如くならば、余は民選議院の設立に不同意なるやと問ふ者あらんに、余之に答て云はん、決して然らず、民に民選議院を起すべきの權理あるや否は暫らく置て論せざるも、若し事の得失より之を論せんに、譬へば橋上に立て他人の水中に泳ぐを見て其技の拙なきを嘲けり笑ひ居る時は、何時迄も己れ水泳を爲すこと能はざるべし、若し泳ぎを學ばんと欲せば自身先づ水に入り時として水を飲み、又は人より笑はるゝ等のことあるも、之を堪へずんば水泳を覺ゆる能はざるべし、政事の事も亦然り、拙なる民選議院なりとも一日も早く設立の擧なかるべからず。假令今日民選議院の設立あるも、百般拙劣ならざるは勿るべしと雖も、今より拙なる民選議院にもせよ設置あればこそ、後來眞の民選議院の我國に設けあるに至るべけれど、今日の如き有様にては、我人民の政府に於る橋上に在て水中に泳ぐ者を見物する者と同じく、政治上に就て自己の經驗とては毫も之れあらざるなり、英國の議院の如きも決して最初より完全なるものにはあらず、數百年の經驗に因て漸く今日の如きものに至りしなり。

此の如く都ての事最初は必ず拙なれども、年を積み月を経るに隨ひ追々巧に至れるものにして、今夕余が茲に此の如く拙なき演説をも慙ぢずして爲す所以のものは全く後來に至り巧なる演説を爲んことを希望するが爲なり。(公刊)

## 哲學館開館祝詞

(明治二十年十月五日)

先年中東京大學で、醫學の別課や法學の別課を置れたことが有ましたが、これは正課生は修學の年月も長く學資も多く要すること故、人數が少なくて、夫のみでは世の需要に足りませんから、そこで此の如き姑息の手段を堂々たる大學で行つた譯であります。其後大學の外にも、醫學校や法律學校が出来て、大學の如く永き年月を費さずして、手軽に其學を修める事の出来る彼の大學校の別課の様なものが、世間に多く出来て、世の需要も足りる様になりましたれば、そこで大學はそんな姑息の事をする場所では本來ないからと云つて、其本體に復して正々堂々たる正課のみを置いて、姑息のものは一切廢することに成りました。これは固よりさうあるべき筈ですが、吾國の今日の有様の如くに、學資に乏しき者や學事が新に起りたる爲に、晩くまで學問をせすに居た者杯が多い國にては、到底純然たる大學計りでは世の需要に足りませんから、此頃諸方に起る學問早學びの専門學校は甚だ要用なるもので有ります。されば斯様な學校の多く出来るのは誠に結構な事で有ります。然る

に法律醫學、政事、經濟等を修むる爲めには、斯様な速成學校が追々多く出来ましたが、特に哲學に至つては、斯様な學校の是れ迄なかつたのは甚だ遺憾の事で有りました。此度井上圓了君が哲學館と云ふものを建られて、此缺點を補はるゝに至つたのは、實に悦ばしきことであります。

何れの國でもいつの時でも、智識に富む人があつても此人の數が甚だ少なく、且又智識のある者となし、其有無の度が甚だしき様なことのあるのは、誠に歎はしいことで有ります。國の開けたと云ふのは、固より一二人の人が智識に富む斗りのことでは有ません。一般人民が智識に富む様にならなければ、其國は開けたとは云へませんが、多くの人の智識が増した上でなければ、智識に富む一二人が、如何程國を開かうと思つて、色々な事をやらうとしても、只行はれないのみならず、却て我身を亡ぼさるゝ様なことに陥ります。ブルノーやガリレオが責に遭つたのも、高野長英が非業の最後を遂げたのも、當時智識ある者の數が少なくて、智識のない者が非常に多かつた故で有ります。先日重野君が學士會院で述べられました通り、八代將軍吉宗と云はれた人は、非常な改革を行はれた人で有られしが、其死後に於て其志が夫程通らなかつたのは何故でありますか。世に智識ある人が少なかつたせいでは有

ませんか支那は日本よりは早く西洋諸國と交際をして居つた國で有り乍ら、今日迄まだ鐵道が出来ないのは、李鴻章が鐵道の便利なことを知らない故で有ますか、さうでは有ますまい、まだ外に智識のある人が至つて少いからこのことで有ませう、いくらえらい法律家が居ても世間の人が皆法律に無頓着なる様なもの斗りなる時は、あたら法律も畫餅に屬すること、有ませう、いくらえらい西洋醫が居つても、外の人が皆漢學者流の者計りなる時は、其御醫者様は御氣の毒ながら、今日の様に診察料を五圓も十圓も取らうと思つても、誰もくれ手は有ますまい、されば醫學でも法律でも、よいものが行はれ様といふには、これに、明るい者が多くなければなりませんが、扱哲學上の思想は、哲學を修むる人が少なくつても、世に行はるゝこと、出来るものでありますか、又は哲學上の思想は行はれなければ行はれないで好いものでありますかと申しますに、素より哲學を修むる人が少なければ、哲學上の思想は世に行はれ難いもので有ます、又哲學上の思想が行はれなくつてもよいと云ふのは、恰度人は何も考がへるといふことは、いらないと云ふことゝ同じことであり、荷も物を考へると云へば、哲學者であつても哲學者でなくつても直に哲學の範圍内に入らないことは出来ません、經濟學を學んだことのない者は、決して經

濟上のことを考もせず話しません乎、醫學を學んだことのない者は、決して醫學上のことを考へること、ななければ話すこともない者で有ます乎、天文學を學んだことのない者が、天文上のことを考へたり話したりする様なことは、決して無きこと、です乎、中々さうでは有ますまい、經濟學は少しも知らずに大得意で國の經濟を論じたり、生理學や病理學は少しも知らずに、高慢らしく體育のことや病氣のこと杯を論じたり、天文學は少しも知らなくせに、狼りに日蝕の時の有様杯を書きたてゝ、世人を迷はしたり費用を負はせたりする族さへあるでは有ませんか、どうして、どうして經濟學もまだ廣まらなければなりません、醫學もまだ廣まらなければなりません、天文學もまだ廣まらなければなりません、成程醫學を知らないで病氣の事を論じたり、天文學を知らないで、日蝕の事を書きたてたりしては、それは如何様危いかも知れないが、哲學はそれは違ふものである、哲學などは少しも知らなくつても、何んにも差支のある者ではない杯と云ふ者も多く有ませうが、歴史を書くのでも、宗教の事を論ずるのでも、美術の改良を圖るのでも、人倫の事を研究するのでも、國の隆盛を圖るのでも、一として哲學上の思想に據らないで出来るものは有ますまい、哲學を知らなくつても、事物の理を考へることが出来ると思ふのは、

大なる間違で有ます、哲學を更に學んだことがなくつても、多少哲學者たることは誰でも免かるゝことの出来ないものであります、只醫學でも經濟學でも天文學でも哲學でも、昔から幾代となく、學者が研究して出來たもの、自分一己の自己流のものとの別があります、多數の人の研究で、出來た經濟學を少しも學んだこともなしに、自己流の經濟學で、其惡口を云つたり、數代の研究で出來た天文學を少しも學んだこともなしに、自己流の天文學で、日蝕のこと杯を説くのは、誠に沙汰の限りと云ふものであります、經濟學の惡口を云ふ者は、數代の研究に據つて出來た學問より、自己流の經濟學のほうがよいと思ふ迄のことにて、矢張一種の經濟學を主張するものであります、哲學こなし杯と、大層らしく出掛てえらい新説でも有る様に見せ掛ても、其哲學こなしなる者は、矢張哲學であります、只哲學にも數代の經驗によつて出來たものと自己流のものとの別があります、自己流の哲學で、數代研究の哲學を駁撃することはありますが、全く哲學でないもので、哲學を駁撃しやうといふことはむづかしいことでありませう、哲學こなしも別に怖ろしいことはありますまい。(草稿)

## 加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す

廣告にも出してありました通り、今日私は、戰爭論を演べます積りであります、今日は、戰爭論はお預りに致しまして、戰爭論よりもつと大切な論題に付いて、演説を致すことに改めました、今日天下の形勢よりして見る時は、戰爭論は甚だ大切なものであるだらうに、夫よりもつと大切な論題とは如何なるものかと、御不審に思召すかも知りませんが、私の戰爭のことよりも、尙ほ大切だと思ひます問題は、即ち「東洋の一大問題」であります、此の「東洋の一大問題」と云ふ題は、蓋し諸君が此席に於て始めてお聞きなさいますものではありますまい、此題は即ち去月十三日に東京學士會院に於て加藤弘之君がなされた演説の題であります、今日「戰爭論」と云ふ題を改めまして、彼の加藤弘之君の演説の題と同じものに致しましたのは、寔に大切な理由のある譯であります、が、加藤弘之君は私の友人でありまして、然かも長者として仰いで居る人のことでありますから、君の論説を駁撃をするのは

加藤弘之君

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す

アリスト  
トルの  
名

學士會院  
長

加藤氏の  
如き人の  
演説の影  
響

古典講習  
科

古典科  
立の主意

和漢學者  
の種を  
爲し置かん

世の風潮  
に引かざ  
れたるに  
あらず

當時世間  
の風潮

儒教主義  
は猶ほ  
は

女子に英  
語を教へ

寒に好まないことでもあります、併し乍ら昔ギリシヤのアリストートルが申しました通り、アリストートルは大切でありますが、眞理は尙ほ大切であります、加藤君は今日我邦の學者中の巨擘とも云はるゝお方にて、東京學士會院の會長をもして居らるる御方のことでもありますから、君の演べらるゝ論説ならば、尋常の論題に關するものと雖も、世人の大いに注意する所で御座います、其影響は著しいことでありませうが、殊に、東洋の一大問題に關して、然かも東京學士會院に於て、君が演べられたる演説とあらば、世人の之れに注意することは日頃の百倍で御座います、其影響も亦極めて大いなることでありませう、されば君の此の演説にして、眞理に叶つたるものならば、甚だ國家の爲に成るものでありませうが、若し眞理に反つたものでありますならば、其害は又甚だしいものでありませう、斯る名望ある人の言行は實に慎むべきものであります、先年加藤弘之君が東京大學の總理で居られました節に、古典講習科と申して特に漢學を専門とし、和學を専門とするの學科を設けられましたことがありましたが、君が正々堂々たる大學の中へ斯る變體の學科を設けられました主意は、昨年右漢書科の卒業生が加藤弘之君並に教授に與つた人達杯を富士見軒へ招いて宴會を開きました節に、加藤氏が明かに述べられました通り、向より開明の今日に於て、殊更に和漢學を養成しやう杯と云ふ考の爲めではなく、全く西洋學も出來て純然たる學者風の漢學者や國學者の出來るまでには、餘程の歲月も掛りませうから、斯る眞正の和漢學者の出來ない中に、今の和漢學者が死に絶えてしまひますと、和漢學者の種がなくなつてしまひますから、斯る不都合のない様に、今の和漢學者の跡繼ぎに、生きた辭引同様な和漢學者を若干名拵えやうと云ふまでの主意で設けられたものでありまして、世の風潮に引かされて設けられたものではないことは、私共の如く加藤氏の考を最初から知つて居ります者は、云ふまでもなく、左もなく共加藤氏の人と爲りを知つて居ります者は、必ず分つて居りませうが、折り悪しく當時世間の風潮は頻りに儒教主義を主張するものゝ多からんとする如きものでありました故に、世間の人は大學にて古典講習科を設けたのを見まして、そら見たことか、東京大學に於てさへ古典主義でなければ行かぬと云ふことを發明せられたものと見えて、彼の通り特別の保護を加へて、古典主義を奨励せらるゝではないかと云つて、守舊主義や儒教主義が益々猖獗を極はめまして、諸學校に於ても勢ひのよきは儒教主義にて、學科中に外國語の設はあつても唯々片隅に小さく成つて居ると云ふ様な有様にて、殊に女子に洋語を學ばせる杯

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す

當時女子の教育 耶蘇教社會の學校 文明主義を採らず 女大學 小笠原流の禮式 萬事日本支那流 改進主義を採らず 二三年前より又改進黨主義となる 英語の流行 女子教育も面目を改む 女學校の需要多し

と云ふことは以ての外のことだとして、當時女學校にて英語を熾に教へて居りましたのは僅に耶蘇教社會の學校而已でありました其他の女學校に於ては學科中に外國語の設けのないのは勿論、文明世界の主義や慣習を教へる事は少しもなくつて、女子の教育と云へば女大學の主義に小笠原流の禮式でも教へ込むことに限る様に思ひました、唯々ベタベタとお辭儀でもして居る様な女計り仕立て居る様な時勢でありました故に其他の事も萬事日本流支那流が行はれまして、宴會の性質でも交際の模様でも、只管に我邦固有の風を旨と致しまして、何事にも改進主義を探ることは至つて少なう御座いました、が種々な事情の爲めに二三年前よりして、又追々に世の風潮が變つて來まして、諸事改進主義を探る様に成りまして、少し分つた人は英語の必要を説かないものは殆んど無い様な有様に成つて來まして、何處の學校に於ても學科中に英語を加へない所は無様な勢ひになりまして、故に女子教育の如きも大いに面目を改む様に成りまして、小笠原流の禮式は放逐されまして、英語を以て何より大切な學科と爲し、之に續いて家事經濟杯を以て最も大切な事となす様に成て來ましたが、昨今の所にては女子の英語を學ばんと欲する者は實に夥敷き者にて、英語を教授するの女學校とさへ云へば、百人や二

昨今又々守舊主義を行はれんとす 加藤氏の因循説に左袒する者多からん

加藤氏は是に似て非なるものなり 今日演説の主意

加藤氏演説の大意

百人の生徒は直きに來る様な時勢でありまして、何事も大いに改進主義を探ると云ふ最も頼もしい世の中に成りました處が種々な事情の爲に昨今實着とか節儉とか云ふ寔に尤もらしい説を唱へる者のあります處よりしまして、又舊弊家が頭を上げやうとする様な時勢に少しく成つて來た様であります、されば斯る時に際して加藤弘之君の様な名望家が因循説を唱へらるゝと聞かば、之に左袒するものは夥敷いことでありませう、固より加藤君の説にして、眞理に合つたものでありますならば、左袒者の多いのは寔に悦ぶべきことであります、若し眞理に戻つたものでありますならば、氏の説の國家を害することは決して少ないことではありますまい、然るに私の考にては、氏の説の如きは一寸聞きまますと如何にも學理に合つて是なるが如く見えるものであります、其實は大いに學理に戻つて全く非なるものだと思ひます、今日私が「東洋の一大問題」と演題を改めまして、此の席に於て公然加藤氏の説を攻撃することに致しましたのは、即ち氏の説をして世の進歩を妨げることの少なからんことを勉むるのは戦争のことを論じますより急務だと思はれます故であります。

去る十一月十三日に加藤弘之君が東京學士會院で爲されました演説の大意だ

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す







應化の多  
少は遺傳  
の強弱に  
由る  
遺傳の強  
弱  
守舊家と  
改進黨と

日本人と  
支那人  
應化の多  
少も亦遺  
傳

支那人の  
替へざる  
も遺傳  
日本人の  
替へるの  
も遺傳  
日本人も  
支那人も  
出來る丈  
の應化を  
やるもの  
なり

加藤氏の  
中間説は  
何んのこ  
だか少し  
も分りま  
せん

應化力の  
遠ふ二個  
の人民に  
同一の應  
化をさせ  
やうとは  
無理なこ  
となり

同一の應  
化をやる  
のは支那  
人も日本  
人も共に  
迷惑なら  
ん

過不及共  
一升の酒  
にも多過  
ぎぬこと  
あり

三合の酒  
も多すぎ  
ることあ  
り

即ち所謂應化との二つが互に相調合して過不及を爲す間に行はるゝものに過ぎざるなりと云はれますが、應化の多少は遺傳の強弱に由るものであります、而して遺傳の強弱は其遺傳の性質が變化を被らせらるゝ如き外勢に接することなしに生存して居る長短に由るものでありませう、即ち遺傳の性質が強いものであれば所謂守舊主義の強いものでありまして、應化が容易く出来るものならば所謂改進黨の強いものであります、されば生物が祖先以來經歷して來た事情の模様によつて各自が持つて居る應化力には夫々多少があることでもありますから、其應化力の多少の如きも即ち遺傳の然らしむるものであります、支那人には應化力が少なくて日本人には應化力が多いのは事情の異同より生じた遺傳の然らしむるものでありませう、されば支那人は慣習を替へんから、遺傳に従ふものだが、日本人は慣習を替へるから、遺傳に背くものだ、杯と云ふべきではありません、支那人が慣習を替へないのも遺傳の力の爲であります、日本人が容易に慣習を替へるのも是れ亦遺傳の力の爲でありますから、支那人は支那人の出來る丈の變化をやり、日本人は日本人の出來る丈の變化をやる譯であります。

ふ所を定めなば所謂應化其度を得るものにして大いなる禍害を免るべしと云はるゝ主義は何んのことだか少しも分りません、加藤氏の説は取も直さず違つた遺傳の性質若くは違つた應化力を持つて居る二個の人民に同一の應化をさせるがよいと云ふ實に無理なことでありまして、夫れで禍害を免れやうとは實に驚き入つた考であります、支那人と日本人とは遺傳でもつて受けて居る應化力が既に已に違つて居るものでありますから、應化の分量が違ふのは固よりのことであります、夫れを兩國が進みつゝある進路の中間を取らせる時は、支那人は應化をやり過ぎ日本人は出來る丈の應化がやれないことになり、支那人も迷惑でせうが、日本人は尙ほ迷惑でせう、事はやり過ぎては害があり、やり足りなくつても害のあるものであります、何でも適度に行くのが爲に成ることであり、一升の飯でも能く消化の出來る腹ならば強ちに多過ぎると云ふ譯ではありますまい、三合の飯でも消化が出來ない様な腹に取つては多いのでありませう、夫れを二合は少ないし一升は多いから其間を取つて何地にも六合づゝ喰はせると云つて、兩人の消化力の強弱に構はずに、同じ分量の飯を喰はせておいたら、何地にも害がありはしませんか、何地にも害がありませう、加藤氏のお考は丁度此様なものだと思はれま

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す

加藤氏論

加藤氏の過不及の標を如何の標とするか

自然淘汰の大法

他の生物との競争

外勢との競争

す。

加藤氏は自然淘汰の大法は生物が其親より受け継ぎ來りたる性質即ち所謂遺傳と既に生じたる後に受くる所の種々の變化即ち所謂應化との二つが互に相調合して過不及を爲す間に行はるゝものに過ぎざるなりと云はれますが、加藤氏の云はるゝ其過不及とは何を標準とせらるゝものですか、又何の過不及ですか甚はだ曖昧でありますが、夫れは如何でもよいと致して置いて、私の考を演べませう、抑も自然淘汰の大法と申すは外勢に適したものは存し適しないものは滅するの理でありまして、後へ残るもの程能く外勢に適したるものに成ると云ふの法でありますから、若し數種の生物が接近しまして互の間に競争が起る如き場合に於ては、若し外勢に適することの他種屬に及ばざる如きものは、應化の力で能く其性質、若くは組織、若くは能力、若くは慣習等を替へて負けざる様に競争を爲すことの出来る如きものとなるか、然らざれば能く競争を避けてしまふ様なものに變化するにあらざれば滅亡を免れることは出来ずまい、併し他の生物の有無に關らず外勢に適する者は存し適さない者の亡ぶのは避け難い事であり、ますから外勢に適するの點より考へます時は、少しも多く變化をして能く外勢に適する様に成るに若く

西洋諸國と日本との競争、その改良を得るか否か

競争に便利なる事、其採用すべきもの、其改良を得るか否か、其採用すべきもの、其改良を得るか否か

はないこととありますが、生物には夫々固有の應化力があります事故に其應化力の許す丈より外は、何程善良な改良でも爲すことは出来ないことに成つて居ます、そこで亡びるものと存するものとが出来て來るのであります、今日の様に支那や日本が西洋諸國と交際をする様に成りました日に當て、能く彼れと競争をする事を避けることの出来る様な道があれば、格別左もなくして否でも應でも競争をやらなければならぬ譯であります、其競争に便利な改良は出来る丈多くしなければなりません、競争に便利な事物は出来る丈之を採用しなければなりません、競争に便利な教育法は之を行はなければなりません、競争に便利な法律は之を取用しなければなりません、競争に便利な政治は之を施さなければなりません、競争に便利な陸軍は之を置かなければなりません、競争に便利な海軍は之を設けねばなりません、競争に便利な學藝は之を起さねばなりません、競争に便利な文學は之を採用しなければなりません、然るを加藤先生の様な考にしますと、支那では未だ西洋流の教育は僅に宣教師の學校位に止まるに、日本では全國一般に西洋流の教育が行はるゝ而已ならず、各科の大學までを立て、諸般の學術を教授するとは急劇だから、其中間を取つて、せめて大學位は止めにするがよい、支那では法律

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す



癡は愚化の多しに依るものなり生物が自ら求めざるは左程ならぬものなり自保律に成ることを求むるは不爲なることを避けることば爲なることを伴ひ苦しむるに伴ふものなり

首を切らぬのが愉快ならぬを切らぬ首を求めませう

火に焼かれるのが快楽の好種ならぬを焼かされてしまひませう

犬猫は食はせれば「ホウズ」もなく食ふ

小兒は加減のよい飲食物を減らすも

めてしまひ爲に成ることならば益々續けてやつて行くこと云ふ、うまい仕掛があり  
ます、下等動物でも人間でも快樂は我が爲になる事に伴つてあるものにして、苦痛  
は我れに不爲なる事に伴つてあります、而已ならず爲に成る働は勢力が強くなる  
ては益々之を慕ひ、不爲な働は勢力が減つて之を止める様な事情でありますから  
こそ、能く存在して行きますが、若しさうでなくして、我が爲になる事に苦痛が伴ひ  
且つ勢力が減り我れに不爲なる事に快樂が伴ひ且つ勢力が増す様な仕掛であり  
ましたら生物は直きに絶えてしまひませう、何となれば、爲に成ることに快樂が伴  
ひ勢力が増す、不爲なることに苦痛が伴ひ勢力が減りますからこそ、生物が我が爲  
に成ることを求め我が不爲に成ることをば避けることもしますが、若し不爲なる  
ことに快樂が伴ひ、勢力が増し、爲に成ることに苦痛が伴ひ、勢力が減る様な仕儀で  
ありましたならば、生物が却て不爲なることを求めて、爲になることをば避ける様  
に成りませう、若し首を切られるのが愉快でありましたらば、人々が我れ勝に首を  
切られやうとしませう、火に焼かれるのが快樂の種でありましたならば、少しも多  
く身體を焼きたがるもの斗りでありませう、火に焼かれるのは熱くつて苦しいか  
ら人が火に焼かれぬ様にするのであります、身を切られるのは痛う御座います

から、皆人が及物を恐れ害を避けるのであります、都て何事に於ても其通りであり  
まして、害に成る事には苦痛が伴ひ爲に成る事には快樂が伴ふことに成つて居ま  
すから、生物が害を避けて、爲に成ることは之を求めるのであります、今日開化した  
人間に在てこそ何が爲に成るとか何が爲に成らないとか云ひますが、下等動物下  
等人に至つては爲に成るの爲に成らないの云ふことは、少しも知りはしません  
全く快樂と苦痛とを標準にして何でもやつて行くのであります、夫れで身を保存  
して行き身を改良して行くのであります、犬や猫は喰はせれば「ホウズ」もなく喰ひ、  
飲ませれば「ホウズ」もなく飲んで身體を害する様なことをするかと思ひますと、中  
々そんなことはしません、大概腹が満ると喰ふことをよしてしまひ、大概渴が止ま  
ると飲むことをよして尾でもふり乍ら行つてしまひます、何せさうしますか、腹が  
満れば食物がまづくなり、渴が止まれば水が飲み度なくなり、其上に尙  
は喰ひ尙は飲むのは不愉快であります、而已ならず、又其働きをしやうと云ふ勢力  
もなくなり、ますから腹が満ち渴が止まれば即ち飲み喰を止めるのであります、小  
兒でも其通りであります、世間には子供は程を知らずに何でも大人がもう好ひ加  
減におし、もう好ひ加減におしと云つて制さないと、必ず何でも喰過ぎるだらうと

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す

起臥も好  
い加減の  
なるもの  
なり  
運動遊戯  
皆同じ  
此法に従  
つて誤は  
なすもの  
なり  
此法に従  
ばないこ  
とは出来  
ざるなり  
食物の撰  
び方  
野菜  
魚類  
鳥獸

思ふ者が多いのでありますが、子供だと云ひましても、そんなに無暗に喰へ込む者ではありません、何程澤山やつたからと云つても、好い加減に喰へますと否に成つて來ますから、よしてしまひます、夫れ程大人が心配をしませんでも、腹がたんと空つた時はたんと喰ひ、少し空つた時は少し喰ふ様に子供でも成つて居ます、起るのでも寝るのでも、亦其通りであります、起して居たい丈起きて居ますと、睡く成つて寝てしまひます、寝て充分休ままして、再び勢力が附きますと、起さずとも自分から眼が醒めて起きます、其他運動でも遊戯でも、子供は勿論大人でも好むやれば、自然に否に成つて、止めてしまふと云ふのが自然の法でありまして、最初より動物は此法のお蔭で、悪を避け善を求めて進化して來たのでありますから、此標準に従つてやつて行つてさう誤はないものですが、好じや従ふまいと思ふても、此法に従はないことは下等動物や下等の人類に至つては、固より出来ませんが、極く進化した人間でも、今日の所ではとても出来ない様に見えます、而巳ならず、實際誰も大概何事も此法の爲にやつて居る様に見えます、食物の事は如何であります、今日でこそ生理や衛生の學問が少し開けて來まして、何は養ひに成るか養ひに成らないとか云ふことも少々は分りまして、野菜より魚類の方が養分が多くして、魚類よりは

精進料理  
と雁鍋理  
胡蘿蔔牛  
勞と餘の  
指身の  
牛鍋  
牛鍋先生  
「タマ」に  
野菜を喰  
ふ時

又鳥獸の方が養ひに成ると云ふこと杯が一般に分つて來ましたが、其前は誰もそんなことは知りませんでした、併し其時分には人が鳥よりは魚を好み、魚よりは野菜を好みましたか、其時分には魚や鳥のうまいことを人が知りませんでしたか、其時分でも精進料理か雁鍋かと云へば、大概の人は雁鍋の方へ飛込みましたらう、胡蘿蔔牛勞か鰯の指身と云ひましたら、十人が九人までは鰯の指身の方を賛成しましたらう、今日でも人が多く牛鍋を喰ふのは養ひに成るからでありますか、旨からでありますか、十人が九人までは旨いから喰ふのでありませう、併し何程牛鍋が好物でも毎日牛鍋斗り喰つて居ますと、厭きて來まして「タマ」には魚や野菜が喰ひ度く成りますが、平生牛鍋の効能を説きまして、牛は魚や野菜よりは滋養分が多いと云ふのを名として喰つて居る事でありまして、胡蘿蔔や八頭へ手を出しては極りが悪う御座います、そこには又よい事があります、衛生學上で食物は何でも同じ物斗り食すのはよくないと云ふ事があります、故に、夫れを名として牛肉先生も時々米の飯や八頭へ手を出し掛けますが、實は體の爲よりは第一に始終喰つて居ると牛肉にも厭きまして「タマ」には野菜が喰ひ度なるのでありませう、配偶の事も下等動物は云ふも更なり、人類社會に於ても今日の歐米諸國の人民の様な開

配偶の事

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す

支那人が  
西洋の開

子を設け  
ること

「ユーナ  
ツク」

化した者の中には、人々我が好む者と夫婦に成るのが通例であります。封建時代に行はれました慣習の様に、當人同士は何程嫌つて居つても、之を夫婦にすれば行末の爲によからうと、親や親類が思ふに任せて、無理やりに夫婦にしてしまふ様な慣習を何時までもやつて行くのが世の爲に好いことでありませうか、人々の好きに任せて置いてもらひ度いと思ふ人が男にも女にも多いことだらうと思ひますが、さうではありますまいか、又子を設けることは如何でありますか、國家隆盛の爲や優勝劣敗の理杯を考へて人口を増すのが吾人の義務だ杯と云ふ心から子を設ける様な人は廣い世界に幾人あるで御座いませう、禽獸は申すに及ばず人間に於ても大概の者は子を設けるのは其様な考の爲ではありませんで、全く情欲の爲でありませうと思はれます、將來は兎も角も今日の世の中ではまだ中々彼のトルコ、ユーナツクと云つて陰翳を切つてしまつて、情のなくなつた者の様に人間が成りましたら、幾何國家の爲だと思つても、子を設ける事を忘れる人が多い事だらうと思ひます、そこへ參りますと彼の「ロー、オフ、セルフ、コンセルブ、グー、ション」即ち自保律と申すものは有難いもので、誰にも勧められませんが、人々が好い加減に子を設けまして、人民も絶えません様に成つて居ります、支那が西洋の開化に接して

化に動か  
ないのは  
「ユーナ  
ツク」が  
美人に心  
を奪はれ  
ないこと  
と同じこと  
「ユーナ  
ツク」が  
美人に心  
を奪はれ  
ないこと  
と同じこと

西洋の諺

勢一ツば  
い力一ツ  
むべし勉

人種改良  
のこと

も一向に動かないと云ふことは果して事實でありますか、随分疑はしいことな  
いではありませんが、先づ暫く夫れが事實だと致しました所が、夫れを或る人達の  
様に譽めるのは、陰翳を切つて情を絶つた「ユーナツク」が美人を見ても一向心を動  
さないのを譽める様なものでありまして、誠に譯の分らないことでもあります、「ユー  
ナツク」が美人に戀着しないのは、譽むべき事でも爲に成ることでもありません、今  
日本人が西洋の開化に感じまして、一心不乱に之を慕ひますのは、人情のある男が  
古今絶世の美人に戀着をしまして、之を我物にしやうとして、必死に成つて、骨を折  
るのと同じやうなものであります、昔から美人に戀着した爲に大なる奮發心を起  
しまして、大事業をした者の例は澤山ありますが、「ユーナツク」が「エライ事をしたと  
云ふ事は餘り聞かない事でありませう、西洋の諺に、氣弱な心では美人は手に入らぬ  
と云ふことがありますが、何急いでもさう急には開化は出来るものではないから  
チト支那の眞似をして、因循にやらかすがよい杯と、弱い音を出すよりは、我が好み  
に任せ、我が力に應じて、隣國には遠慮なしにすんぐと開進主義を取つた方が、自  
然の理に合つたことだらうと思ひます。

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す



動物

英吉利人

亞米利加人

西洋人と  
日本人と  
遠く過る  
たものは  
如何かと  
云ふ問題

印度一  
億千人  
の人口  
は

てるには及ばないこの様に思はれます、人種改良もやり度い丈はやつて見るがよいことの様には思はれます、自分より下等でない他國人の血を雜せてはならない、杯と云ふ定則は何處にもありません、却て動物でも植物でも他人を雜せないで、親類中斗りで婚姻をして居るとだん／＼しなびてしまふと云ふ説は、随分廣く行はれるものゝ様であります、英吉利人が彼のやうに善良な人種なるは、古昔から種々な血が雜つたことのあるのが一つの原因だと云ふやうな説もあつたかと思ひます、又亞米利加人が彼の様に活潑で鋭敏なのは、各國の人が移住して來て種々な血が雜つて新奇な人種を拵へるからだ、と云ふ語もある様です、勿論雜せるには餘り違つたものは悪くつて、少し違つたもの同士が善いと云ふことは、眞理のやうであります、西洋人と日本人とは違ひ過ぎて居るが、丁度好いものであります、併は、長く實地の場合に照した上でなければ何地どことも云へないことでありませう、併し「エリヤン」人と「非エリヤン」人より生じた人種は榮えないと云ふ證據よりは、隨分榮えることもあると云ふ證據の方が多し様に見えます、何んなれば千八百七十二年の人口調に據りますれば、英領印度の人民中一億一千一百万と云ふ實に驚くべき數の人民は即ち「エリヤン」人と「非エリヤン」人との間の子人種であると思ひ

「我」が無  
くなるの  
恐るゝ人  
あり

果してそ  
う成つた  
ら如何  
其時の我  
如何の我は

ますからで御座います、昔は斯る間の子人種も出來たが、今時は決して出來ないこと云ふ證據は未だない様に思はれます、又外國人と多く婚姻する者が出來ると「我」がなくなつてしまふ杯と心配する人がありますが、夫れは唯々理屈上の事でありまして、中々實際に「我」が無くなつてしまふ様に多く雜婚があらう杯と云ふことはないことでありませう、斯様な事を心配する様な心のある「我」共が存して居る中は、決して無いことでありませう、或は何時まで立てもそんなことは決して無いことかも知れません、併しそなたらどうだ、お尋ねなさるお方もありませうが、そなたらどうで御座いませう、其時の「我」はそんな心配をする様な「我」で御座いませうか、そんな「我」では決してなからうと思ひます、併し今の「我」は如何であるとお尋ねになりますか、も知れませんが、今の「我」に對しては其心配は空理上の心配であります、すこし申さなければなりません、何んなれば「我」を失つてしまふやうに外國人が多く「我」邦人と婚姻をする様な時勢でありますならば、「我」邦人と雜婚はしなくとも今の「我」は無くなつてしまふ様な事情であるに違ひはありません、尋常の場合でありますれば、雜婚が行はれても「我」が無くなる様な恐はなくして、幾分か人種改良の助とも成る様なこともあるだらうと思はれます、或は人種改良の爲には「我」を失ふ位

我を失ふ  
位に外人  
の原素を  
雜ぜざれば  
出づるは  
云ふに非  
ずと云ふ  
人種改良  
の道は一  
つにあり  
内外人の  
雜居も改  
其主義よ  
りは情の  
爲ならん

に外國人との婚姻が多く成つて、外國人の原素が多くなければ詮がないと詰る者もありませうが、人種改良の道は固より一つに止まらない事でありませうが、さう一つの道が熾に行はれなくつても好いことと思はれます、前にも申した通り人のすることでも理屈からするよりは、情の爲にすることが遙に多いことでもありますから、内外人の婚姻の如きも人種改良だからと云つて、我を失ふ様に俄に其數を増すことも出来ずまいし、又婚姻をする者は實際改良主義の爲に之れをするのではなくつて、情の爲にするのでありませうから、つまりよい加減に行はれるものであらうと思はれます、夫れを我が無くなるからと云つて雜婚をさせまいとするやうな人はあたり前に飲食をすると七年立てば、我を失つてしまふから食はず飲まらずにアルコール積にでも成つてしまおうとする者と同じものであります、又彼れ西洋人の盛宴を張れば、迎我れ日本人も盛宴し彼れ踊れば、迎我亦踊り懐中の冷熱水火も管ならざる身の分際をも憚らずして同一様に振舞はんとするも、果して害なきや甚だ疑はしき所なり、杯と加藤氏は云はれますが、其盛宴とは如何なるものでありますか、其踊とは如何なる所に行はるゝものでありますか、斯る盛なる宴會や舞踏の我邦にあることは、私は未だ存じない事でありませう、若し盛宴とも云ふべき

盛宴舞踏  
のこと

天長節の  
夜會

慶應義塾  
の總長  
の卒業式

師の事

元老院議  
官の馬車

ものは、天長節に 天皇陛下の萬歳を祝する爲に、外務大臣が内外の紳士を招いて開かるゝ所の夜會の如きものでありませうが、無暗に儉約主義を主張する族の眼から見ては、此の宴會の如きも、貧乏國の分際には過ぎたものだと思ひますか、もし知りませんが、尙も國交りをして居る程の國ならば、天長節の際に斯計りの宴會を開かない國は天下廣しと雖、何處の果にもありません、慶應義塾の總長が出来ても相應な宴會を催すでは御座いませうか、専門學校の卒業式でも花火の十本や二十本は上げますでは御座いませうか、盛宴杯と云つて悪口を云ふべき程のものは未だ一つもありません、好しや有つたにしろ海防費でもお出しなされる事の出来るお方が御自分相應なお催をなさるのであります、又踊の事も其通りであります、彼れ踊れば、迎我れ亦踊る杯と申すと定に仰山であります、二十人や三十人の者が鹿鳴筵杯で踊りますのは、元老院議官や奏任一等位のもの、がたくり馬車でこつこつとやるのと同じ様なものであります、こんなものを以て西洋と同一様な振舞だ杯と思ふのは抱腹の至りであります、幾何西洋と同一様な振舞をしやうと思ひましても、決して俄に出来るものではありませうから、其心配は決して入らないものであります、が、同一様な振舞をし度と云ふ心は、密のあるもの所では無く、却て良

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す

梯程の事を願つて  
針程の事を願つて

「シガール」のこの「ビール」の「杯」

いものだと思ひます、諺に梯程の事を願つて針程と申しますが、望は大きい程が良  
う御座います、或る新聞記者は奢侈を頻りに主張しますが、何様奢侈を悪いと云  
ふのは昔風の考の様に見えます、何が欲しい彼がしたいと、種々の願があります、  
ばこそ、人々が金もため種々な事業をも起しますが、斯る願がありません、金  
をためたり事業を起したりすることも今の様には行きませぬ、論者は人が幾何  
好きな事でも必ず善いことと分つたものでない事は、一切西洋から輸入してはな  
らない様に云はれますが、私の様な煙草も酒も嫌ひな者に云はせれば、彼れ西洋人  
の「シガール」をふかせば、迎我れ日本人も「シガール」をふかし、彼れ「ビール」葡萄酒を飲  
めば、迎我れも亦「ビール」葡萄酒を飲み、懐中の冷熱水火も管ならざる身の分際をも  
憚らずして同一様に振舞はんとするも、果して害なきや、甚だ疑はしき所なり、杯と  
申すべきではありませんか、殊に煙草と酒の爲に全國人民が費す所の金は中々貴  
紳がたまに催す宴會の入費如きものではありませんから、人の好みと云ふ事に構  
ひませぬに、唯々無暗に今日の人の考で、天下の爲に成ることだとか成らないこと  
だとか云ふ考を標準として論じました日には、「シガール」や「ビール」杯に向つて第一  
番に十字軍でも起さなければなりません、併し天下の事は理屈斗りでは行かん

好き不好き  
でやること  
と多し

支那の開  
化の好  
の依る開  
西の採る開  
の亦好  
の力依る  
爲なり

自保律の  
制限

應化出來  
れば倒  
れざる  
得ず

ものにて、何事も人の好き不好きに大いに依るものであります、ならば、凡眼から見  
ると不爲な事や餘計な事の様に見える事にて、世に大に行はれることが幾何も  
あります、されば支那と交際を始めれば、支那の學術慣習の中にて、我邦人の氣に入  
つたものは、理屈には係はらず、すん／＼と入つて來ます、西洋と交際を始めれば、西  
洋の學術慣習の中で、我邦人の氣に入つたものは、すん／＼と入つて來ますが、寔に  
自然の勢でありまして、彼の遺傳に依て有する所の應化力の然らしむる所であり  
まして、然も自保律の許す所の事でありませうと思はれます。  
論者は或は、自保律は大體上に於ては間違のないものなれども、外國の事情は常に  
同一様のものでは居らずして、多少の變換のあるものなれば、前には我が好む事が即  
ち我が爲になりしなるも、今は却て好むことが不爲に成る様な場合も時々起る事  
もあるべければ、自保律も一概に頼みにする譯には行くまいと申されませう、成る  
程仰せの通りであります、彼の應化力の多少の大切なるは、即ち此所で御座いま  
す、久しく一定の情勢の中に生活して居りましたもので、俄に替へ難い様な慣習の  
固着して居ります生物でありましたらば、必要なる應化が充分に出來ない爲に遂  
に倒れてしまはなければなりません、若し能く應化が出來れば倒れる事もなし

日本人の性質が容易く慣習を替へるものなる故でありませう、而して支那の開化でも西洋の開化でも優つたる開化に接すれば、さつさと之を利用する如き性質の我邦人に存して居るのは、自保律にも進化の大法にも全く合ふたものにて、決して憂ふべき事ではありません、若し支那の開化に接しても改良することを知らず、西洋の開化に接しても因循して改良に遅々として居る様なものでありましたらば、國家の存在も元來無いことであらうと思ひます、加藤氏は我邦人が今日西洋の開化を採用するを急ぐ有様をば深山幽谷の空氣は流通せず、日光は透射せざる地の松樹を俄に海濱の空氣流通し日光隈なく透射するの地へ移すことに譬へられました、今日日本が西洋の開化を採用することに汲々たる有様を此松樹に比するは甚だ當らないことであり、嘉永年間にペルリが黒船に乗つて日

海濱に移されたり

今日の問題

我邦人の性質が容易く慣習を替へるものなる故でありませう、而して支那の開化でも西洋の開化でも優つたる開化に接すれば、さつさと之を利用する如き性質の我邦人に存して居るのは、自保律にも進化の大法にも全く合ふたものにて、決して憂ふべき事ではありません、若し支那の開化に接しても改良することを知らず、西洋の開化に接しても因循して改良に遅々として居る様なものでありましたらば、國家の存在も元來無いことであらうと思ひます、加藤氏は我邦人が今日西洋の開化を採用するを急ぐ有様をば深山幽谷の空氣は流通せず、日光は透射せざる地の松樹を俄に海濱の空氣流通し日光隈なく透射するの地へ移すことに譬へられました、今日日本が西洋の開化を採用することに汲々たる有様を此松樹に比するは甚だ當らないことであり、嘉永年間にペルリが黒船に乗つて日

本に到來しました時に當つて、是まで空氣流通せず日光透射せざる岩の間に久しく棲息しました日本と云ふ松樹は、一朝霹靂の爲に其岩を碎かれ、空氣の流通は自由になり、日光の透射の良くなつたことは又如何ともすることの出来ないものであります、今日の問題は日本と云ふ松樹の空氣不通り日光透射せざるの地より、空氣流通し日光透射するの地へ移すべきや否と云ふことではありません、今日の問題は空氣不通り日光透射せざる地より空氣流通し日光透射するの地へ、既に移された日本と云ふ松樹は、此新なる情勢の中に居て能く生存して居れる程に充分なる應化の出来るものなるや否と云ふ事であり、新なる情勢に接して能く倒れないものは之に應ずる事の出来るものであります、されば我邦人民の習慣を替へ易き性質は其生存を害するものには非ずして、却て之を助けるものであります、加藤弘之君の演説の如きは進化の眞理に基づいたるものゝ様には見えませんが、其實は全く之れと背反するものと思はれます、併し加藤君は今後尙ほ深く此問題を研究なさらうとおつしやります、私も益々研究を致す積りであり、此問題の如きは實に國家の運命にも關係する所のものであります、苟も我邦人たるものは如何なる人と雖も必ず深く研究すべきの問題だと思ひます、聴衆諸君は唯々一席

加藤弘之氏の東洋の一大問題論を駁す

の演説とお聞き流しになりませすして、眞理は果して孰れにありますか御研究下さらんことを願ひます。

扱最後に一言申さなければならぬことが御座います、以上演べました通り、我邦人が兎角急劇なる改進黨を採りますのは、全く遺傳の然らしむる所であり、このことは固より疑ふべからざる所であり、又我邦人中に種々な名を附けて因循主義を主張する者のありますのも、同く遺傳の然らしむる所であり、彼らは因循を唱へ我は改進黨を唱へる間に即ち適宜なる應化が行はれることと思はれます、急進に過ぎるのも遺傳でありますれば、因循に流るゝのも遺傳でありますから、急進と因循とは大なる違であります、ごちらも遺傳であつて見ますと、彼の英吉利のスペンセル氏にでも云はせましたらば、加藤氏と私との間には全く「レノンシリエイション」即ち中直りが出来たと思はれます。

## 社會結合三六一統露西亞の大恩

(明治二十二年二月)

最大必要  
人口少な  
ければ分  
業なし

物が大きく成ることは進化の大法の一箇所であり、社會の人口が増加して國が大きく成ることは、開化進歩の爲には必要なことであります、社會に人口の少ない中は分業と云ふことは御座いませんで、誰も銘々我が必要なる物は自身に之を作り、我が必要なることは自身に之を爲さなければ成りませんが、人々が自身で何も彼もすると云ふことは、誠に不經濟な仕事の仕方であり、手で仕事をするよりは足で驅る方が得意でも、郵便脚夫杯が入らない時代には足計で食て行く譯には行きませんから、下手乍も手を使って釣道具でも製造しなければなりません、弓矢を拵へる事は上手で禽獸を射止る事は下手でも、唯々弓箭計り拵へて居ては生活が出来ませんから、下手乍も鳥獸を射ることもしなければなりません、是は誠に不經濟なる仕事の仕方であり、然るに人口が少し多くなつて來ますと、人々が我が得意な事而已に従事して居ても食へる様に成つて來ます、釣の上手な者は釣れた魚を足の達者な者にやつて使をしてもらふことが出来、弓箭を拵へることの

人口殖る  
て分業起

開化の爲

多くの事  
業に従事  
するもの  
は一事に  
熟達する  
能はず

地は土  
の廣く  
なるの  
必要

人口増加  
領地増大  
人口増加  
に二様の  
法あり

上手な者が弓箭を拵へてやれば射ることの上手な者が鳥獸を射て呉れます、何事も都て其通りで最初には人が自身に家も造り、衣服も作り、弓箭も造り、獵も爲せし譯でありましたのが、人が殖るに隨て、或は家を造ることに而已従事し、或は着物を織ることに而已従事し、或は耕作に而已従事し、或は弓箭の製作に而已従事し、或は獵漁に而已従事する様になつて、銘々我が得意なる一事業に而已従事すれば、他の事は又他の人が夫々得意に任せて一事業宛營んで、夫れで事業の交換が出来て、仕事は儉約に成つて來まして、以前には一匹食へた魚も二匹食へる様に成り、一枚着られた着物も二枚着られる様に成ります、又自身に何も彼もしなければなりません、中には一事に心を凝すことが出来ませんから、何事も粗略により外は出来ませんが、其れ故に熟練するの改良を加へるの云ふことは中々六ヶしいことでありませんが、始終一事業に従事して居る様に成ります、熟練も附いて來ますれば、改良にも氣の付く様に成て來まして、段々に時が省けて物が良く成つて來ます、開化進歩の爲には分業と云ふことは實に必要なことでありますが、分業の行はれるには先づ人口の増すのが必要であります。

土地が廣く成るのが又必要であります、土地が廣くない時は一社會の者が皆河の傍とか海岸とか森の中とか一様な地勢の所に生活して居らなければなりませんから、人々が左程異つた事業を營むことは出来ませんが、土地が廣く成りますと、山の所もあれば河の所もあり、平地もあれば海岸もあつて、山に近い者は獵に従事し、海邊に住む者は漁を業とし、平地に住む者は耕作を營みます、土地の性質に隨つて夫々違つた産物があることでありますから、其所此所に依て住民が違つた事業を勉めますから、分業の法が大に行はれて、事業の儉約が出来て、次第に色々な能力が發達して來ます、土地が廣く成つて、地勢が種々様々にて、色々な産物が出来る様な地方の多くなるのは、開化進歩の爲には實に必要な事でありませぬ。

此の土地の廣く成ると云ふことは多くは人口が増加するに伴つて出来ることであります、而して、人口の増すには二通りの道があります、内部から増すのと外部から増すのとがあります、即ち、一つは社會中死亡の數より出産の數の多き爲に蕃殖するので人口が増加する法であります、又一つは數個の社會が合併するので人口が増加する法であります、蓋し野蠻時代の如く死亡の多き時に於ては内部蕃殖法而已にては人口の増加は長き年限を要することでありませぬから、急に人口の増す

には是非合併増加の法でなければなりません、而して人口が蕃殖しますれば、従前の土地丈では住み切れませんから、邊の土地へ段々と蔓延して行きまして、領地が次第に廣く成りますが、合併増加に至りましては、漂泊時代以後は社會を合併するは即ち土地を合併すると同時にに行はれることでありますから、此増加法は極めて便利な法であります。

社會合併に隨意強迫あり二種

羅馬國 歐羅巴諸國

支那 日本

社會合併には隨意の者と強迫の者とあります、數個の社會が互に我が都合の爲めに結合して、一社會を爲すことの彼の亞米利加の合衆國の如き者は即ち隨意の合併にて、甲乙の二社會が戰爭を爲して其一が其他の爲に打勝たれて、遂に壓服せらるゝ所と成つて、其二社會が合併して更に大なる一社會を爲すに至る如きは強迫の合併であります、古より社會合併は多くは強迫的の者にて、強大なる國の出來たるは大概皆強迫合併の力であります、昔羅馬國が古今無雙の大國と成つたのも、中古歐羅巴各國が封建時代を抜け出て、夫々國の統一を遂げて、今日の如く英佛獨露等の如き者の出來るに至りたるも、一として優勝劣敗強者吞弱の強迫合併に依らない者はありません、支那の如き大國の出來たのも固より強迫合併の爲めであれば、日本の如き、小國でも海内統一したのは是れ又強迫の力であります、若し世の中

合衆國人の純粹結合も非ざるもの

合衆國南北戰爭

中に強迫合併と云ふことがなく、社會の合併は一途に隨意的の者に依る譯でありましたらば、今日天下に在る様な大國共が今日迄に出來ましたらうか、中々覺束ないことでもあります、知識が餘程進まなければ、合併の利益を悟つて、異なる利害の中に同じき利害を認め知つて、睦間敷多數の人員が結合して、一大社會、一大國を爲すに至る事は出來ないものであります、古今最も著しき隨意結合の例は前にも申しました亞米利加の合衆國であります、其合衆國の如きも純粹の隨意結合國とは云はれない様に見えます、其實は、今日の如く一大國を爲して居るのは、大いに強迫の力に依る者と思はれます、諸君は亞米利加の南北戰爭と云ふ者を御存知でありますか、世間には南北戰爭と云ひますと、南亞米利加の人民と北亞米利加の人民とが戰爭でもしたことの様に思つて居るものもある様ですが、彼の南北戰爭と申すのは合衆國中の南部と北部との間に在つた戰爭のことであり、北亞米利加には合衆國の外に英吉利領亞米利加並にメキシコ等の國があります、又南亞米利加にはブラジル、チリ、ペリユー、其他の國がありまして、其南北諸國の人達は皆亞米利加人ではありますが、今日我邦で普通に亞米利加人と申して居りますのは、合衆國の人の事であり、其外の亞米利加人はカナダ人が少しは來て居りますが、其他は

南北戦争  
直接の原

來て居つても極く僅でありませう、即ち彼の亞米利加の南北戦争と申すは、今申した通り、今日我輩が亞米利加人と普通に我邦で呼んで居ります人達の本國即ち北亞米利加中の合衆國の南部と北部との間に起つた確執のことであり、其戦争は直接には南部と北部との間に、奴隸の制度を廢すべし廢すべからずと云ふ異論から起つたものであります、合衆國の南部諸州には昔より奴隸として亞非利加の黒人を使役するの習慣が行れて居りました故に、南部諸州では奴隸の制度を以て何より便利の法と思つて居りました、處に北部諸州には奴隸を使役するの風習がありません、故に、同じ人間を奴隸として使役するのは天理に背いたこと、決してある間敷きことだが、殊に亞米利加合衆國の様な自由主義の國に斯る人権剝奪制度の行はるゝのは不都合千萬のことだから、速に廢すべしと云ふ議論が段々熾に成つて來まして、終にアブラハム・リンコルンが千八百六十年に大統領に選ばれました上に於ては、非奴隸論が中央政府に行はれさうに見えました故に、サウス・カロライナ州を初めとして、ミンシッピ、フロリダ、アラバマ、ジョージヤ、ルウイジアナ、テキサス等の南部諸州は合衆國の仲間を抜て、新に獨立政府を立てました、實に千八百六十一年二月八日のことでありました、而して、大統領にはジェツフェル

結局自由  
の束縛

アイルラ  
ンド  
アルサス  
ロールイ

ソン、デビス、副統領にはアレキサンデル、スチーブンスが選ばれました、南部諸州中にありたる中央政府の兵糧彈藥等は悉く之を沒收しました、是に於て南北戦争が起つて、遂に千八百六十五年四月九日に南軍の大將軍リーが、アッポマトックス、コールト、ハウスに於て、グラント將軍に降参しまして、程なく南部が全く北部の爲めに征服せられて、戦争の止むに至りたるまで、凡そ四年餘掛りましたが、此戦争は結局南部が自分の好きな自由が出来る様に別に分れて國を立てよやうとしたのを、北部がさうはならぬと云つて、非常な財産と人命とを費して、どうく、力づくで押へ付けて仕舞つて、無理往生に同國の仲間を爲して置いて仕舞つたのであります、されば合衆國の如く、自由を唱へ公平を旨とするの國と雖も、今日一大國を爲して居るのは、隨意の結果ではなくつて、強迫の結果であります、自由主義を以て天下に誇る亞米利加の合衆國にして、既に斯の如く、壓制強迫の力でやうやく分裂を防いで居るのであります、況んや、亞細亞、歐羅巴の諸國に於ては、一として、今日の團結を其初強迫に御蔭して居ない國はありません、其れ而已ならず、今日と雖も強迫を廢したらば、分裂を來す如き國が幾許もありませう、アイルランドは如何であります、好んで英吉利に附いて居るのでありますか、アルサス、ロールイヌは如何であります、



佛蘭斯から裂かれて獨逸の領地に成つたのを悦んで居りますが、ポーランドは如何で御座いますか、露西亞や獨逸や奧地利の領分に成つて居るのを悦んで居りますか、此等の國は強迫の力を取除けても、其主國に悦んで従つて居りませうか、決して悦んで従つては居りませうまい、我が意の如くに行つたらば、分離して獨立國を立てるでございませう。

古來各社會が段々に長大に成りたるは、大概皆な強迫結合の力に依る事であり、すが、其強迫にて結合せられたる分子を、其後も能く結合せしめて置くのは、亦強迫の力であり、凡そ團結は分子の親和力に依るか否らざれば、外からの束縛に依らなければなりません、ガラスの水のみの如くに分子の間に親和力の強いものは別に「タガ」もありませんが、桶の如くに親和力に乏しい木切を組合せて置かうと云ふには、是非外から「タガ」の力で壓さなければなりません、未開時代の人民程親和力に乏しう御座いますから、未開社會程壓制束縛が強くなければなりません、實際に就いて各社會の有様を見るに果して其通りであります、去乍ら何故に丁度都合好く未開社會程壓制束縛が克く行はれるかと申しますに、そこには又色々な甘い譯があります、先第一に、凡そ壓制束縛の行はれる爲めには、戰爭をする敵が在ること

×  
ド  
ポー  
ラン

未開人は  
親和力に  
乏し故に  
壓制束縛  
が必要

壓制束縛  
が行はる  
原因

が必要であります、競争をする敵があればこそ無智なる野蠻人も團結をするに至りますが、恐るべき敵が無い時は野蠻人は中々多數團結して一大社會を爲して居ることは出来ません、何れの國でも何時の時代でも戰爭の流行しない所には團結が弱う御座います、前にも申した通り、分子の間の親和力が薄う御座いますから、團結の方便には即ち壓制束縛が行はれます、即ち競争には團結が必要で、團結には壓制束縛が必要でありますから、そこで競争が行はれ、戰爭が流行する所に於ては壓制束縛が行はるのであります、戰爭社會に在ては秩序が整つて、克く號令の行はるゝ事は何より必要なことであります、秩序が整はず號令が行はれない様な社會は競争に於て打勝つことは出来ません、されば戰爭流行の時代に於て克く生存して居らうと云ふには、壓制束縛が必要であります、殊に未開時代に於てさうであります、未開人と云ふものは、知識が乏しく、情緒が發達して居りませんから、多數我が心よりして一致協力するの力に乏しく、兎角我儘氣隨なる傾向があつて、人々只々我を恃みますから、秩序ある働を爲すことは出来ませう、皆別々に働くのが習ひであります、然るに團結たり、秩序たり、競争上必要でありますから、隨意團結の行はれない様な社會に於ては、壓制束縛で團結が行はれる様に成つて居ります、戰

争の爲めには、常に別々なる數多の社會が往々團結して、一樣なる壓制束縛を受けるに至ることさへあります。

壓制束縛  
は何時不  
要なるや

右に述べました通り、未開社會には壓制束縛が甚だ必要であります。好くしたも  
のには、丁度壓制束縛の必要な社會の人は壓制や束縛を厭ひませず、壓制や束縛を  
厭ふのは他の社會と競争と云ふことが少しも無くつて、團結だの協力だのと云ふ  
ことの入らない様な社會なるか、但しは知識も情緒も發達して居て、壓制束縛を受  
けずとも、克く團結協力の出来る如き社會であります。壓制束縛の必要なる度と壓  
制束縛を好む度とは丁度正比例に成つて居ます。若しさう成て居なかつたらば如  
何でありませう、壓制束縛が必要なのに壓制束縛を厭ふ者が多い様な社會は存在  
して居ることは出来ずまい、英吉利人や亞米利加人が御承知の通り壓制嫌ひな  
のは、其國人の間には壓制が入らないからであります。佛蘭斯人や獨逸人が壓制を  
其れ程厭はないのは、即ち其國人には壓制が必要だからであります。英吉利や亞米  
利加合衆國の様な國でも、壓制や束縛が必要に成つて來ますと、人々が追々に壓制  
や束縛を主張する様に成つて來ます。近來英國に於て教育、衛生其他都ての事に就  
いて、干涉主義を唱へる者が多く成つて、干涉主義が大に行はれる様に成つて來

英人  
佛人  
獨人

まして、家屋、飲食、種痘、車賃、移住、圖書館、芝居並に雪隠の事までを政府にて世話を焼  
くがよいと主張する者が多くなつて、段々と其主義の行はれる様に成つたのは何  
んの故でありませうか、全く近年外國との競争が熾に成つて來まして、今までの様  
に英吉利は島國で大陸のことには一向關係が無い、外は如何でも我は我だと、取澄  
して居ることの出来無く成つた爲であります。

英雄崇拜

又壓制束縛の入る様な社會には英雄崇拜と云ふことが行はれまして、壓制束縛の  
助を爲します。殊に未開人は英雄崇拜心に富んで居ます。未開人は人並勝れた智者  
や勇者を見ますと神の再來だとか神の化身だか云つて、非常に崇拜するのが習ひ  
でありますから、斯く神として崇拜する人から壓制束縛を受けるのは彼等の厭ふ  
所ではなくつて、彼等は却て之を好む所であります。彼等は斯る生神の爲めには身  
命をも抛棄べく、斯る生神の爲には如何様な取扱を受るも、只々恐れ入つて居る  
べきことと思つて、慎んで居ります。閉口して居ります。

祖先崇拜

祖先崇拜のことも壓制束縛の爲めには甚だ都合の好いことでもあります。祖先を神  
として崇拜する時に際しては、祖先の云ひ付けは即ち神の云ひ付けにて、人々皆な  
之を固く守つて、祖先の怒を受けぬ様にと願ひます。英雄の命令は特り其の存生中

に行はれます而巳ならず、死後に於ても尙ほよく行はれます、君王が我が新たに出不命令だと云つて之に従はしめんとするに於ては、容易に服従せしめ難き如き場合と雖も、祖先の命令なりと云ふに於ては、人々一も二もなく服するに至る如き事情であります、支那日本等の如きは祖先崇拜が今日も尙ほ甚だ強く行はるゝ國でありまして、祖先崇拜の事が民を御するに大なる助を爲して居る國であります、國の秩序は大に其力に依つて居ることでありませう。

近世の  
隨從の  
結意の  
大に外  
の力に  
依る

日本、  
伊太利、  
逸

日本維新  
の大業

さて、生存競争の法にて競争の爲に團結は必要でありますから、其分子に引着力がありません時は、外よりの強迫力の徳にてうまく團結して行く様に成つて居ますが、今日に於て行はるゝ稍々隨意の一統だの、團結だのと云ふものと雖も、外勢の力に依るものが多う御座います、其事の最も見易い證據が茲に三つあります、其三つの證據と申すは即ち日本、伊太利、獨逸の三箇國に近年首尾よく行はれた一統の事でありませう。

日本は古來一統國ではありましたが、統括の力は極めて弱う御座いまして、徳川時代に於ても強藩諸侯は往々獨立國の如き勢を逞しうしました、領内の制度は其國々に依つて各々異つて居りまして、中央政府の統御は中々行届き兼ねる様な次第でありましたが、是れは封建制度の止むを得ざる所にして、決して一朝一夕に止むべきものではありませなんだ、武家の制たり、諸侯の制たり、根の強く張つた制度にして、之を行はれしむる事情があつて行はれしめたものでありますから、其事情が變らない以上は、決して止むべきことではありませなんだ、若し事情が變らざるに於ては、足利氏に織田氏が續ぎ、織田氏に豊臣氏が續ぎ、豊臣氏に徳川氏が續ぎ、徳川氏には鳥津氏若くは毛利氏が續がんとする様な譯にて、將軍家の更迭はあり、政權は種々の手に移り換ふことはあるも、諸侯を無くなし、國に獨立國の如きものゝ夥多あるの國體を一變じて、政權をして全く中央政府に而已歸さしめ、全國を眞の一統に至らしむることは決して出来べきことではありませなんだらう、然るに維新の際に斯る大變革を行ふことの左まで六ヶしき事にあらざりしは何故でありませうか、武家も諸侯も案外もろく廢されたのは何の故でありますか、徳川を片付けてしまつた後に鳥津公とか毛利公とか云ふお方が將軍にお成りなさらなかつたのは何の故でありますか、徳川方の族が多く官軍に抵抗しなかつたのは何の譯でありますか、徳川を亡ぼした後に強諸侯達が我こそ天下を執らんと互に争つて戦争をしなかつたのは何故でありますか、北條氏の後には足利氏がありしも、徳川氏の

維新の  
業易な  
りし理  
由

勤王心強  
くなりた  
る故に統  
持心發達  
したる故  
か其原  
外交其原  
水戸者流  
勤王家の

昔時の勤  
王主義の  
時勤王近  
主の勤王  
由たる理

後には斯るものゝ起らなかつたのは何故でありますか我邦人の勤王心が強くなつた故だと云ふ人もあるかも知りませんが、或は一統を好む心が發達した故だと云ふ者もありませう、成る程勤王心も統括を好む心も近世大いに強く成つたことではありませうが、此等を強くしたのは別に原因は無いのでありますか、必ず其原因があらうと思ひます、其原因とは何んでありますか、西洋諸國と交通の開けたことでありませう、固より元弘正慶年中の如く、近世に於ても水戸者流の如き勤王家は外國人の來る來らざるには係はらず、我邦に澤山ありましたが、何故に昔時の勤王主義は遂に行はれざりしも、近時の勤王主義は目出度行はれしかと云へば、是れ全く西洋諸國と云ふ日本全國に對する強敵が現はれ出でたる故でありませう、全部に對する敵がある時は、内部で同士討ちをやつて居る邊はありませう、若し斯る場合に於て愚にも同士討ちをやつて居る如き者ならば、即ち漁夫の獲ものに成る者でありませう、徳川方の者が左まで抵抗をしなかつたのも、徳川氏の片付いた後に徳川氏に替はらんとする如き者の起らなかつたのも、廢藩置縣の容易に行はれたのも、西洋諸國と云ふ恐ろしい敵が出來た爲めでありませう、思慮ある人達が徳川氏を倒すの必要を感じたのは外敵の爲でありませう、思慮なき輩が徳川氏を憎む

攘夷鎖港

ことの甚だしく成つたのは、徳川氏が攘夷鎖港をやらなつたからでありましたらう、攘夷鎖港と云ふ看版が維新を何程助けたか云ふことは少しく考のある者は皆な知つて居る事でありませう、實に一時は勤王即ち攘夷鎖港、討幕即ち攘夷鎖港と云ふ勢ではありませう、思慮ある人達は固より最初から攘夷鎖港杯と云ふことは決してやらない積りであつたのでせうが、下の關價金杯のことを悦んで居つた者は一人もありません、勝てさうなら随分外國を相手にして一戦争やらかしたいと思はなかつた者は多くはあります、彌々勝てるぞ知つたら、随分攘夷鎖港と出掛けたかも知れませんが、戦争は野蠻時代の事だ、戦争杯をする者は大馬鹿だと云つて居るべき天下に成つたとも、まだ思はれませんが、思慮ある者が攘夷鎖港をやらうと云ふ氣にならなかつたのは、とても戦争をしても勝てさうに思はれなつた故でありませう、されば、愚なる者は徳川氏を倒したらば、攘夷が出来るだらうと思つて徳川氏を倒し、思慮ある人達は王政復古で真に海内を一統させてしまはなければ、國の獨立も覺束ないと思つた處で、維新が彼の通りに行はれたのでありませう、西洋人の來れる來らざるには係はらず、勤王家は多くあつたには違ひありませんが、人々が國家の爲而已を思つて、少しも私欲の爲に心を奪はれなかつたの

は、全く西洋諸國と云ふ恐しいものが現はれ出たからの故であります。西洋人の恩は實に莫大なことであります。我邦維新の事情の如きは、國の一統社會の結合は外敵の有無に大に依るものなることを見るに足るものと思はれます。次ぎには、近世伊太利一統のことを述べますが、伊太利の事は中々込入つて居ますから、少し精しくお話を致しませう。

伊太利

外國の干渉  
十八世紀

近世伊太利一統の如きも、亦上に述べました真理を證するに足るものであります。伊太利と云ふ國が近世全く一統しましたのは千八百七十年にナポレオン第三世がセザンにて降参をしまして廢帝となりました時に當つて、ヴィクトル、エマニエール王は豫てナポレオンと結んだ約束は既に無効のものと成りました故に、伊太利半島の秩序を保つは我が義務だと申して、遂に羅馬へ兵隊を繰り込みまして、法王の政治權を奪つて仕舞ひ、法王は只々カトリックの宗教上の頭にして、宗教上の頭たるの權理より外には權理は無きものと爲しまして、遂に伊太利政府を羅馬に移しました時に於て始めて成就したものであります。伊太利と申す國は元來數多の獨立國に別れて居まして外國から一方ならず干渉を受けた國でありました。第十八世紀の頃にはネイブルス、シ、リー及び其他バルマ、ビヤセンザ、カスターラ等數

西班牙「ボール」

ウイヤナ會議  
ウエニス及びミラ

奧地利の干渉  
遂に伊太利を統一するものなり

神聖同盟

フランス第一世

個の小國は西班牙「ボール」家の所有でありました。ミランは奧地利の所有でありまして、トスカニーも實際は奧地利の所屬同様でありました。ナポレオン第一世の時には伊太利の多分は即ちナポレオンの所有に成りました。千八百十五年のウイヤナ會議にてウエニスとミランは又奧地利の所有に成りまして、即ちロムバルド、ヴェニシヤン王國と云ふものに成りました。トスカニー、モデナ、ネイブルス、サルヂニヤ及び法王の領國等は皆な舊の領主に復しました。されば伊太利の政治に奧地利の干渉することは又一方ならないことと成りました。其干渉こそは伊太利をして遂に一統に至らしめたものであります。佛蘭斯革命以來歐羅巴諸國の人民は自由を慕ふ心が餘程強く成つて、憲法の設立を希望する様に成りましたが、其れに引替へて千八百十五年九月二十六日に露西亞のアレキサンドル皇帝が主唱者にて普魯斯のフレデリック、ウィルヘルム第三世、奧地利のフランス第一世が左袒者で諸國の帝王を招集して神聖同盟と云ふ盟約を結んで、臣民を制御するにも外國と交るにも必ず耶蘇教の正道と慈恵とに依るべしと誓ひましたが、此神聖同盟こそは、最初の善き主意には全く反して、其後久しく壓制政略の機關と成つたものであります。奧地利のフランス第一世と申した

メツテル  
ニツチ  
伊太利に  
對するメ  
ツテルニ  
ヘツチの考

佛蘭斯の  
支配より  
舊領主に  
復したる  
爲の苦み  
新規の者  
となる

佛蘭斯の  
支配より  
舊領主に  
復したる  
爲の苦み  
新規の者  
となる

ロムバル  
ヂーの制  
度を手本  
とするに  
メツテル  
の約束  
ナンドと  
メツテル  
の秘密  
ニツチの  
條約  
新設の  
王國を

帝は少しでも人民の自由を増したり憲法政治に成りさうなことは頑固に拒まれ  
ました。が、當時地利の宰相でありました彼の高名なるメツテルニツチと云ひまし  
た人も至つて自由嫌ひな人でありまして、特り獨逸國而已ならず歐羅巴大陸何れ  
の處にても人民の自由を増さうとする企てを見ますと少しも用捨なしに潰さう  
としました。而してメツテルニツチは伊太利は獨逸同様我が特別に世話をすべき處  
と思ひましたものですから所有方法を以て自由を壓へることを勉めまして、出版  
の権理を束縛したり、憲法の主唱を制したりしました。が、殊に力を極はめて伊太利  
一統の希望を妨げました。

佛蘭斯の支配からして舊領主の配下に復したる爲に感じました苦みは獨逸より  
は伊太利の方が強う御座いました。何んとなれば他の國に於てはナポレオンに従  
つても國主は皆な在來の者でありましたが、伊太利に於ては在來の國主は皆な廢  
せられて新規の者と成りました。其上に伊太利に於ては法律上萬民同等なること、  
宗教の自由、財産所有の自由、營業の自由等は佛蘭斯革命の結果として到る所に行  
はれました。舊來の不完全なる裁判法は「コード、ナポレオン」で以て改良せられまし  
た。佛蘭斯の勢力が熾でありました時には惡習も多く改まりました。小國政治のこ

せつきも僧侶の壓制も都て止みました。佛蘭斯の制度は人民の爲に成るものであ  
りましたから、再び舊領主が伊太利諸國を支配する様に成つても手を着けず、其  
儘にして置いて、其基礎に依て民權制度を立てる様にすればよいのに、左はせずし  
て二十年程昔に歸へつて舊慣に復し、否らざるも我が權威を助ける如き制度而已  
を採用することゝ爲しました。

若し一度他の伊太利諸國に代議主義や自由主義が行はるゝことになりなれば、  
自由の毒は是非ミラン及びヴェニス等へも入り込んで來ます。違ひは有ませな  
んだ。故に此の危難を妨ぐる爲に千八百十五年六月十二日にメツテルニツチはネ  
イブルスの王フェルチナンド第四世と秘密條約を結びまして、ロムバルヂー制度  
より寛大なるものは一切採用し、ロムバルヂーの制度を以て我が手本とし、や  
うと云ふ約束をフェルチナンドにさせました。フェルチナンドはミューラーの支配  
中に行はれたる佛蘭斯主義の事は一切之を廢しました。而已ならず、ネイブルスと  
シシリを合併してニシリーの王國と云ふ一個の國に爲しまして、千八百十二年  
に設立に成つたシシリイの自由憲法を廢して、全く擅制主義でやつ付ることに致  
しました。併し一旦自由の空氣を吸つた者がいかでか斯る取扱を受けて黙つて居

メツテ  
心配

自由主義  
新聞雜誌  
を禁止し  
其記者を  
禁錮す

叛逆、罪  
惡の虐勢  
防禦同盟

英佛二國  
論異

りませう、シシリ人は此所置に服しませなんだ而已ならず、自由主義を主唱する者がネイブルス人中にも多く成つて來ました、之を見ましてメツテルニッチは此勢では遂にミランまでが加ふれるであらうと其豫防の爲めにロムバルデー及びヴェニシヤ等に於ては嚴しい所置を施しまして、伊太利は新生活を始むべきものなりと云ふことを主唱する如き書物の賣買を禁じたり、荷も自由主義の新聞雜誌と云へば悉く之を禁止し、其記者を禁錮する杯壓制の所置而已を施しましたが、尙ほ斷然としたる所置を行はうと云ふ爲に、埃地利のトロポーに埃露、普三國の君を集めて、叛逆並に罪惡の虐勢防禦の同盟と云ふものを結ばせました。

ライバツクの會合に於ては革命抑制の爲には埃地利はネイブルスへ兵を遣し得べき而已ならず、必要の場合に於ては露西亞も軍勢を繰り出すべきことと爲しました、此事にはサルチニヤ、羅馬、トスカニー、モデナ等の公使も同意しました、英佛の二國は異論を唱へましたが少しも構ひませんでして、其れよりして埃地利は彌々軍勢をネイブルスへ繰込みまして自由黨を壓倒しました、尤もビードモントの如く、佛蘭斯及び瑞西に近い國の人民中には元來自由の精神が多く有ました故に、此の時に當つて若き者は貴族と雖も伊太利の獨立を熱望致しまして、佛蘭斯やスベ

埃地利と  
戰爭を爲  
すさんと欲

首領なく  
一致なき  
爲にメツ  
テルニツ  
チの勝と  
なる

革命を起  
させたる  
は外國の  
干渉革命  
を妨げた  
るも外國  
の力

伊太利外  
國を惡む  
獨逸人亡  
ぼすべし

インの自田黨と結んで頻りに埃地利と戰爭をしやうとしました、さればミランの不平黨と申し合せて隱謀を爲してミランから埃地利人を追拂ひ、ロムバルデーをサルチニヤと合併させて伊太利北部に強大なる王國を拵へて、伊太利一統の基礎を拵へましたが、未だ時が至らなかつたことと見へまして、遂に適當なる首領を得ることが出來ませなんだ而已ならず、規則正しい一致の働がありませず、熱心な者は重に少數の教育ある人達而已にして一般人民は未だ熱心に成りませなんだ故に、折角出來掛つたことは中途に破れて、遂にメツテルニッチの勝と成りまして埃地利の勢が伊太利に熾に行はるゝ様に成りました、伊太利人が革命を企てる様に成つたのは重に外國の干渉と壓制との爲でありましたが、革命を妨げるものも亦外國でありました故に、さてこそ伊太利半島の自由と一致とを妨ぐるものは唯々外國の政權だと云つて伊太利人は外國の政權を殊の外惡む様に成りました、獨逸人亡すべしと云ふことは世人の一般に口にする所と成りました、當時獨逸人と申したのは即ち埃地利人のことであります、扱て秘密政黨及び之れと相交通して居りました外國に居る追放人、殊に倫敦に居つて萬事の差圖を致して居りました彼のジョーセフ、マジニー等は愛國心の眠らない様に百方盡力しました、抑も此のマ

マジンニ  
若年の比  
より伊太  
利の獨立  
自由を唱  
ふ

マジンニ  
ジェノア  
にて捕縛  
せらる  
マジンニ  
サボナの  
城中に伊  
太利一統  
の念を起  
す

チャール  
ス、アル  
ベルト、  
マジンニ  
者流を好  
まず

マジンニと申しました人は伊太利の一統に對してはガリバルディーと同様に我邦維新の際の西郷大久保の如き者でありましたが、若年の時分よりして伊太利の獨立自由を唱へまして、政府から禁止さるゝ様な雜誌杯を發兌したこともあつた様な人でありましたが、千八百三十年七月の佛蘭斯の革命(チャールス第十世を廢す)を見ましてマジンニも他の伊太利人同様に伊太利の爲に大いなる望を起すに至りました然るに未だ何たる舉動にも及びませんのに、ジェノアに於て捕縛されましてサボナの城中に禁錮せらるゝ事はなりました、蓋し伊太利一統と云ふ思想がマジンニの心に起りましたのは此禁錮中に將來の謀計を思案して居る間のことであつたと云ひます。

當時埃地利人の跋扈を惡みましたのは特りマジンニ及び其他の志士而已ではありませなんだ、サルヂニヤ王のチャールス、アルベルトの如きも之を嫌ひました而已ならず、政府を良くしたいと云ふ考でありましたが、王は彼のマジンニを首領として戴いて居る熱心なる共和政治者流の計畫に左袒することは好みませんでした、又千八百四十六年に新に法王に成りましたバイアス第九世の如きも至つて寛大なる人にて大いに開明主義を採つて、或は大赦を施して政治上の罪人を悉く放

寛大の政  
略に驚く

軍勢を繰  
込む

免し、或は追放人を自由に歸國せしめ、或は出版の自由を増し、或は僧侶に非ざる者と雖も最上の官職に就き得べきことゝ爲し、或は地方の貴族中より委員を選んで改革案を作らしめ、又鐵道敷設其他有益なる工事を約束する杯甚だ頼母しい人の様に見えましたものですから羅馬人は概して殊の外悦んで居りましたが、過劇共和黨の人達の如きは其所置を不満足に思ひました而已ならず、且つ疑ひの心を抱きまして、甚だ覺束ないことに思つて居りました、其れには引換へてメッテルニッチは法王の寛大なる政略を見て大に驚きまして、彼のグイヤナ條約中に埃地利が兵を繰入れてフェルララの一部分を占領する事を許す簡條のあるのを幸としまし、即ち其簡條に基いて軍勢をフェルララに繰込みました、メッテルニッチの此所置の如きは伊太利人の悪くしみを一層強くしたものであります、此の所置を見まして、伊太利各部より怒の聲は發しました、或はバイアス第九世とチャールス、アルベルトが合體して埃地利に向つて兵端を開くであらうと思つた者もありましたが、左様な勢は御座いませなんだ、併し英吉利の宰相「ロイド」バルメルストンの盡力で、竟に千八百四十七年十二月に埃地利の兵は引拂ふことに成りました、實に此所置の爲めに伊太利人が埃地利人を惡むことは益々強く成りました。



一揆  
起る

斯の如く外國の爲めには辱を被り、内は政府の爲めに壓制を被つて、益々人心は激しまして自由を慕ふ念慮は甚だ強く成つて來ましたもので、諸方に續々一揆が起つて來ました。シシリイ人とネイプルス人は一致して事を起さねばならないと云ふことを學びましたものですから、カラブリアとシシリイとに於て同時に蜂起することを謀りましたが、シシリイの方が熱心が強う御座いました故に、竟にシシリイ人が先へ事を起すことに成りまして、義勇兵と政府の兵との間に戦争が始まりました。一揆の勢が中々熾んでありまして、これに勵まされて遂にネイプルス人も蜂起致しました。王方の手に残りたるは特にメッシナの砦而已にて、其他大切な砦は皆な一揆の手に落ちました。此の首尾を聞きまして、羅馬人も望を起しました。其れよりして尙ほ北方に此勝利の新聞が廣まりまして、トスカン人はシシリイ革命黨より送りたる使節を引いて一方ならず此度の勝利を祝しまして、革命に甚だ熱心に成りました故に、トスカニーの王レッポールドはフルヂナンドがネイプルス人に許した憲法よりも尙ほ自由主義の憲法を許しました。サルヂニヤ人の如きもネイプルス憲法のことを祝し且つ自分達も憲法請求と出掛けました。ロムバルヂーに於てはナザリの煽動で以て種々の請願を爲すに至りまして、

憲法請求

烟草税の  
ことより  
起りたる  
虐殺

地利の壓制に就て殊の外苦情を申立てました。又ヴェニヤにてはマニンと云ふ  
地利嫌ひの人がロムバルヂーのナザリに習つてやる様にと主張しました。殊に  
ミランの如きは烟草税のことよりして政府の大將レデツキ氏が女子供の嫌なく  
人民を虐殺しました爲めに、人心が殊の外激しまして、全く地利に逆くことと成  
りました。是に於て伊太利の運も實に開けたりと人々が悦ぶに至りました。されば  
地利は益々厳しい手段を施しましたが、ロムバルヂーの勇氣も其れで彌々強く  
成りました。此の時に際して丁度佛蘭西には共和政治の設立があり、ディアナ及び  
ホンガリーに於ては革命がありました。故に、伊太利人の決心は益々固く成り  
まして、獨逸人亡ぼすべし、伊太利萬歳の聲は到る所に聞える様に成りました。地利  
の大將レデツキは遂にミラン人の爲めに敗ぶられまして、千八百四十八年三月  
二十二日に地利人はミランを引拂ふことに成りました。ヴェニスに於てもヴェ  
ヤナ革命にてメッテルニツチの敗北の後には全く人民の勝に成りました。  
ミラン人の蜂起のことがジエノアに達しましたれば、ジエノア人は義勇兵を募つ  
て一揆の助として送りました而已ならず、陸軍士官までがチャールス、アルベルト  
に迫つて、地利に向つて兵端を開かせました。バルマ、モデナ等も地利の軍勢に

佛蘭斯共  
和政治と  
なる

向つて起り、ビードモントと合併せられんことを望みました。  
トスカニーのレツポールド王は、伊太利回生の時が来たと申して、トスカニーの國境へ兵を押し出しまして、ロムバルデーの同胞に力を藉きました。羅馬及びチイブル

チヤールス、アルベルト共和黨の助を拒む

ガリバルデーの助をも拒みたり

サルヂニヤ王の因循

共和政治設立を排斥す

スに於ても一揆が蜂起して、埃地利に逆きました。  
斯の如く埃地利に向つて續々蜂起がりましたが、チヤールス、アルベルトは革命黨に迫られて致方なしに埃地利に向つて兵端を開いたのでありました。故に、共和黨の軍勢を我が助とすることは甚だ好みませなんだ。其れ故にマジニーが革命戰爭に經驗ある志士を貸してやらうと申したのを断りました。而已ならず、ガリバルデーの如く戰功ある者の助けでさへも辭退しました。されば伊太利人が遂に首尾よく埃地利人を國から追拂つて仕舞うことが出来る様に一旦は見えました。が種々の事情の爲めに又再び埃地利の軍勢の爲めに伊太利が蹂躪せらるゝことに立至りました。種々の事情とは如何なるものぞと申しますに、即ちサルヂニア王チヤールス、アルベルトの因循、諸國の有志者の間に合體のなかつたこと、羅馬法王が埃地利を敵とすることを拒みしこと、且つ伊太利人が共和政治の一種を設けん杯と希望するのは以ての外のことであるから、各國の人民ともに宜しく従前の主君

レデツキ再びミランに入る  
ロムバルデーの市々レデツキの手に入る

人心大いに激す  
埃地利を賞めざるを憤る

ロツシ暗殺せらる

法王の逃亡

を慎んで遵奉して居るべしと云ふ旨を布告した。こと等でありました。されば埃地利の大將レデツキの爲めにチヤールス、アルベルトは敗北を被り、ミランをレデツキに渡して千八百四十八年八月六日に潜に逃げてしまいました。翌七日にレデツキはミランに入りました。ガリバルデーとマジニーは義勇兵を率ゐてミランの救ひに参りました。が如何ともすることは出来ませなんだ。是に於てロムバルデーの市々は速にレデツキの手に落ちました。レデツキは法王の領内に自由主義の者の居る間は我が職務が盡してないことと思ひまして、ミラン降参の後三週間程の時に六千五百人の埃地利軍を再びフルララに繰入れました。

右の如き事情の爲めに人心は彌々激しました。羅馬人は法王が埃地利の機嫌を害ふ事を恐れて埃地利の軍勢がフルララへ侵入しても嚴しい掛合ひを爲し能はざるのを憤りまして、次第に法王を惡む様に成りました。が千八百三十八年十一月十五日に法王の總理大臣のベルレグリノ、ロツシは議院の入口にて暗殺に遭ひました。法王は身の危きことを恐れて十一月二十四日に賤夫に身をやつして潜に羅馬を逃亡して、ゲイエーテーに至つて、チーブルス王の守護を仰ぎました。是に於て一方に於ては、羅馬諸州の人民が民權政治を採用することを迫り、一方に於ては、法王の

伊太利諸國の王に恐怖す

再び兵端を開く

サルヂニヤ王讓位

マジンニ政治權を奪つて共和政治を設く

ナポレオン羅馬を攻取る

逃亡を見て、伊太利諸國の王は大いに恐怖の念を起しまして、フロレンスのレッポールドの如く逃亡したるものもありました。レデツキが苛酷なる政略を施して、ロムバルデー人を苦めました故に、チャールルス、アルベルトは人民に迫られて、遂に再び奥地利に向て兵端を開くことに成りましたが、士官には叛かれ、士卒には信用されませなんだ故に、ノブラに於てレデツキの爲に大敗を取りました。然るに敵と和睦をしやうとすれば、敵が法外なる簡條を請求しますし、戦争をもつとやらうと思つても其道がありません。故に、遂に王位を太子のウイクトル、エマニエルに讓つて、其身は位を退くに至りました。

羅馬に於ては法王が逃亡しました後は、マジンニと其仲間が政權を握つて、議會を集めて法王の政治權を廢し、羅馬を共和政治に致しました。トスカニーも共和政治に成りまして、羅馬と合併することになりました。然るに此時に當つて伊太利の自由の爲めに不慮のことが起りましたと云ふのは、佛蘭斯共和政治の大統領たるルウイ、ナポレオンが法王を助けて佛蘭斯僧侶の歡心を買ふと思ひまして、大軍を發して羅馬を攻め取つたことであり、ガリバルデー及びマジンニ等は死を極めて防禦しましたが、衆寡敵せず遂に引拂ひました。一方の外敵を打拂はうと致して居ります所に又一方から外敵が出現しまして、伊太利人の自由を妨害するに至りました。

七千五百萬の價金

外國を惡む心強し

ウイクトル、エマニエルは英佛の周旋にて奥地利の要求を稍々軽くしてもらふことを得ましたが、價金として七千五百萬、リール、凡六千二百二十萬五千圓を拂はせられました。併し領地は幸にそがれませんでした。斯くサルヂニヤが降参しました譯があります。ですから、伊太利は何の國も皆な治まりまして、再び舊の主君の手に復しました。が、外國を惡む心は益々強く成りました。

ウイクトル、エマニエルの宰相のカブールと申した人は中々な政治家でありました。故に、此人の計畫は都てサルヂニヤ國の爲め而已に關するものでなく、伊太利全國の爲に關するものでありました。されば英佛に合體してクライミヤ戦争に加はり、爾後頻りにナポレオン三世と交を厚くしまして、遂に伊太利から奥地利人を追拂ふことを目的とするの同盟を結んで、奥地利と兵端を開くに至りました。ナポレオンは自ら兵を率ゐて伊太利に出陣しまして、彼の有名なるソルフェリノの戰にて奥地利の軍を大に敗りました。是に於てトスカニー、モデナ、バルマ、ロマグナ等は自ら請求してサルヂニヤと合併に成りました。

伊太利の王と呼ぶ

ナポレオン三世の亡後、羅馬に歸す

伊太利の

續いてガリバルデーが義兵を起して、シシリイ及びチイブルスを打従がへてヴィクトル、エマニエールに對面して、ヴィクトル、エマニエールを伊太利の王と呼びました。シシリイ及びチイブルスは悦んでサルチニヤに合併しました。是に於てヴェニス及び羅馬を除くの外伊太利半島は全く一統しまして、即ち千八百六十一年二月十八日にカプーは一統伊太利の第一の國會を召集致しました。爾後愛國黨の希望はヴェニス及び羅馬をも取込んで、伊太利を全く一統させやうと云ふことでありましたが、ヴェニスは千八百六十六年の普魯斯と埃地利との戦争の終りに於て二國が和睦を結びます時に普魯スの所望に依て埃地利より伊太利に與へました。羅馬は前に申した通り普魯スと佛蘭斯との戦争にてナポレオンがセダンにて降参をなし、佛蘭斯は共和政治に成りました時にフーブル氏が羅馬の所置に關して先年ナポレオンの云つことも今は無効だと申しました故に、伊太利半島の秩序を保持するは自分の義務だとヴィクトル、エマニエールが申して羅馬に兵を繰入れて法王の政治權を剝奪してしまひ、千八百七十一年七月一日に伊太利政府を羅馬に移しました。是に於て伊太利半島は全く一統致しました。

此に由て之を觀ますに、數多の國に分れたる伊太利と云ふ國が遂に右の如く一統

一統したるは埃地利の外敵の爲に愛國心爲り

獨立を思ひ立ちたる事

始めて伊太利王と呼ぶ

に歸しましたのは、外國の壓制を惡む處よりして大いに愛國心が起つて、獨立の爲めには生命財産をも抛たうと云ふ心に人々が成りました故であります。國の獨立を堅固になして外國の爲めに權理を侵かされない様にしやうと云ふには、伊太利を一統しなければならぬと云ふことを人々が感じたからであります。されば伊太利人の爲めには國の獨立と云ふことと、人民の自由と云ふことと、伊太利の一統と云ふこととは殆んど同一の事でありました。彼のマジニイ及びガリバルデー等の愛國者に於ては伊太利一統と云ふことが第一の問題でありました。マジニイが伊太利一統の念を起したのは千八百三十年の頃であつたと云ひます。マジニイは伊太利も歐羅巴の一新を助くべき譯であります。之を爲すには先づ第一に伊太利を獨立せしめ、一統せしむるの必要だと思ひました。サルチニア王ヴィクトル、エマニエールを始めて伊太利王國と呼んだのは誰でありますか。即ちガリバルデーであります。チイブルス及びシシリイをサルチニヤに合併させたのは重に誰の力でありますか。即ちガリバルデーの力であります。千八百六十七年に羅馬を取つて伊太利國を全く一統しやうと企てたのは誰でありますか。即ちガリバルデーであります。伊太利一統の父とも云ふべきは實にマジニイにあらざればガリバルデーのこ

とでありませう、蓋し奥地利と云ふ外敵が伊太利の爲になくつても自由主義を主張することは或は早晩伊太利にも起りましたらうが伊太利を一統させやうと云ふ考は容易には起りませなんだらう、去り乍ら伊太利隆盛の爲めには伊太利の一統は最も必要の事と思はれます、されば伊太利が一統したのは甚だ喜ぶべきことでありますが、其一統の斯く早く出来たのは奥地利と云ふ敵があつた故だと思はれます。

今一つ外敵のお蔭で一統した國があります、其れは即ち獨逸國であります、近世普魯斯王が獨逸皇帝と成つて獨逸聯邦を統括して、強大なる獨逸帝國と云ふものが出来ましたのは、伊太利の一統が奥地利と云ふ敵の爲めに出来たのと同様にて、佛蘭斯と云ふ敵の爲めに重に出来た様に見えます、蓋し獨逸が今日あるに至つたのはナポレオン第一世の力が其多きに居る様に見えます、其子細は獨逸人の腦中に獨逸と云ふ考が起つて新獨逸の芽が出ましたのは、即ちナポレオンの爲めに國を荒され都府を蹂躪せられました而已ならず、皇室までが辱を被つた杯と云ふことの結果である様に思はれます、スタインが行政上の大改革を容易に行ふことの出來たのも徴兵の法に基いて軍制を一新することが出来たのも、ナポレオンから苦

獨逸の一統も外敵のお蔭な

佛蘭斯と云ふ敵の

恩なり

ナポレオン第一世

皇室辱を被むる

獨逸國を思ふ念慮

起る秘密愛國

北獨逸悉く蜂起す

壯士悉く義勇兵とな

なるナポレオンに敵する者は獨逸人民なり

自由を唱ふる者獨逸を主張す

大學を立洵汰す

唯々獨逸大國ある

しめられたる爲めに獨逸國を思ふ念慮が人民の心に強くなつた故だと思はれます、フリーザルランド(父國)を自由にする爲めに人民中に秘密の愛國社が所々に出来始まつたのは此時であります、千八百十三年には北獨逸は國の爲めに悉く蜂起しました、フレデリックウイレム第三世が義勇兵の編成を望みましたれば、苟も兵器を携へ得る如き若者は悉く其要求に應じました、是に於てナポレオンに敵たいしました者は獨逸軍ではありません、獨逸人民で有ました、されば伊太利の愛國者が伊太利人合體の手本とするがよいと贊稱しました彼の「チューゲンブンド」杯云ふ獨逸人の一致して外敵を打拂ふ事を目的とする愛國社の出来たのは此時であります、此時よりして自由を唱へる者は即ち獨逸の一統を主張する様に成つたのであります、此時に當つて、メッテルニッヒの如き壓制家は分國の制を主張して獨逸の一致を妨げんと爲じ、スタインの如き活眼家は百方盡力して獨逸一致の政略を施しました、普魯斯が盛大なる大學を設立して獨逸思想の洵汰を始めたのは此時であります、獨逸人が普魯スナイズされることを歡んだのは其事自らを歡んだのであります、せずして、獨逸の一統を歡んだのであります、されば「フリーヂシューク」は或る宴會の席に於て、普魯斯も無し、奥太利も無し、唯々泰山の如く堅固なる一統せる獨逸

而已

獨逸の一統を説く文學の奴隸なり

普魯斯此の同盟を擴むることを勉む

關稅同盟中の諸邦多し普魯斯に隨從す

大國ある而已と申しました。されば自由を唱へる者は獨逸全國の國會を主張し、  
 した慷慨悲憤の歌は獨逸心を強盛にするものでありました。ハンガリーの愛國者  
 コシニートが自由主義を述べますれば、則ち獨逸の一統を説きました。勝ちたるフレ  
 デリッキ大王は生涯佛蘭斯文學の奴隸でありましたが、負けたる獨逸は自國の文學  
 に誇るものになりました。獨逸一統主義を以て普魯斯が爲したる事の一つは關稅  
 同盟を熱心に廣めたことであり、千八百二十年代に於ては獨逸には一國毎に  
 税關がありましたが、千八百二十八年にウルテムブルグとハプリアの間に始めて  
 關稅同盟を取結びました。其翌年に普魯斯とヘッス、ダルムスタットと同様の同盟を  
 結びました。普魯斯は國の繁昌を増し、且つ獨逸中他邦の利害をして我が利害と同  
 一ならしめんと思ふ心よりして、此同盟を擴めることに百方盡力しました。されば  
 千八百三十一年には、イレクトラル「ヘッス」が加はり、千八百三十五年には、バーデン及  
 ビチニー、千八百三十六年には、フランクフルト、千八百三十三年には、ハプリア、ウル  
 テムブルグ、サキソニー、チュリンギヤが加はりました。是に於て關稅同盟中の諸邦は  
 幾分か普魯斯に隨從するものと成りました。其隨從たる最初は特に商業上に而已  
 關するものでありましたが、時宜に依ては容易に政治上のものとなすことを得べ

きものでありました。而て同盟諸邦の人口を合する時は、實に二千七百萬人であり  
 ました。

民權論

自由黨

太子に位を讓る

千八百四十八、四十九の兩年頃には歐洲一般に民權論が餘程強う御座いました。が、  
 獨逸にても大學校の教授學生を始めとして民權家が餘程多く成つて來まして、自  
 由を唱へ憲法と獨逸の一統を主張し、或は集會を催し、或は請願と出掛けました。  
 バーデンの自由黨は從來行はれたる壓制主義の號令を廢することを請求しまし  
 た。而已ならず、聯邦會議に人民の代表せられん事を要求しました。ウルテムブルグ  
 の公民は出版の自由と獨逸國會の設立を請求しました。れば國王は自由主義の内  
 閣を作り、且つ封建制度に依て上納すべき貢を廢しました。ハプリアに於ては自  
 由黨峰起の爲めに國王は遂に太子に位を讓りました。ヘッス、カッセルに於ては國  
 王は遂にフセウブセツに人民の請求に應じました。ヘッス、ダルムスタットに於て  
 は國王は容易に人民の請求に應じました。ナソーに於ては勝誇つたる人民はメッ  
 テルニッチの所有地を奪掠しました。サキソニーに於ても國王は遂に自由主義の  
 内閣を作つて出版を自由になし、裁判を公然の者となし、陪審裁判の法を立て、サキ  
 ソン國會に代表せらるるものゝ範圍を擴め、聯邦議會の改良に盡力すべしと約束

帝自由主義を採る

兵士人民に向ひ發砲するを拒む

奧帝請願を聽く

しました。グイヤーナに於ては學生及び職人が起り立ちまして、市中にて政府の兵と小戦争をなしましたが、大事に至らずして遂にメッテルニッチが辭職をなして英國へ逃亡しました。處帝は元來自由主義を可とするものでありました故に、人民に向つて發砲することを禁じ、出版の自由を許し、責任内閣を作る等大いに自由主義の制度を設けました。グイヤーナに於ては先導者は學生でありましたが、ベルリンに於ては先導者は職工でありました。ベルリンに於ては最初は普魯斯王は中々人民の請求に應ずるの色なく、群衆を解散する爲に兵士をして發砲せしめたる位でありましたが、或る隊の兵士が發砲することを拒みたるを見て、國王は忽ち我を折つて當時の内閣を解き、兵隊を退け、民兵を起すことを約束しました。ホンガリーに於てはコシュートが雄辯を振つて民権家を煽動して、種々の改革を行ひましたが、實に今回の革命は全體にコシュートの能辯の爲めに大いに煽動せられたと申すことであり、ボヒミヤ人の如きも種々の請願をなしましたが、奥地利帝は自由主義を採る者でありました故に其請願は一々許されました。

右に述べました革命は千八百四十八年三月の革命と申すのであります。此革命に依てメッテルニッチの政略は全く瓦解しました。メッテルニッチが押し潰さうとしま

全部に對する強敵

した。獨逸精神は次第次第に熟して來まして、其の性質は判然して來ました。ホンガリーの敵意の如きは之を使用して我意を達せんとメッテルニッチの頼んだものでしたが、メッテルニッチは却つて其の爲めに權威も官職も失ひ、グイヤーナは自由を得、ホンガリーは實際獨立を得るに至りました。

千八百四十八年三月の革命に就いて最も著しきことは人種の異なるが爲めに決して合體して事を爲し得べくは見えませんがやうな諸地方の自由主張者が能く和親したる様に見えたことでもあります。此れは固より怪むに足らないことであります。何んとなれば其諸人種は如何程他の事項に關しては利害を異にしましても、壓制政府と云ふ敵を持つて居ることに於ては皆な同一でありました。數多の點に於て利害を異にします許多人種の民権家が一時親睦したるは全く全部に對する強敵があつた爲でありました。されば一度壓制に勝つて強敵が稍々頭を下げたかと思えます。忽ち此和親は破れまして、鼎の沸く如くに許多人種の間には不和が起りました。初め獨逸、奥地利、ホンガリー等の民権家が革命を行ひました時に當つて、其部内の諸「ストラブニク」人種は何れも皆な獨逸人及び「マジョール」人種が己れが得た所の自由と同様の自由を彼等にも得せしむることを盡力するであらうと

思ひ込んで居りました故に、三月の革命の後には各地方の「スラブ・オニツク」人種は各々其欲する所を主張し始めました、即ちクレイン州及び奥地利帝國の其他の南西諸州の「スロブ・エチス」人種は「スロブ・エニヤ」と云ふ縣を新に立てやうと申出しました、北ホンガリーの「スロブ・ツク」人種は「マツジョール」語や「マツジョール」カルブイン宗の爲めに邪魔をされずに自由に「スロブ・ツク」語を用ひ自由にルイテル宗を奉ずる事の出来る如き州を新に設けたいと希望しました、クロイシャの愛國者は「クロイシャ・スラブ・オニア・ダルマチア」等三國の古の國會を召集になる様に、奥地利帝國に請願しました蓋し此等の要求は皆な將來人種と人種との間の不和の種を含有する如きものでありましたが、眞の第一の破裂は「セルブス」人種より起りました、三月十七日に「ライツ・エンス・タット」の近邊の「セルブス」人の名代人は「ライツ・エンス・タット」に集會して公務上に自國の持前の國語を使用するの自由を許されたいと云ふ請願書を差出す爲めの相談をなしました、此事を聞きまして「ベスト」の「マツジョール」の若者共は大いに激しました、四月八日には「スラブ・オニヤ」の「ニコ・サツ」の「セルブス」人より同一の請願なしましたる處、「コシュエート」は「マツジョール」語而已を各人種共に使用するにあらざれば、數種の人種を結合させて置くことは出来ないから、其願

裁判官と  
村民との  
間の葛藤

は叶はぬと申しました、然らば「プレスブルグ」に於て許可は願ひません、他の所へ参りますと、「グイ・ヤナ」ニ愁訴しやうとする旨を「セルブ」人は答へました、然らば、劔に訴へて決しよう」と「コシュエート」は申しました、其れは「セルブ」人の恐るゝ所では御座らぬと、「セルブ」人はやりつけました、其れより二三日置いて、又た「スラブ・オニヤ」の「カイロウ・イツチ」よりも同じ様なる請願を申出しました處、是れ又「マツジョール」人の爲めにはねつけられてしまいました、斯の如き事情でありました處に、裁判官と村民との間に葛藤が出来て、果ては兵隊が出張する杯と云ふ騒ぎでありました故に、「セルブ」人は遂に奥地利人に訴へることに致しました、此に引き續いて「マツジョール」人と「クロイシャ」人との間にも葛藤が起りました。

右の如く「ホンガリー」に於ては、「マツジョール」人種と他の人種との間に葛藤が起りました、が、獨逸に於ては「ボヒミヤ」人と甚だしい葛藤が起りました、フランス・フォルトに集會しました獨逸聯邦議會の委員は「ボヒミヤ」を以て獨逸の一部分だと認めやうとし、「ボヒミヤ」は從來獨逸と「ボヒミヤ」との間にあつて同盟は國王同士の間にあつたものにて、人民と人民との間にあつたものではありませぬから、「ボヒミヤ」を獨逸の一部と看做されては甚だ迷惑だと申して獨逸に合併せらるゝことを拒み



奥國政府  
に訴ふ

ました委員は其の事に不承知でありました故に、ボヒミヤ人は奥地利政府に訴へて其の守護を仰ぎました處、奥地利政府は曖昧なることを申して斷然たる加勢をなして呉れませなんだ、故にボヒミヤ人は止むを得ず自衛の策を施すことに決しました、遂に兵力を以て壓倒せられてボヒミヤの自由は立たざることになりました。

市中戦争

右の外ルーマニヤ人及びサキソン人が「マッジョール」人種に向つて起る杯人種と人種との間の葛藤は中々差縫れたることでありましたが、グイヤナ及びベルリン等に於て其後革命の首尾は如何であつたかと尋ねまするに、其後革命黨が彌々猖獗を極はめました故に、皇帝は遂にグイヤナを立去られました、ホングリイを征討する爲めにグイヤナより出張を命せられたる兵隊の一部が其命令を聴かざることより市中にて戦争が始まり、陸軍大臣ラトッパル氏は亂民の爲めに打殺された上に脛の如くに切りこまざかれる杯沙汰の限りでありましたが、革命黨は政府の武器を奪つて之れを人民に分配し新内閣を作らんことを皇帝に請求しました、是に於て皇帝はウインヂングラツを陸軍大將に任じましてグイヤナを攻めさせました處、一揆方にはホングリヤ人の援兵のあつたにも係はらず、十月三十一日

一揆治ま  
り革命破  
る

にグイヤナは遂に攻落されまして、一揆は鎮まり革命は破れましたが、十二月二日にフェルチナンド皇帝は位を皇孫フランシス、ジョーセフに譲られました。

政府憲法  
を發す

又ベルリンに於ては最初はフレデリック、ウイレルム第四世には革命黨に抵抗をせられまして、一時は市中に戦争が始まりましたが、後には大いに方向を改めて、獨逸の自由と一致を主張せられ、將來普魯斯は獨逸の先導者たるべき旨を唱へられました、然るに革命黨は其後益々増長しまして、所詮尋常の手段では其勢は制し難きものでありました故に、ウイレルム第四世はランゲル將軍をして大軍を率ゐてベルリンに入らしめて、革命黨を壓倒せしめられまして、政府より憲法を發せられました、而して此憲法は大いに民權主義を採つたものでありまして、是に於て普魯斯は即ち舊國の風を脱して近世の諸憲法國の仲間入りを致しましたが、民權家はグイヤナ同様に抑へ付けられてしまひました。

右の如く二大強國が民權家を壓倒しましたことであり、故に、フランクフルトに於て獨逸諸邦の民權家が開きました聯邦議會が起草したる憲法の如きは中々採用に成るべき様には見えませなんだ、同議會が定めた獨逸公民の權理の如きは奥地利、普魯斯、バヴア、ハノーヴァー、サキソニー等の諸邦の爲に排斥せられま

した、獨逸帝の位を普魯斯王に授けんと欲しましたが普魯斯王は之を辭退しまし

革命の破  
れたるを  
憤り民権  
家蜂起す

兵力を以  
て議會を  
解散す

議員辭職

三月の革  
命諸國共  
に破れて  
壓制主義  
行はる

奥地利と  
普魯斯

から助も來ませずして、譯もなく普魯斯の兵の爲めに静められてしまひました。斯の如き事情にて獨逸の一統が穩かに出來ます所ではなく、人種の嫉妬や政治主義の軋轢で以て當時獨逸の有様は中々の混雜でありました。就中重大の不和は奥地利とホンガリーの不和でありましたが、ホンガリーは名にし負ふ彼のコンラートが張本にて兵も多く勇氣にも富んで居りました故に、奥地利は露西亞の助を藉りて漸くにホンガリーに打勝つことを得ました。されば何地に於ても彼の三月の革命は遂に皆な打破られてしまひました。自由主義の内閣は退けられまして、壓制主義のものに換へられました。特り自由主義が壓制せられました而已ならず、獨逸の一統も當時に於ては望むべからざることとなりました。

これから後は奥地利と普魯斯が互に獨逸の頭に成らうと思ひました故に此二國の間に大いなる軋轢が起りまして、南獨逸の諸邦は奥地利に左袒をし、北獨逸の諸邦は普魯斯に左袒をいたしました。斯る事情でありましたから獨逸の一統杯云ふことは中々容易には出來さうではありませなんだが、併し奥地利と普魯斯の軋轢がかうじて遂に彼の千八百六十六年に兩國の間に戦争がありまして、其結果として北

普佛戰  
一統逸を

獨逸諸邦の同盟の出來ましたので、先づ獨逸の大半は纏りました斯く北獨逸丈は纏りましたが南獨逸が合併して獨逸が全く一統するのは何時のことだか知れない様でありました、然るに彼の普佛戰爭と云ふものが起つて遂に獨逸の一統が出來ることに成りました。

獨逸ナポ  
レオンの  
爲めに困  
辱せらる

獨逸を一統する爲めには佛蘭斯と戰爭をする程好いことはありませなんだ北獨逸丈を一統させるには塊地利の如き北獨逸丈の敵があれば宜しう御座います、獨逸全體を一統させやうと云ふには、そんな一部分の敵ではいけません、全體に對する敵がなければなりません、然るに獨逸全部に對する敵と云へば古來佛蘭斯の右に出でるものはありません、チャールズ大帝頃より獨逸全體の敵と稱すべきものは即ち佛蘭斯でありませう、古來外國の爲めに辱を被つた國は多くあります、獨逸の如き大國にして彼のナポレオン第一世の爲めに被つた如き辱を受けたものは東西廣しと雖も昔はカルセイジが羅馬の爲めに困辱せられたる以來未だ嘗て聞かない所でありませう、されば佛蘭斯との戰爭と云へば獨逸人は皆な會稽の恥を雪がんと思ふ事でありませう、愛國心は非常に強く成つて唯々獨逸あり唯々父國あることを知つて、他事は少しも顧みませんでせう、塊地利と戰爭をす

謀計に陥  
つたと云  
ふ説

れば北獨逸は纏まり、佛蘭西と戰爭をすれば獨逸全國が纏まるのは必然のことでありませう、普佛戰爭は獨逸一統の爲めには實に必要なことでありました、されば佛蘭斯と早晩戰爭をせやうと云ふことはビスマルクの如き人は豫て希望して居つたことでありませうが、却つてナポレオンの方から求めて戰爭を仕掛けましたのは獨逸の人心を大いに激して愛國心を非常に起させました故に、普魯斯の爲めには實に此の上なき幸でありました、實はナポレオンがビスマルクの謀計に陥つたものだと申しませう、いざ戰爭と成りますと、普魯斯の方は充分用意が整つて居りました、佛蘭斯の方は少しも戰爭の用意が整つて居りませなんだ、其所を以て見ますと何にしろ普魯スは豫てより早晩佛蘭斯と戰爭をやらなければならぬことと覺悟を致して居つたに違ひはありませんが、表向戰爭を求めたのは、どこまでも佛蘭斯であります、ナポレオンはラキセムブルグと申して之を佛蘭斯のものにすればベルジウム及びライン諸州の如きは到底佛蘭斯の所有に歸せなければなりません而已ならず、若し普佛の間に戰爭の起るに於ては佛蘭斯が普魯斯を攻撃する爲めに至つて都合の好い其要害の地を千八百六十七年に和蘭王から甘く譲り受けやうとしました處、遂に普魯スから故障を入れられて其事は破れてしま

西班牙王  
選舉の間

獨逸人佛  
蘭斯の干  
渉を恐む

普魯斯の  
敵は獨逸  
の敵なり

父國と云  
ふ考へ獨  
逸人の心  
中に強く

ました其爲めに獨逸の人心を激したことは一方ならぬことでありました然るに千八百七十年に至つて彼の西班牙王選舉の問題の時に西班牙政府は、ホーヘンゾレルン家のレツポルド公を選みました處佛蘭斯が不承知であります故に、普魯斯王は本人に説いて王位を辭退させましたが佛蘭斯はまだ其れでは満足致しませんで、普魯斯王より公然誤狀文に齊しいものを出させて將來と雖もレツポルドを候補者とは決して致す間敷き旨を誓ふべし杯と法外なることを請求して置いて普魯斯王が之を承知しないからと云つて佛蘭斯より兵端を開きましたことでありますから、特り獨逸人而已ならず他人の眼から見ましても随分無法な戰爭でありました故に獨逸人の憤は一方ならぬことでありました佛蘭斯人は獨逸の一統を嫌ひ、出来るだけ干渉して之を妨げやうとして居ると云ふことは獨逸人のよく知つて居たことにて、佛人の干渉は獨逸人の非常に惡む所でありました故に普魯斯の戰爭は即ち獨逸人の戰爭と成りまして、誰あつて國の爲めに盡さんと云ふ心の起らなかつた者はありませんだ、此の戰爭に依つて「フアーザラン」即ち父國と云ふ考へが獨逸人の心中に彌々強く成りました此戰爭に依つて獨逸人の腦中に獨逸國家と云ふ物象が至つて明らかに出來ました此戰爭に依つて

起る

佛蘭斯の  
効能

日本

伊太利

獨逸

全く一統した強大なる獨逸國の出來んことは佛蘭斯人の甚だ忌む所だと云ふことが分りましたると同時に又獨逸人の心には全く一統した強大なる獨逸國を欲するの念が強く成りましたされば此の戰爭の如きは獨逸をして遂ひに全く一統せしむるの効能のあつたものであります、千八百七十一年一月十八日に普魯スのウイレルム王を以て獨逸皇帝に奉じたのは實に佛蘭斯のウエルセル宮殿に於て爲したことであります。

されば日本が王政復古に成つて政令が全く一途に歸する様に成つたのは西洋諸國と云ふ徳川にも島津にも毛利にも誰にも彼にも日本人には一般に敵であるものが現れ出たからであります、日本の諸侯よりもつと獨立な王侯の多くあつた伊太利が一統したのは塊地利が伊太利の政治に干渉して伊太利人民を困しめた故であります、從來の不和には係はらず南北獨逸が合體して強大なる獨逸帝國を生ずるに至つたのは即ち宿怨の深い佛蘭斯の賜物であります、若し斯る敵がありませなんだならば日本も伊太利も獨逸も今日の如き一統は未だ中々出來ませなんだらうと思はれます、今日の開化の度では其々惡み且つ恐れる敵もないのに違つた國の人民が一つに成つて睦間敷やつて行かうと云ふことは中々六ヶ敷いこ

大國の出  
來た譯

將來更に  
大なる國  
の出來る  
のと同様  
ならん

戦争必要  
強敵あれ  
ば結合は  
容易なり

とであります併し外敵のある爲めに一旦結合しまして久しく一國の民と成つて  
同一の政府の下にあつて利害を共に致すことに慣れますると最初は全く外敵の  
爲めの故に結合致しましたものでも後には其外敵は無くなつても最早前の如く  
別々の社會に分裂してしまふことはなしによく一社會を爲して行くことが出來  
ます昔から段々に大きな社會の出來て來たのは強國に併呑されるかさもなくば  
戦争上餘儀なく合併して一社會を爲して居る中に政治上や商業上に密着なる關  
係が出來て和合心が次第に深くなつて終に自ら好んで結合して居る様に成つた  
のであります此の後ち尙ほ大きな社會の出來るのも強國が弱國を併呑するか、但  
しは強敵に抵抗しやうと云ふ爲めに數多の弱國が合併して一大國を成す爲に出  
來るのが多からうと思はれます多くの人を結合させて大社會を成させる爲には  
古來戦争程必要なものはありません幾ら獨立好きでも何程宿怨があつても恐る  
べき強敵さへあれば容易に結合させることが出來ます、ホンガリー人の如きは獨  
立心は強く且つ勇氣には富むものでありますから隨分是まで獨立を企てたこと  
もありまして一時は奧地利の手に合ひませんで露西亞の助を藉りて征服した位  
でありましたが今日奧地利とホンガリーとの關係を見ますに固より自治は充分

何故に奧  
地利とホ  
ンガリー  
の中がよ  
くなりた  
るや

奧地利の  
存亡如何

普魯斯と  
奧地利と  
の關係は  
尙ほ面白  
し

に行はれては居りますが、二國の關係は實に密着したものであります、奧地利がホ  
ンガリーを失ふことを好みません而巳ならずホンガリーも奧地利から獨立に成  
ることは決して願はない所でありませう、扱て此二國が如何して斯く中がよく成  
つたかと申しますに、全く露西亞と云ふ強敵が出來た爲めであります、露西亞と云  
ふ強敵さへなければ、ホンガリーが獨立騒ぎ杯をやらかして居ることも出來ます  
が、露西亞と云ふ強敵があつては中々其様な浮かれたことをやつて居る譯には參  
りません、今日に在ては奧地利の存亡もホンガリーの存亡も共に二國がよく合體  
して愛國心を致す事にあります、實は此二國がよく合體して居ても誠に安全とは  
云へない位であります、其所を兩國の政治家より人民に至るまでがよく辨へて居  
りますから、今日の如く兩國の間が陸間敷く成つたのであります、此二國の關係よ  
りももつと面白いのは普魯斯と奧地利との關係であります、奧地利は御承知の通  
り千八百六十六年に普魯斯と戦つて大敗を蒙りまして、獨逸の仲間を除けられシ  
ュレスウィグ、ホルスタインを取られ、ヴェニスを伊太利に渡して伊太利よりは追ひ出さ  
れて仕舞ひましたと云ふ實に酷しい眼にあつた譯でありますから、普魯斯に對す  
る怨は實に強いことでありまして、尋常の場合ならば是非會稽の耻を雪ぐ覺悟で

奧地利、  
獨逸と交  
を厚く交  
なるは故  
なるぞ

露西亞の  
勢が強く  
なれば、  
奧地利に  
は親密に  
なるべし

トルコ、  
奧地利の  
關係

露西亞は  
大いに天

あるべき筈でありますから、佛蘭斯の如き普魯斯の敵と厚く交つて怨を報ゆる手  
段をなすべきでありますのに、さは無くして却て獨逸と交を厚うする事に汲々  
しまして獨逸を敵に爲さうと云ふ心は露計りも御座いませぬのは何故でありま  
すか、是又露西亞と云ふ大敵のある爲で御座いませう、今後露西亞の勢が強くなれ  
ば強くなる程獨逸と奧地利の關係は親密に成るものでありませう、又奧地利は伊  
太利の爲めには離敵であり、奧地利も伊太利から追ひ出されたことを不愉快に思  
つて居るべきでありますから、一體ならば互に敵視して居るべきであります、却  
て今日に在ては獨逸、奧地利、伊太利三國の間に同盟が出来ると至りましたのは露  
西亞、佛蘭斯の二國に對してのことでありませう、トルコは元來奧地利に取つては  
惡むべき敵でありましたが、トルコの勢が漸く衰へるに随ひまして奧地利との情  
誼は次第に深く成りまして、今日に在ては此二國の交りも彌々親密に成らんとす  
るの傾きがあります、是れ又他の故ではありませぬ、露西亞と云ふ大敵がトルコ  
の爲めにも奧地利の爲にも控へて居る故であります、斯る事情でありますから今日  
天下の輿論として露西亞の侵略主義を惡まないものはない様であります、却て  
露西亞は今日天下の爲めに甚だ有益なる職務を盡して居る様に見えます、何んと

下の爲に  
なるもの

争、サドワ  
宗教の力  
よりも、  
育の力、  
強し、  
露西亞は  
天下の諸  
國を以て  
親睦同盟  
の稽古を  
なさしむ  
る媒介

なれば今日露西亞と云ふ大敵があればこそ奧地利人とホンガリー人とが陸間敷  
く一社會を爲したり、奧地利と普魯斯の中が直つて親密なる交を結んだりします  
が、露西亞が無かつたらば斯る目出度いことは此等諸國の間には中々見難い事  
でありませう、サドワの戦争以來まだ廿餘年になるかならないのに今日の如く奧地  
利と獨逸とを斯くの如くの親みの厚いものにしやうと云ふことは宗教の力でも  
教育の力でも兎ても出来ないことでありませう、其れを斯く容易に陸間敷した  
るのは偏に露西亞の賜物でありませう、蓋し露西亞は天下の諸國をして親睦同盟  
の稽古をなさしむる媒介でありませう、若し將來天下各國の間に一大共和政治の  
如きものゝ出来ることもあらば其れは大いに露西亞の力に依ることゝ思はれま  
す、而して露西亞一國の爲めに諸國の交りが親密に成つて來ますのは特に歐羅巴  
而已に限る事ではありませぬ、近來英國が支那と交りを厚くしなければならぬ  
ことを悟て、朝鮮の處分杯に關しても支那の意を助けやうとする如き次第に立至  
つたのは何故でありますか、他に如何なる原因もあるかは知りませんが、英國人の  
眼中に露西亞のあるなほは英國と支那との間の交際の如何に大に關係ある所  
ありませう、特に英國と支那との關係而已ではありませぬ、今後露西亞が益々侵略

日本、支那、朝鮮、英吉利

事大黨強  
すち悪なら

露西亞を  
惡むは僻  
事なり

今日の武  
備はあま  
もどりに  
非ず

主義を逞しうせんとすることもありません。日本、支那、朝鮮、英吉利の間の交りは是非共親密に成らなければなりません。朝鮮は支那の干渉を免るべきものだが否免かるべきものではない。杯と云つて此四箇國が騒いで居る事の出来ること出来ないのは此等諸國の隙を窺つて居る敵が外にあるか無いかに依ることでありませぬ。若し朝鮮が折角支那の干渉を免かれても其が爲めに他の國からもつと酷い干渉を受ける様な道を開く譯ならば寧ろ支那の干渉を受けて居る方がよいかも知れません。其點から考へますれば事大黨も強ち馬鹿とも云へますまい。其れは兎もあれ天下の諸國をして少しの事の爲めに互に戦争をして居らしめずして却つて睦間敷く交りを厚くして居らせて將來萬國同盟の共和政治の如きものゝ出来る下稽古には露西亞の如き強大なる國が貴様達は中を好くしないと思はれず又弱い國云はぬ計りに見張つて居て呉れるのは何より必要なことと思はれます。又弱い國でも多く合體して居れば強い國と雖もさう侵す譯には参りません。天下には無闇に露西亞を惡む如き者が多い様であります。將來天下の爲めに露西亞は冥々の中に幾何程功徳を興へて居るか云ふことも考へて見なければなりません。今日天下の諸國が武備を嚴重にするのを見て世の中があともどりでも爲したかの様

甚だ美なる夢

天下の諸國の結合を望むる者は露西亞の如き者を出來ませぬ。今日各國が武備を嚴重に爲したり彼此同盟を結んだりして居るのは即ち此教育に缺く可らざることでありませぬ。戦争上の結合で充分結合に慣れまして人が互に殺合ふのが嫌ひに成りまして殺合ひをする爲めに莫大な金を費して着たい着物や喰ひたい食物も減じて置かねばならないと云ふのは實に馬鹿げたことだと悟つた上でなければ各國の間に共和政治の如き者は出來ませぬ。而して此結合の稽古をさせて呉れる者は即ち露西亞であります。露西亞は國の大きさから云へば亞細亞、歐羅巴の國々が皆な合體しても恐れざる如き大國でありまして且つ其領地は歐羅巴に於てはスウイデン、獨逸、埃地利、ホンガリー、トルコ等の諸國に接近して居り亞細亞に於てはペルシャ、アフガニスタン、支那、日本等の諸國と接近して居りまして英吉利の

露西亞の諸國を相手に得るべきなり

今日日耳曼人種は天下の覇を握るべきなり

露西亞の併呑せられんと欲する國々を併呑せざるべからず

如きは本國は露西亞領と接近して居りませんが、其代りには印度と云ふ極く大切な英吉領がぢり〜と接近して來ます。

されば露西亞の人口が殖えて其勢が熾になれば此等亞細亞、歐羅巴の諸國は皆な露西亞を恐れざるを得ますまい、蓋し露西亞は將來著しき發達のあるべき國の一つだと思はれます、何となれば天下の重なる人種中最も若く最も發達時代に居る人種は即ち「スラブ・ニック」人種でありませう、ラテン人種が一時は天下に跋扈しましたが、其後日耳曼人種が獨逸の森林中より起つて遂に「ラテン」人種を壓倒して今日に於ては天下は即ち日耳曼人種の天下でありますが、此の日耳曼人種の後より、むくむくと頭を上げて將に大に發達して、日耳曼人種を苦めんとする如く見ゆる者は即ち「スラブ・ニック」人種であります、此人種にして彌々發達するに至りましたらば、亞細亞、歐羅巴の國々は露西亞の爲めに併呑せられまいと思へば、皆中よく合體して居らなければなりません、而して如何なる國と雖も露西亞の爲めに併呑されることを好むものはありますまいから、露西亞が今後追々發達して益々侵略主義を逞しうしやうとするに於ては、亞細亞、歐羅巴の諸國は必ず能く合體して、露西亞の侵襲に敵對はんとするに違ひはありません、若し合體の仲間入りをしませぬ如

將來露西亞の諸國を相手に得るべきなり

今日日耳曼人種は天下の覇を握るべきなり

露西亞の併呑せられんと欲する國々を併呑せざるべからず

露西亞の諸國を相手に得るべきなり

き國は露西亞の爲めに併呑されて仕舞ひませうから、將來亞細亞、歐羅巴の有様は一方に於ては露西亞と云ふ大國があり、一方に於ては他の諸國の一大同盟が出来るかの様に思はれます、さう成りまして何方からも容易に手を出すことは出来なく成りまして、互に白眼合つて居ることでありませう、さてさう成つた處で其れから後は如何であるか云ふ問題に關しては、尙ほ考が御座いますが、其れは他日のことと致して、茲に一二の國に就いて一言申しませぬばならないことがあります、將來亞細亞、歐羅巴の各國の關係は大略右の如くであるとは思はれますが、中には露西亞に與する國も少しはある事で御座いませう、歐羅巴に於ては佛蘭斯の如きは露西亞と交りを厚くすべき理由は多くありますが、露西亞を敵にすべき理由は少い國であります、亞細亞に於て他の國の去就は大概分つて居りますが、印度に至つては將來其去就は如何でありますか、未だ俄に斷言する事は出来ませんが、印度は元來數多の國に分れて居りました上に、宗教の異同も多くあれば「カースト」の風俗杯がありまして、人心を一致させて一大強國を拵へ様と云ふ事は中々六ヶい國でありましたが、印度の人心一統の爲には英吉利人から取られたのが何より幸な事でありませう、如何程英吉利政府が印度人の爲めに盡しても人種と人種との惡



に取られ  
たが何れ  
より幸ひ

印度人の  
愛國心は  
何に依つ  
て起るべ  
きか

英人の爲  
めに被つ  
た耻辱は  
印度人の  
救済者な

露西亞は  
必ず印度  
の獨立を  
助けらる

み合ひは中々解ける譯には参りませぬ、如何程英吉利政府が公平なる所置を施しても、英吉利人の爲めに受けた恥辱を忘れることは出来ませぬ、蓋し印度人をして慷慨心を起さしめ、愛國心を出して奮發させ、勉強させるものは即ち英人から被つたる耻辱、英人の爲めに被つて居る耻辱でありませぬ、英人の爲めに被つた耻辱、英人の爲めに被つて居る耻辱は印度人の爲めには救済者でありませぬ、將來印度の人心を纏めて、印度をして一大強國となさんとするものは即ち英人に對するの情でありませぬ、されば印度人が開化するに隨つて、段々印度を自治のものとして、英吉利から獨立したいと云ふ念を起させない様にすれば宜しう御座います、が、左もなき時は英吉利の爲めに由々こき大事が出来致します、でありませぬ、何んとなれば印度の人心が稍々一致して獨立を欲する如き場合に至りましたらば、其頃には露西亞は彌々英吉利領に近寄つて居りまして、悦んで印度人に助けを借すでありませぬ、此時に當つて印度人は露西亞の助けを辭するでありませぬ、か、決して辭しは致しません、若し斯る事情にて印度が獨立を得ます様なことがありますれば、露西亞人が英吉利人の様に印度人を苦しめさへしなければ、印度と露西亞とは合體するに違ひはありません、併し印度は英吉利の爲めには甚だ大切な國で

ありますから、個々の英人は兎もあれ英吉利政府に於ては成る丈印度人の機嫌を取つて不平を抱かせない様に將來益々勉むるでありませぬ、から、印度の獨立杯云ふことは決してないことかも知れませんが、若し印度が獨立をする様なことがありませぬ、即ち右の如き手順であらうと思はれます。

## 志願兵諸君に告ぐ (羅馬字)

明治二十三年三月、大學の卒業生にして志願兵と爲りて居る人々を大學の總長教授數名が招待せし時の演説

予は現行徴兵令の始めて出でたるときに際して甚だ満足のことに思ひて大に喜びたり。何の爲めに斯く満足に思ひ斯く喜びたりやといふに、現行徴兵令は前徴兵令に比して甚だ満足のことと思ひて大に喜びたり。何の爲めに斯く満足に思ひ斯く喜びたりやといふに、現行徴兵令は前徴兵令に比して甚だ公平のものなるのみならず、現行徴兵令は將來日本兵士の品格を大に高めんとする傾向あればなり。夫れ公平は何人も好む所にして不公平は何人も惡む所なり。如何なる難儀と雖も人と共に蒙る所の者は、之れに堪ゆること割合に易きものなり。地震其他の天災の爲めに非常なる損害を蒙るも天下一般の難儀は何人もあきらめ易きが如し。世人多くは我一人難儀を蒙るを好まず、人と俱に之れを蒙らんことを却つて喜ぶが如し。是れ實に不親切の至りにして不都合極まれりと雖も、今日一般の人情は斯かるものなるが如し。是れ予が現行徴兵令の出でたる時大に喜べる理由の一なり。何とな

れば前徴兵令は不公平なる節ありたるが爲めに大に不平を唱へて服役を嫌へるものありたれども、現行徴兵令に至りては斯る不公平の節を除却したるが故に、是れよりは不公平を鳴らして不平を唱ふる者は世に跡を絶つべければなり。苟くも政府に於て公民の負擔すべき義務なりと認定したる事項に在りては之れを負擔せしむるに極めて公平の法を用るすんばあるべからざるなり。若し徴兵令が今日に於て必要なりとせば其の今日の如く公平の者に改まりたるは寔に賀すべきの至といふべし。併しながら兵役の義務は今日國家の爲めに果して必要なるか否やは此の義務を負擔すべき人民に取りては甚だ大切の問題ならん。今吾輩の卑見を以て宇内の形勢を察し、社會學上より各國進化の度合を窺ふに、今日に在りては尙ほ武備は必要なる者の如し。或善人達は各國をして萬國同盟共和政治の如きものを編制せしめて全く武備を解いて戦争をして此の世に跡を絶たしめんと企圖するものありと雖も、獨逸の某將校の言ひたるといふ如く斯かる望は今日に在りては尙ほ甚だ結構なる妄想に過ぎざるが如し。

予を以て見るに天下各國真正の競争は實に今日より始まらんとするが如し。天下各國の諸般の關係は今日よりして眞に頻繁ならんとするが如し。天下各國は今日

よりして始めて眞に國家時代と稱する者に入り込まんとするが如し。西洋諸國と雖も封建時代を脱け出で、より今日までの處は大概君主即ち國家といふ如き有様にて、國家は國民の國家に非ずして君主の國家なりしが如し。人民は國事を左右するの權を有せずして、却て君主の爲めに自由に取扱はれんとしたるなり。されば君主は人民を壓制することを之れ努め、人民は君主を倒して人民の天下に爲さん。とまでに過激なる者に非ざる者。雖も成るべく君主の隙きを窺うて其の勢力を剥がんと欲して止まざりしが如し。實に今日までは君主は人民を制御するに忙しく、人民は君主に抵抗するに忙はしかりしなり。されば何れの國と雖も、他國の事に充分念慮を及ぼすの暇なかりしなり。

實に近年までは各國多くは君主と人民との間に和合といふことは無くして、國家は恰も兩頭の蛇の如くにして、堅牢なる一個の國體にては非ざりしなり。されば當時に在りては内國々事の爲めに忙はしくして、他國との關係は至つて疎遠なるものにてありしなり。當時眞の國家と國家との關係は無かりしといふも過言には非ざるならん。何となれば眞の國家と言ふべきものゝ出來たるは近來君主と人民との分限漸く定まりて、國內の和合始めて整ひ協同一致の國家を出現したる上のこ

となればなり。されば各國共に前代に在りては内部争鬭の爲めに多分の勢力を費したりしも、今後に於ては外部争鬭の爲めに充分勢力を費し得ることゝ爲りたれば、今日の如く各國が全力を費して外國との戦争の爲めに準備を爲さんことは全體に於て決して出來ざりしことにして、今日各國が戦はんとする如き戦争は全體決して見ること能はざりし所ならん。今日は文明の時代なりと誇るも、未だ以て戦争を止むる時には非ざるなり。近年各國の關係を察するに、一年一年に切迫になるの姿にて、年々歳々今日か明日か、日に月に戦争の起らんことを人々恐れ合へる有様にして、先づ戦争始らずして歳を終れば、唯だ昨年は漸くにして事済みたりといふまでにて、新玉の歳は來りても妖雲更に晴ることなく、口には目出度しといふ。雖も、今年こそは厄年かと恐るゝことは相も變らず。さればグラッドストン氏の如く、唯だ無暗に國內の經濟上より兵備の擴張を不可とする者の如きは、吾輩に於ては決して感服する能はざるなり。今日の如きは英國と雖も決して昔日の如く他國との關係を離れて獨り取り濟まして居り得べき時代には非ざるなり。之を要する。否やは職として外國の身構如何に由るものなり。外國にして戦争主義のものならんには、自國は如何程戦争嫌ひでも兵備を怠ることは決して出來ざるなり。

グラッドストーン氏の如く唯だ自國經濟上より兵備を排斥するが如きは戦争の起らざる間は如何にも人民の氣に入るべき性質の者にして、人望を得んが爲めには如何にも便利なるべしと雖も、一朝戦争の起るに際しては國家の運命を實に危くするものなり。兵備の問題に關しては英國は獨り國內經濟のことに租税のことに等のみを考ふべきに非ずして、埃及のことに、土耳其のことに、印度のことも考へずんばあるべからざるなり。果して之を考へんには今日は英國の爲めには決して安息すべき日には非ずして大に戦慄すべき日なるが如し。

今日は未だ戦争時代は経過せるには非ざるなり。戦争時代は既に過去の時代なりと思ふ如きものは宜しく彼の普佛兩國の眞情を察せよ。宜しく露國政治家の欲望を察せよ。戦争時代は決して過去の時代には非ざるなり。否、天下各國の間の戦争は今日よりして愈々益々廣大ならんとするものなるが如し。蓋し今日までの戦争にして眞に國民と國民との間の戦争は古今稀れに見し所なり。國民の智者と智者との間の者に過ぎざるなり。されば今日までの戦争は其規模充分大なること出來ざりしなり。其の性質は眞に残酷なる能はざりしなり。智者と智者との間の戦争には人民の不滿怨望といふ制限ありと雖も、人民と人民との戦争には資力盡き鮮血盡

くるの外には制限とては非ざるなり。見よ、古來最も残酷なる戦争は人民と人民との戦争なりしに非ずや。彼のグレシアとトロイとの戦争の如き、ローマとカルタゴとの戦争の如き、彼の合衆國南北戦争の如き、彼の七十年普佛戦争の如き、何の爲めに彼の如く残酷を極めたりしか。何の爲めに彼れの如く廣大なりしか。蓋し此等戦争は僅かに治者と治者との間の戦争に非ずして人民と人民との戦争にてありし故ならん。

然り而して今日に在りては各國の天下は治者の天下なることを止めて、次第に人民の天下とならんとするが如き有様なり。されば今日以後の戦争に在りては人民と人民とが互に全力を盡して戦はんとする者なるべければ、其廣大なる其の残酷なる決して今日迄の戦争の比には非ざるならん。而して今後果して各國人民の間に戦争の起るべき理由ありやといふに、決して其の理由なきに非ず。各國の利害平均せざる其の一なり。各國進化の度等しからざる其の二なり。各國人民未だ戦争の害悪を知らざる其の三なり。今日は尙ほ戦争時代なり。スペンサー氏の所謂商業時代は未來の時代なり。彼の英國が今日早く商業時代に進みたる如く見ゆるは各國將に商業社會にならんとするの兆に非ずして、地勢の爲めに生じたる一種例外の

場合に過ぎざるなり。封建時代を脱け出で、英國獨り一足飛びに商業時代に入りたる如きは隔絶せる島國なるが爲めなりしなり。他國の發達不充分にして且つ其の内部の和合整はざりし間は各國の關係繁劇ならざりしが故に、英國獨り獨立して一個別世界を爲し居る如き事情ありしが爲めなり。英國が國家競争の時代を経過せずして泰平時代表商業時代に打入りたるは全く英國特有の地勢の致せし所なり。然れども爾今以後は英國と雖も従前の如くに他國との關係を避けて一個獨立世界別天地を爲して取り濟まして居らんことは素より出來ざる所ならん。英國が今日まで獨立世界を爲して居ることを得たるは他に大國が内部の進化に忙しくして外部に對して勢力を張る暇なかりしが爲めなり。實に當時に在りては英國は獨り獨立なりしのみならず、歐羅巴外の地方は亞米利加なれ印度なれ、アフリカなれ、オウストラリアなれ、英國獨り思ふ存分に勢力を逞うせしも他國に於ては奈何ともすること能はざりしなり。然れども各國共に内部の進化大に發達したる今日以後に在りては、皆英國と同様に歐羅巴外に於て或は殖民地を作らんとし、或は商業地を得んと欲して止まざるならん。されば英國は本國地勢の故を以て如何に従前の如くに獨立し居らんとするも、海外諸領地の故を以て決して斯くする

こと能はざらん、されば英國が加奈太を捨て、印度も捨て、アウストラリアも捨て、埃及も捨て、亞非利加諸領地をも捨て、和蘭の如き者となりて満足し居らんとするに非ざるよりは、決して兵備を忽せにすべからざるなり。兵備のことは決して自國一個の都合に依りて左右し得べきものに非ず、諸外國の性質如何に因りて決せずんばあるべからざるなり。然るに今日各國身構の有様を察するに、英國は決して兵備を忽にすべからざると同様に、日本に於ても決して之れを忽にすべきにあらざるが如し。論者或は謂はん、西洋諸國は今日兵備こそ實に嚴重なれ、其の實唯だ瞰み合ひの姿にして實際戦争は容易にせざるならん。故に日本などにて兵備を嚴重に爲すの必要は決してあらざるなりと。夫れ或は然らん。然りと雖も西洋諸國の瞰み合ひは西洋諸國の瞰み合ひに過ぎざるなり。西洋外の諸國に對しては決して瞰み合ひには非ざるなり。ブルマに對しての英國の處置は如何なりしか。マダカスカルに對しての獨逸の處置は如何なりしか。アピシニアに對しての伊太利の處置は如何なりしか。西洋諸國は互に對してこそ干戈を動かすことに躊躇すれ、西洋外の諸國に對しては一刻も借さざるなり。然れども日本の既に西洋諸國の一部と看做される如き者に爲りたりとするか、甚だ疑ふべきことといふべし。

條約改正談判の經驗は決して吾輩に斯かる妄信を興へざりしなり。今假りに西洋諸國は日本の爲めに恐るべき者に非ずとするも、若し日本にして兵備を怠らんに、日本は早晚支那の爲めに第二朝鮮視せらるゝに至らん。支那は輒近大に發達して世界中最も大切なる要素の一となるに至らんこと疑なきなり。蓋し英國が印度に於てロシアと力を角するの日に際して勝敗の歸する所は支那の應援する否とに由らすんば非ざるなり。英國政治家の機敏なる茲に見る所ありて、頃者大に支那の歡心を買はんとして汲々たるに非ずや。然り而して支那隆盛を來すは吾輩東洋人に取りては一方に於ては大に喜ぶべきことにして、又一方に於ては吾が帝國の爲めに甚だ恐るべきことたるは言はずして明かなり。されば吾が國兵備のことたる今日に在りては尙ほ決して怠るべからざるが如し。蓋し西洋諸國の間に今後平和の打續くことあるも、それは侵略主義の滅殺したる爲めに非ずして、各々兵備嚴重なるが爲めに、容易に犯すべからざるの有様なるが故の如し。西洋諸國が今日兵端を啓かざるは爲さざるに非ずして能はざるが爲めなり。蓋し互に隙を窺ふことは片時も止まざる所なるが如し。實に今日は獨相ビスマルクの説の如く兵備に因りて平和を維持するの時なるが如し。されば今日に在りては兵役の義務は吾輩日

本人に在りても決して免れ能はざる所なるが如し。若し兵役は果して今日吾が邦人の免れ能はざるの義務ならんか、然らば本邦人は皆快く此の義務を盡すべきなり。人各特別の義務あり、又特別の職業ありと雖も、租税の義務なれば、兵役の義務なれば、今日の時勢に在りては國民一般に盡すべき者なりとせば、尙も公民たる者尙も男兒たる者は之を避けんとするが如き卑劣心は脱せずんばあるべからざるなり。蓋し天下に最も愉快なるは義務を盡したりといふの感覺に勝る者はあらざるならん。若し此國をして未來永劫獨立國たらしめんと欲せば、一朝事あるに際して日本男兒は鮮血最後の滴を注ぐことを各々快くせすんばあるべからざるなり。日本女子は堅牢なる錨綱を造らんが爲めには緑の黒髮を切斷するも敢て憂ふる所なかるべきなり。兵役の義務は國家の爲めに盡すべきの義務なり、君主の爲めに盡すべきの義務なり、妻子の爲めに盡すべきの義務なり、姉妹の爲めに盡すべきの義務なり。志願兵諸君は他に卒先して此の重大なる義務を盡さんとせらるゝ者なり。諸君は平和に於ても第一、戦争に於ても第一たらんとせらるゝ者なり。諸君の快樂は豈に譬ふるに物あらんや。諸君の位地は予に於て甚だ羨む所なり。諸君の就役は予に於て實に喜ぶ所なり。然れども予に於て諸君の就役を喜ぶは世人往々國家

の爲めに此の貴重なる義務を盡すを厭ふにも拘らず、衆に卒先して此の就役を願はれたりといふの理由には止らざるなり。更に諸君に囑する所の一の大なる望あるが爲めなり。其の望は何ぞや。本邦兵士の品格志願兵の故の爲めに大に改良を加へんとすること即ち是れなり。諸君志願兵の如き者と伍を爲すに於ては、一般兵士は冥々の裡に莫大なる効果を受けんこと疑なきなり。彼の普佛戦争の時に際して普兵の佛兵に優りたるは職として教育の優れるに由れりといふなり。兵士にして單に器械的の動物の如きものたらずして、正しく公民たるの義務を辨へ、報國盡忠の心を以て兵役に服する者たり、國家と俱に倒るゝを知りて國家の爲めにのみ身體を抛つを知るが如きは、國家安全の爲めには最も必要のことといふべし。兵士は國家の爲めに必要なりとせんか、兵士は獨逸の兵士の如く、合衆國南北戦争の時の兵士の如く、知識あり教育ある者より成立するものにして始めて眞に強きことを得るなり。蓋し吾が國の兵士をして此の如き者たらしめんことは大に諸君志願兵の盡力に由らずんばあるべからざるなり。諸君の効力は實に大なりと言はざるべからず。諸君の責任も亦大なりといふべし。然れども諸君の効力は尙ほ之れのみならず。將來天下に戦争の眞に止むべきも、是亦諸君志願兵の如きものに止まらざるなり。

の力に依らずんばあるべからざるなり。蓋し昔日の兵士の如く、錢の爲めに兵士となる者は戦争の絶ゆることを恐るゝ者なり。義務の爲めに就役する者にして始めて戦争の害悪を悟ることを得べきなり。血税は父母の恐るゝ所なり、血税は姉妹の泣く所なり。今日各國俱に徴兵の法に依りて戦ふの外他に策なきは即ち將來天下に戦争の絶えんとする兆なるが如し。此の法に依りて戦ふに至つて始めて各國人民中に戦争の害悪を悟るの念慮深からんとするなり。然れども世人をして此の害悪を最も能く悟らしむるは志願兵の如く教育あり學識ある者にして就役するに優れるものあらざらん。佛蘭西の兵に、獨逸の兵に、露西亞の兵に、日本の兵に、諸君の如き者の多く就役せんことは天下に兵備を止めしむる爲めには極めて必要なる順序の如し。諸君の位地は羨むべし、諸君の任は實に重し。

## 社會改良と耶蘇教との關係

(明治十九年十月)

男女同伴の風は果實にして我邦にはなき

今の我が邦社會の有様を論ずる者にして古來我が邦に西洋風の男女交際なきことを歎せざる者はあらざるなり。或ひは曰く「我が邦には古來西洋風の男女交際なくして饗融會話の席に光澤ある愛嬌あるなし」と。或ひは曰く「西洋にて公園などに到り見れば群集の中には、ひとり女子の多きのみならず中には相伴ふたる男女甚だ多きを見るべし」と。雖も日本に於ては大いに之と異なり公園などに徘徊する人物の中に女子は僅かに其の十分の一にも上らずして其れすら下女小使の類に過ぎず。況んや男女共に相伴ふて兩々雙々往來する者に至つては幾んど見ること稀れなる所なり」と。蓋し今日我が邦社會の改良を謀る者の斯の如く極論するは素より已むを得ざるの方便なかるは知らねども、若し是れ等の論と社會の實情とを比較し見むには大いに其の間に相違する所あるを見るべし。試みに三四月花見の頃上野若しくは向島に赴き見るべし。群集の中には女子の數決して少なからずして、其中には然るべき身元の婦人も稀れならざるのみならず、男女相伴ふ者も甚だ多

からむ。又初卯に龜井戸に赴き見るべし。酉の町に驚大明神に赴き見るべし。水天宮を始め其他神々の縁日に詣で見ると。群集の中には下女小使の類にあらざる女子多きのみならず、男女相伴ふ者決して少なからず。是れ余が屢々目撃せし所に付て言ふものなり。而して我が邦に男女相伴の行はるゝは、ひとり東京のみにあらず。余曾て静岡に住居せしことありしが、土人の風として神社の祭禮若しくは花火見物などに男女の出かける時は皆な互に手を擁し全く西洋風に兩々雙々行くを常とせり。これ當時余をして大いに驚かしめし所なりき。又余の實視する所によれば我が邦芝居見物人中にも男女相伴する者決して少なからず。夫れ斯の如く余の實験によれば男女相伴の風は我が邦に行はれざるものにはあらざる様に思はるれども、或ひは論者輩の説の如く男女相伴などいふことは我が邦には絶えて之なく之ありと思ふは全く余一己の誤見に屬するやも知れずと。大いに疑を起し世には余と同感の者もあるや否、篤と其の邊を探り、余の考への正否を質さむと欲せしかば、其の證據の最も争ふべからざるものは蓋し數多の畫工が互に期せずして各、獨立に畫きたる圖畫に勝るものはあらざるべしと思ひ、則ち諸國の名所圖會に就て人民群集の様を畫きたる圖繪を檢査せしに、其の圖は一として余の考への正確な



花見祭禮  
の日等  
の女子  
の多き  
事の数

るを證明せざるはなし。即ち花見祭禮縁日等總て多人數群集する所には必ず女子の數幾んど男子の數と同じきのみならず、其の中男女相伴の場合決して少なからざる如くに書かざるものは稀れなり。茲に二三の例を擧げむに、尾張名所圖會中、本町三丁目醫學館直傳三臟圓店の圖、阿彌陀寺木佛涅槃會の圖、上畑裏天王祭造り物の圖等に就て見るに、群集の中には女子の數少なからざるのみならず、其女子たる決して下女、小使の如き者の類にはあらざるなり。又其の中には男女相伴する者も多くあるが如し。又都名所圖會に就て見るに、七月十六日金閣寺の後山如意が嶽の大文字の送り火見物の圖の如き、紫野今宮晦日やすらい祭の圖の如き、御室花見の圖の如き、高臺寺萩の花見の圖の如きは、何れも本邦男女相伴の様を示すに足るものにして、殊に御室花見の様の如きは四方幕を張り回し其の中に主と思しきものは脇差を帯びて坐し、婦人と思しきものは摸様の着物を着して其の傍に坐し、男女に取しまかれて夫婦睦まじく酒宴を催はし、或ひは歌をよみ或は琴三味線の曲を催はしなごして居る様は男女快樂を共にするも強ちに楽しんで淫するものとも見えざるなり。江戸名所圖會に就て見ても亦其の如くなり。かの神田明神祭禮の圖の如きはよく其の實景を寫すものにして、徳川時代と雖も日本には男女相伴といふ

日本に男  
女同伴の  
風なしの  
とほ大い  
なる妄説

士族社會  
と農工商  
の男女交  
換は實際  
の事同  
あるに

この行はれしことを證明するに足るものなり。されば我が邦には古來男女相伴の風なしなどは大いに事實に背反するの妄説といふべし。さりながら日本に古來男女相伴の風なしといふは事實に反したることには違ひなれども、男女相伴といふことは日本社會中某種族の間には稀れに行はれしものたることは事實蔽ふべからざることなり。某種族とは則ち士族社會のことなり。我が邦人民は昔より之を士農工商の四種に區別せしが、其の四種中にて男女同伴といふことの稀れに行はれしは、ひとり士族の中のみにして農工商中に至つては男女相伴の風は昔より常に大に行はれしものゝ如し。夫れ花見たり芝居見物たり京大阪でも花のお江戸でも其の他如何なる地方でも農工商に至りては男女相伴して其の快樂をうくるを以て規則とせるが、ひとり士族社會に至りては農工商社會とは大いに異なり、其の間には古來男女相伴の風の行はれしこと少なく、物見遊山でも宴會でも無骨嚴肅なる男性のみにて其の快樂を盡すを以て例と爲せり。古來我が邦にては農工商の間にては男女の交際濃にして士族の間には淡なりき。而して夫婦相伴して物見遊山などに出かけむとするに當り、家を出る時は各別に行くものゝ如くに爲し、稍、近隣を離れて始めて鴛鴦相雙びて行かむとするの風の如きも、日夜武

道を心がけ女性などに近より惰弱の振舞ありては決してなるまじき武士社會のみ行はれし風にして、農工商に至りては夫婦相伴して花見遊山に出かける時は見世の小僧若くは飯たき男などにワリゴ、スイツツ等を背負はせ、近隣の者杯に大べらに埃撈を爲し、今日は花見に参りますと自慢らしく風聴をしながら出で行くが常なり。茶屋小屋に上り飲み食ひするにも士族は男子のみにて之を爲すを例とすれども、農工商は男女相伴にて之を爲すなり。試みに花見遊山の歸路に料理茶屋に上りて見るべし。士族の多く飲食する茶屋ならば、男女相伴する者は甚だ稀れなるべし。雖も、農工商の多く飲食する如き茶屋ならむには、夫婦睦まじく一つ鍋からうまさうに食ひ合ひ取り合ひなごして居る如き連中は決して少なからざるならむ。農工商の間には夫婦相伴の風の斯の如く行はるゝのみならず、未だ婚姻せざる男女が近く接して交際するの例も決して無きにあらず。例へば正月には彼の歌がるたの催ほしの爲めに男女が多く集まり互に手をつめり合ひたり、ひツかき合ひたりすることあれば、夏には盆踊り花火見物などいふことあり。日本の女子は男子と言へば親姻の外は曾て言語を交ふるの機會なしとは、これ士族の間の風にして農工商の間の風にはあらざるなり。又家内にて主が妻子に接するの模様は如き

男尊女卑の風は専ら士族社會に行はる

も武家に在つては偏に嚴肅を旨とし、食事をするにも家長と其の他の者とを全く之を別に爲せしか、然らざるも恰も主従の如き有様にて之を爲せし。雖も農工商に至りては夫婦往々とり膳にて食事するのみならず、一つフタモノのナメモノへかはるがはる箸を入れ、鐵火味噌でも梅びしほでも少しも嫌ひ無く之を互に嘗め合ふ如き更に夫婦の間に隔て無き如きもの決して少なじとせず。男尊女卑の風の如きも其の最も盛んに行はるゝは士族社會にして、農工商の間には男女の尊卑は決して士族社會の如く甚だしきものにはあらざるなり。女子が自から業を營なみ若しくは夫を助けて簿記出納等のことを掌る等のことはひとり西洋にのみ行はるゝにあらず、我が邦にもイクラもあることなり。知らずや商家には妻女が見世に座して亭主同様如何様なる客とでも談判を爲し物品と共に愛嬌を賣る如きもの日本國中實に多きのみならず、女房が帳場に座し算盤をはちき出納簿記のこゝを掌る如き場合も決して少なじとせず。蓋し斯の如きは割烹店、芝居茶屋、旅籠屋等に於て最も多く見る所なり。此れに由て之を觀るに女子が男子と共に事に與かり、男子同様に外人に接するは我が邦農工商社會の間には古來行はれしものにして、女子をして深室にのみ閉居せしめ、外に出で、他人に接する如きこ

を爲さしめざる如きは、特に士族社會に行はれたる風習にして、廣く日本一般の社會に行はるゝ風習とは決して言ふべからざるなり。

總て我が邦に男尊女卑の風の盛んに行はれたるは武家社會の間にて農工商社會の間には其れほど行はれざりしなり。こゝに之を證明する一例を擧げむに武家に在つては男の子と女の子とは餘程貴み方が違ひ、殊に總領に當る者の如きは姉と妹の別なく、女の兄弟は全く格式を異にし主従の如き關係なりしなり。然るに農工商社會では男の子でも女の子でも子は則ち子なり、甲者と乙者との間に武家の如き尊卑を立てしことは無じと思はる。而してムスメが年頃になれば良家を選んで之を嫁入りさするか、然らざれば商家なれば財産を分ちて新たに見世を出させ、農家なれば田畑を分ちて分家させ、跡取り一人は總領の總領たる名に背かず、財産家を擧げて悉く一人にて相續すること武家の如く甚だしきものは他にはあらざりしなり。

父母がムスメの爲めに配偶を選ぶことの如きも武家と農工商とは大いに其の事情を異にせしもの無きにあらず、武家に在ては婚姻の前たゞ一度見合ひといふことを爲せしのみで、しかも其の見合ひたる其の名こそ雙方の當人が果して意に適

財産を遺すは士族と平民とは異なる事

配偶を選ぶのは士族と平民とは異なる事

ひたるや否やを鑑定する爲めの機會なれども其の實は全く虚なる式に過ぎざりしなり。父母が既に豫じめ配偶すべきものと決定したる時は、素よりムスメの身として兎や角と否み得べき限りにあらず、一たび見合ひをしたら最期、イヤと思ふ男の所へも嫁さねばならぬが武家の風なり。然るに農工商殊に商家に在ては縁組は成るだけ同家とか分家とか其の他既に商賣上などにて懇意の間柄にて結ぶ者多きが故に武家の如く全く一面識も無き者の方へ婚嫁する如き場合は多からざるのみならず、往々見世の若い者の中に商賣上のことにもささく、且つ其の人と爲り實體のものなりとて父母のメガネに適ひしのみならず、ムスメもまんざら氣の無きものにもあらざればとて、竊かにツバに尋ねさせて見れば、一生夫婦となるならばドーンあの様な實體なものを夫にもたらせば、見世の爲めにも宜からうと、どうから思つて居たなどといふ如き事情にて即ち財産を分ち別に店を出させて目出度夫婦になるなどいふ場合も決して少なじとせざるが如し。甚だしきに至りては親は他へ縁付けむと思つても、ムスメお染がドウあつても見世の久松でなければイヤだどカブリをふり、爲めに折角出来かゝりたる良縁も破談となして遂に久松ごめあはせる如き例しも往々あることなり。すべて商家にて配偶を擇ぶの法は

武家にて之を擇ぶの法は大きいに異なりて西洋風に近き所なきにあらず。而して以上に述べたる様は上等なる商家にて配偶を擇ぶの法なるが下等なる所に至りては彼の所謂クツキアヒにて出来る夫婦の如きは本邦の如きも決して西洋に耻ぢざる所ならむと思はるゝなり。たゞ惜むらくは其のクツキアヒたる情交上にあらずして肉交上にあること是れなり。若し之をして肉交上のものにあらしめずして情交上のものたらしむることを得ば全く満足のものとなるならむ。

世には女性崇敬の風を以てチュウトニック人種にのみ一種固有なる天賦の性質によるものにして、宗教の故にもあざれば其の他如何なる情實の爲めにもあざる如くに説く者あるが、若し果して論者の説の如く英國人などが女性を崇敬するはたゞチュウトニック種の男子の一種心やさしき天性あるより外ならざる故とせば、かゝる天性の具はらざる人民に女性崇敬の美なることを説くも少しも其の効なく、かゝる天性の具備せざる人民の間に女性崇敬の風儀を養成せむとするも到底かなはざるの望みなるべしと雖も、余輩の考へにては男尊女卑の風たり女性崇敬の風たり決してかく偶然の天性の爲めにはあざるならむ。若し英國人などが女性に崇敬するはチュウトニック人種の男子の一種心やさしき天性による

女性崇敬  
の風の事

の外なしとせむか、其の天性は素より由つて来る所なくむばあざるなり。苟くも天地を主宰するの神ありとせむか、何の理も無くひとりチュウトニック人種のみかゝる優美なる性質を授けたまはむとは、あまりに依怙の沙汰といふべし。苟くも宇内を統轄する一定紀律ありとせむか、かゝる偶然のことは素より一も有るべき筈なし。余輩の考へは大いに論者輩の説と異なり、男尊女卑の風たり女性崇敬の性たり全く開化の性質如何によつて来るものにして、随つて宗教の性質にも大いに關係あるものと思はるゝなり。我が邦人中と雖も士族なると平民なるとによつて男女の關係に著るしき異同あることは既に前陳する如くなり。論者は其の然るは其の然るべき事情ある故に非らずして、士族の男子の心には一種やさしき天性なく農工商の男子の心には一種やさしき天性ありと思はるゝか。日本の農工商もチュウトニック人種同様神より特別の愛顧を受けたるものと言ふべきか。論者の説によれば我が邦も太古に在ては女性を崇敬するの風を存せしは、天照皇太神宮を戴き群臣が服従せし例にて知るべきも、其の後支那の文物の入りこみたる以後は其の爲めに化せられて支那同様に男尊女卑の風に行はるゝ様になりたりといふ。果して然らば我が邦人も太古はチュウトニック人種同様一種心やさしき天性

某論者の  
自家撞着

男尊女卑  
の風を原  
因とする

を有せしも、其の後に至りいつの間にかこの天性は消え失せたるものか、英人には女性崇敬の風あるはチュウトニック人種の男子の一種心やさしき天性あるによることながら、日本人民に女性崇敬の風なきは支那の開化に化せられたるが爲めなりとして之を外國の情勢に原因するものと爲すは自家撞着の批難を免かるゝ能はざるなり。此の所に在て外圍の情勢の爲めに亡びたる風習ならば、彼の所に於て存せるも亦外圍の情勢の爲めによりしならむといふべからざるの理は素よりあらざるならむ。蓋し男子に女性崇敬の心乏しくして、男尊女卑の風の行はるゝと否やとは、余輩の考へにては何の理由もなく某人種にのみ固有なる特性にはあらずして、曾て此の風を存せし如き國と雖も支那の如き開化に化せられむには、遂に消滅せむとするといふ如く外圍の情勢に従つて存亡あるものと思はるゝなり。蓋し社會の軍務的のものなるは産業的のものなるに比し、夫れ軍務的社會に在ては一己人の自由快樂よりは寧ろ社會の紀律秩序等が肝腎にしてかゝる社會の精神は壓制束縛に在るが故に、外、政治上の事より、内、家政に至るまで獨裁壓制の行はるゝが規則なれば、社會に在て天下を治むる専制君主があると同様に、一家を治むる専制家長がありて、家長は則ち生殺の權までを有し妻子を擧げ

多妻制  
の専制  
社會

野蠻な  
人種  
の風  
行はる  
例あり

羅馬に  
ては  
少  
男  
の  
風  
を  
減  
少  
せし  
事

て、家長の隷屬の如き者たらざるは無し、之を各國の史に徴するに、軍務社會に在ては女子の地位低く産業社會に在ては女子の地位高きが如し。第一女子の地位の低きことと密着の關係を有する彼の多妻制若しくは蓄妾制の如きは戦争社會の専有物にして産業社會には行はれざる所なり。彼の印度の丘岡の土人ボードー人種ダイマルス人種の如く野蠻なる者と雖も、軍務社會にあらざるものに在つては、其の妻女を待遇する事よくして之を厚く信じ之を深切に取扱ふといふ。ダイアック人種の如きも其の社會の組織たる軍務的のものにあらずして産業的のものなるが、其の人種は尙ほ未開なる者なるにも係はらず、一夫一婦の制を奉ずる者にして男子は其の愛を得むが爲めに女子に媚び配偶を擇ぶは男子にあらずして女子にありといふ。ピュエブロー人種の如きも亦之と同じきのみならず、兩親が然るべき縁談なりと思ふもムスメに於て不承知なる時は決して之を嫁せしむる能はずといふ。白哲人種に就て徴するも社會の軍務的のものには男尊女卑の風伴ひ、其の産業的のものには女性崇敬の風伴ふが如し。古昔の羅馬人の如きは最初其の國尙ほ小にして四方に敵國をひかへ戦争止む時なかりし時に在ては家長政治の最も嚴肅なるもの行はれしかば、男子の地位甚だ高くして女子の地位は隨つて低かりし

女子の地位最も高き事  
英米の如き者  
人種の如き者  
國に屬する如き者  
ウトニック人種に屬する如き者  
同種に屬する如き者  
英米の如き者  
人種の如き者  
國に屬する如き者  
ウトニック人種に屬する如き者  
同種に屬する如き者

も其の後羅馬が次第に四隣を併呑して海内を一統し天下漸く治まりて産業大いに隆盛を極むるに及んでは男尊女卑の風も次第に改まりて女性を崇敬すること昔日の比にあらざる様になりしといふ。然るに女子の地位は一旦斯の如く進歩せしも北方人種の爲めに羅馬が亡ぼされて天下は再たび四分五裂して又戦國黑暗の世の中となりたる時に當つては折角進歩したる女子の有様は再び大いにアトモドリの方となりたりといふ。其の後復た戦争も稀れになりて産業の追々開くるに従つて女性の地位復た再たび進み近時に至つては之を崇敬するの風古來未だ見ざる所となれり。然り而して方今西洋諸開明國の中にて女性の地位最も高きは英米の如く産業最も隆盛なる國にして佛蘭西の如き軍務最も盛んなる國に在ては女性の地位遙かに低し。且や同じウトニック人種に屬するの國と雖も獨逸の如く軍務の忙しくして商業わりに進まざる國に在ては男尊女卑の風は行はるゝこと英米の如く産業軍務に勝つ國に比ぶれば實に盛んなりといふべし。聞く獨逸に於ては女性をして戸外に勞働せしめ男子は却つて煙草を吹かし麥酒を飲みつゝ日をおくり甚だ得色ある如き者往々之あり。雖も英米の如きに至りては如何ほど下等なる者と雖も斯の如く男氣に乏しき者は決して無しといふ。若し女

我邦にも  
女性崇敬  
の風あり

女帝の事

性を愛敬するの風はウトニック種の男子の一種心やさしき天性あるに由るより外ならずとせば同じウトニック人種たる者彼の獨逸人と英米人との如き者にしてかゝる異同は素より有るべき筈なきなり。此れに由て之を観るに女性崇敬の風の行はると否とは其の遠源は人種の異同にもあらず、宗教の異同にもあらず、文明開化の進歩の度にもあらずして、全く社會の軍務的なるも産業的なるもの異同にあるが如し。蓋し宗教の如きは遠源にはあらざるも近源としては女性尊卑のことには大いに關係あるものと思はるゝなり。本邦の史に徴しても天子群臣を率ひさせられて親から天下を治めさせられし時代と其の後武家の世となりて英雄四方に割據して兵亂止むこと無き時代とを比較して見るに前には女性を崇敬するの風大に行はれしも後には甚だ之を輕蔑するに至れるが如し。蒙昧の時世に在て女子をして帝王の位を踐ませしものはひとりウトニック人種に限る如く説く者もあれども、我が邦の如き武家の世となれる前に在ては女帝の位を踐ませたまひし者其の例少なきとせず。而して其の時勢を察するに海内漸く一統して且外征も漸く薄らぎ、兵の事はたゞ蝦夷の事あるに過ぎずして、海外の文明漸く入り來り産業大いに興り、政府は治國に意を専らにし法律漸く整ひ學藝頗る

社會改良と耶穌教との關係

女性の風武家  
の世に至  
り衰へし

進歩し、鑄錢の制あり施樂の事あり、經を寫し書籍を著はせるの日なり。然るに其の後兵亂漸く繁く、遂に天下を擧げて武家の手に歸せしめ、黎民を擧げて武人の爲めに蹂躪せしむるに至り、天下一日も安堵の思ひ無く、農事産業共に大いに衰微せるの日に當つては、數百年間一女帝の位を踐ませたまへる無く、徳川氏海内を一統して再び天下泰平となり、今はフクロに鎗はサヤ、産業再び興り文藝漸く盛んならむとするに至り、復た再び女帝の位を踐ませたまへるを見るに至りしは決して偶然のことにはあらざるならむ。彼の和泉式部、紫式部、清少納言、赤染右衛門等を出現せしめし時代は女性を輕蔑することの甚だしかりしものにはあらざるならむ。

男尊女卑  
の風と遺  
産法との  
關係

夫れ女性尊卑は戦争の多少に遠源するものなれども、遺産法并に宗教の如何の如きは近源としては甚だ勢力あるものゝ如し。我が邦士族社會に行はれし遺産法の如く、親の物は家屋でも知行でも總領一人で譲り受け、アトトリムスメにあらざるよりは女性としては、我が所有としては僅かに衣類數品と櫛笄に止まり、金錢は有るも僅かにヘソクリガネに過ぎずして、露命を繋ぐは全く夫のお情けによるものにして、無慈悲なる夫ならば妻をヒボンにするは何より易きことなる如き事情にて、

アトトリ  
ムスメの  
威權強き  
事

何を買はむとするも必ず良人に依頼せねばならぬこと、我が邦武家社會の女子の如き者に在ては主従の勢ひ既に定まりたるものなれば、夫に媚びざらむとするも媚びざるも得ず、卑屈にならざらむとするもならざるを得ず。女性尊卑の大いに財産の有無によるものなることは、武士の女房でもアトトリムスメには夫が大概一目おくが常にして、日本にては亭主よりは女房が朝も早く起きるが一般の習ひなるも、アトトリムスメならば、夫は早く起き庭の掃除でも爲し居るに、女房はトコの中にて烟草の小十服も吹かし朝飯前になりてやうく、トコから這ひ出る如き場合少なからず、又女房が他より來りし者ならむには、大威張で好きな女を内へ引き入れむとする如き男子も、女房がアトトリムスメならむには友人の口をかたくごめて竊かに脇にかこつて置くが常の策なり。尋ねずとも人の細君のアトトリムスメなるや否やは其の様子に大概は分るものなり。男子をして女子を崇敬せしめむには女子をして財産を所有せしむる如きは最も有効なる手段と思はるゝなり。蓋し我が邦も既に世祿の制廢せられて、今日の財産は何人の所有するものと雖も其の好み次第之を贈遺することを得べきものなれば、これまでの如く總領にのみ總て譲り渡すことを爲さずして、平等に二人でも三人でも其子の間に分ち、女子と

女子に財  
産を所有  
せしむる  
の必要

雖も己れの財産を所有するやうに爲さむことこそ願はしけれ「子婦無私貨、無私蓄、無私器、不敢私假、不敢私與」などいふ教は今日に在ては遵奉すべきものにあらざるなり。

男尊女卑の風と宗教との關係

次に女子の尊卑に大いに影響ある近源は宗旨なり。某論者は太古我が邦には女性崇敬の風存せしも、支那文物の侵入し來りて其の爲めに化せられて之を失ひたる如く説けども實は其の失せたるは前陳せる如く社會の性質一變して軍務主義のものとなりたるが爲めにして、支那の文物の侵入するに否に係はらず、武家の世には到底男尊女卑の風を行はるゝは已むを得ざる次第なれば、之を支那文物の侵入せし故にのみ歸するは支那文物の爲めに大いなる冤罪なるのみならず、之に過分の價値を興ふるものといふべし。蓋し支那文物の爲めに眞實蒙りたる所は、當時我が邦の事情大いに變遷して、古來行はれ來りし女性崇敬の風は將に消滅して、男尊女卑の風の漸く其跡をつがむとせし時に際し、男尊女卑を旨とし家長政治に最も適したる孔子流の宗旨が入り來り、我が國勢を助けて、既に其のキザシを現はし到底行はるべき男尊女卑の風をして益猖獗を極めしめたるに過ぎざるならむ。恰も謀殺の企てある者に利器を貸したるに異ならず、謀殺者は何かして其の企てを

支那の風と男尊女卑の關係

果したらむには違ひなからむと雖も、之に正宗の刀を貸し若しくは爆裂薬を興へむには謀者は之が爲めに大いなる便を得、企てを果すことは甚だ速かにして被害者の數も一層多ならむとせむ。支那家長政治の我が國勢を助けたることは決して少なからざるならむ。孔子の教を假りて男尊女卑の風は一の封建宗旨を爲すに至り、之を實踐する者をして其の行ひに耻づる所なからしめたるのみならず、却つて之を以て天上天下唯一の人道なりと心得、此の道を履まざる者は人にあらず此の行ひを爲さざるものは夷狄なりと誇唱するに至らしめたり。實に笑止千萬の事なり。

武家の世に男尊女卑の風は自然の勢なり

武家の世に男尊女卑の風行はれたるは素より自然の勢ひなり。抑武家社會の主意たる公平にあらずして秩序に在り、愛情を後にして嚴肅を先にし、自由は行はるべからずして壓制を是れ頼むべく、國に專制の主長あれば家に專制の家長ありて生殺與奪の權を有し、出床の時より就寤の時まで家長は恰も法官が法廷に臨みたるごと一般威儀を正しく家族隸從に接し、常に怠らず其の舉動に注目し、若し家内に不義イタヅラを爲すか、其他不正の所爲を爲す者あらむには、妻子と雖も一刀兩斷に斬りすて、其の罪を糺さざるに於ては、家事不取締の廉を以て家斷絶となるも



武家社會の  
男女の交際  
疎遠なる  
理由

計り難しといふ、嚴重なる仕掛なりしかば、家長の威權は實に地獄に在て閻魔大王の如きものなるのみならず、且つ軍務社會に於て功名手柄を爲して天下に名を顯はし、人の上に立つ事を得る者は詩文の才を顯はすものにあらず、唱歌管絃に巧みなる者にあらずして、兵馬の中を往來して強弓をひき大太刀を振りまはし、敵を破り城を抜く如き者即ちこれなれば、巴板額にあらざるよりは女性の身にて技倆を顯はし人に尊敬せられむことは到底むづかしき時勢なれば、此の時勢に在つて女性崇敬の風の行はれざるは素よりのことにして、遂に女は蛆虫同然のものごせらるゝに至りしは全く自然の勢ひなり。然り而して武家社會に男女の交際疎遠になり農工商社會の如く親密ならざるに至りしも亦其の事情已むを得ざる次第なるべし。夫れ軍人は諸の情慾を抑制して其心身を堅固に爲さざるべからざるは他人の比にあらず。若し之を爲さざるに於てはかゝる軍人より成立するの軍は善く敵に勝つ事を得る能はざればなり。而して人の最も慎しむべきは女色に過ぎたるは無く、殊に幼稚なる人種に在ては男女の交際は情交に止ること難くして、動もすれば肉交に陥り勝ちなれば、外勢之を制すること強からざるに於ては、淫風公行して懦弱の性質を生ずるは免かるゝ能はざる所なり。されば幼稚社會の軍人の如きは

孔子の主義の  
道徳主義の  
我邦の時勢  
を助ける  
勢を助ける  
男界の風を  
強よめしめ  
しめよめし  
めよめしめ  
しめよめし

男女の交際を嚴制することの必要なるのみならず、適者生存の理の爲めに男女の交際を嚴制する如き軍人に富む社會のみ存在するに至る。則ち我が邦にて彼の強藩諸侯と言はれし者は何れも衣は胛に至り袖は腕に至り路に美人に遇ふも敢て顧みることなく、よく情を愼み一言に武を勵みし如き壯士に富める者、薩の如き土員の如き肥後の如き會の如き者は是れなり。婦人の愛にひかざるゝ者彼の土岐藏人頼に亡ぼされたるが如き素より怪しむに足らず、シーザルがポンペーに勝ちたる如き亦偶然の事にあらず。日本武士の女子に交はるの疎かりし如き決して其の理なきにはあらざるなり。

夫れ武家の世に男尊女卑の風行はれたる如き、男女交際の疎遠なりし如きは共に右に論じたる如き情實の爲めに起りしことにして、到底當時の時勢に在ては免かるゝ能はざる所なるべし。雖も彼の孔子流の道徳主義の如きはよく其時勢に適ひたるものなりしかば、其の機に投じて大いに助を假したるものといふべし。孔子曰く「婦人伏於人也、是故無專制之義、有三從之道、在家從父、適人從夫、夫死從子、無所敢自遂也」男尊女卑の風を尊ぶ人の爲には實に無比の教と言ふべし、又彼の七年男女

不同席不共食」女子十年不出」女及日乎閨門之内、不百里而犇喪」等の教の如きは男女の間を離隔し其の交際を疎遠ならしむるに頗る効驗ある者にして、封建時代にはよく適したるものなりき。されば男尊女卑男女疎遠の風の如きは封建宗旨の最も大切な主義となりて、遂に彼の女大學の如きものを生じ來りて天の道なり聖人の教なりとして女子一般に此の主義を教へこむに至り、婦人は夫を主人と思ふべきなり、婦人の道は人に從ふにあるなり、女は歌舞伎淨瑠璃も見聞きすべからず、宮寺などへも行くべからず、我が親の家に行くことも稀れにすべし、常に家の中に居て濫りに外へ出づべからずなどといふ教を守らぬ如き女子は悪性のものなり、女子女道に外れたるものと爲して世人の爲めに忌み嫌はるゝ所となれり。總て支那風の教を今日まで誰ありて疑ふ者なく萬代不易の道として我が邦人の遵奉せしは其の武家の世に甚だ適したるものなりければなり、子甚だ其の妻を宜みすとも父母悦ばざれば出せといふ如き、婦に子なくば去れといふ如き教は文明人に聞かせむには實に驚愕に堪へざる所なるべしと雖も、家長主義を旨とする武家の世に在ては人の妻たる者の位置は到底斯の如きものたることは免かれ能はざる所ならむ。妻を娶るも親と同居して居らねばならぬこと我が邦武家の世の如き習慣で

女大學の主義

支那流の封建的時代には適したるものなり

支那流の封建的時代には適したるものなり

は、父母の悦ばざる妻ならば如何ほど子の宜みす者と雖も、之と添ひ遂げむとする時は家内に言ふべからざる風波を生じ、非常の困難を惹き起すべければ、添ひ遂げむことは到底むづかじきことなれば、父母の悦ばざる妻は出せといふ如き教は家長主義の社會には甚だ適したるものなり。時勢をよく穿ちたる教といふべし。祖廟のマツリを以て何より大切のことと爲し、血統をのこして家を繼がせ、非命を遂ぐるものは復讐者を要すること我が邦武家の世の如き時勢に在ては子なきの妻は時勢に適せず甚だ忌むべきものなれば、彼の子なきは去れの教の如きは是れ亦當時の時勢に甚だ適したるものにして我が邦人の遵奉せしも素より怪しむに足らざるなり。

夫れ武家社會に男尊女卑の行はれし事、男女交際の疎遠なりし事、并に當時支那流の教の行はれたる理由は則ち前段に於て説明せる如くなるが、次には自今以後我が邦の形勢たる男尊女卑の風の行はるべき者なるか、將た女性愛敬の風の行はるべき者なるか、男女の交際は依然疎遠ならむとする如き者なるか、將た親密にならむとする如き者なるか、孔子流の道德に適したる者ならむか、或は適せざる者ならんか、是等の諸點を研究すべきなり。男尊女卑の風たり、男女交際疎遠の慣習たり、窮屈

偏頗なる支那流の道德主義たり之を忌み嫌ふは余も世間の論者輩と同様なれ其之を忌み嫌ひ之を排斥せむと欲すると其果して時勢に不適當なる者となりてよく排斥し得べきと否やは固より別なる問題なり若し今の時勢にして之と相容れざる者ならむには之を排斥せむとするも素より可なりと雖も若し昔日の如く之と和合するものならむには只管に之を攻撃し只管に之を排斥せむとするも特に其甲斐なからむのみならず却つて社會を害することなせざれば宜しく先づ舊來の陋習は果して時勢に適せぬものとなりたるか支那風の道德主義は彌排斥し得べきや否やを探究せずんばあるべからず蓋し此の穿鑿を爲すに當り第一に考ふべきは學術の進歩如何にあらず國權の伸張如何にもあらずして今日の社會は昔日の社會の如く軍務主義の盛んなるものなるか將た産業主義の大いに増長せるものなるや否やの問題なり而して維新以來我が邦變遷の模様を観察するに今日我が邦軍事の隆盛なるは素より昔日の比にあらずと雖も大體上より論ずる時は軍務主義は却つて縮小して産業主義の大いに發達せるものといふべし封建制度を廢し世祿に代るに金祿公債證書を以てし士族の名稱は有れども士族たるの實なく昔日の如くに特に士族なるの故を以て軍人なるにあらず總領家督の

將來の親  
は愛情を  
旨とし威  
權を旨と  
すべから  
ざるなり

制は世祿の制と共に破壊せられ家長主義も隨つて崩れ士族平民の別なく華族と官吏とにあらざるよりは世人大概皆なそれぞれの産業に従事せざるなきは則ち今日の有様なり既に世祿を廢し家長主義を破りたる上は親が子を壓制することも到底昔日の如くなる能はず既に生殺の權なく又與奪すべき財産も無き親の如きに至つては所詮昔日の家長の如く壓制擅斷我意を恣まゝにし親に氣に入らざればとて子の宜しとする嫁を自由に追出す事も出來ざるべく既に世祿の無き上は家といふ事も昔日の如くに大切なる事にはあらず既に全國に威權の行はれざること無き大政府のある以上は復讐人の要も素よりあらざれば子なき故を以て妻を去るにも及ばず既に徵兵の制ありて軍人は別に備はり一般士族は名のみ士族で其の實は平民同様最早軍人にあらず却つて産業に従事し頑固心を脱してよく世人と交はるべきものなれば封建サムライの如く無骨を旨とし女性に遠ざかるにも及ばず平民同様女性とうちとけたる交はりを爲し夫婦相助けて事業に従事するが却つて利益なれば今より次第に男女の交際も親密になり男尊女卑の風は次第に改まりて女性崇敬の風の起らむことは萬々疑ふべからざることにして七年男女不同席だの女子十年不出だのといふことは到底行はれざる所ならむ

支那流の  
道徳主義の  
日本に於ては  
不適當なる

此に由て之を觀るに從來我が邦人が無比の教として遵奉せる支那流の道徳主義は父母の壓制を要し、男尊女卑の風を要し、男女交際の疎遠を要する家長主義を旨とせる武家の世に在ては其功少なからざりしと雖も、將に文明の域に入らむとする今日に在ては支那流の道徳主義は甚だ不適當なるものなれば、到底行はるべからざるものとならむことは自然の理なりと雖も、苟くも社會改良に志ある者は務めて之を攻撃して速かに之を排除せしむばあるべからざる理由なきにあらざるなり。

道徳主義  
に變更す  
るもの  
然らざる  
もの  
ある事

凡そ人の行ひには天地萬物に普通なるものと、生物にのみ普通なるものと、動物にのみ普通なるものと、人類にのみ普通なるものと、一國若しくは一時代にのみ固有なるものとの別ありて、其の中最も變更ありがちなは一國一時代に固有なる行ひにして、最も變更なきものは萬物に普通なるものなり。而して道徳主義の如きは則ち此の種々の行ひに關係するものなれば、人の行ひに變更すべきものと然らざるものとのある如く、道徳主義にも亦變更すべきものと萬世一定のものとのあり。されば智識は變遷あれども道徳主義に至りては古今一定萬古不易、進歩も無ければ變遷も無しなどといふは大いなる謬りなり。然れども社會學の原理に暗く道徳主義

支那流の  
道徳主義の  
排斥す  
べきの  
理由

の由て來る所を知らざるヤカラに在りては、何の種類を問はず一國一時代に行はるゝ道徳主義を以て總て萬世不易なるものと心得既に時勢のウツリカハリの爲めに大いに變革すべきものと雖も之を遵奉すること依然、苟くも其の既に世に適せぬことを示さむとする如きものを見れば天道を知らざる者なり、聖賢の教に背く者なり、人倫を紊り禽獸に爲すの罪人なりとじて、狂亂之を固守せむとするなり。而して何時も時勢に後るゝ者が多數なれば、此の輩の勢力は何時も甚だ強きが習ひなれば、此の輩の世の進歩を妨ぐることは決して少なきことにあらざるなり。方今我が邦に於てもかゝるヤカラは決して少なじとせず、則ち此の輩は封建制度の廢せられたるにも拘はらず、家長主義の破れたるにも拘はらず、聖賢の教に「無子去」とあり、「七年男女不同席」とあり、「女子十年不出」とあり、「女及日乎閨門之内」とあり、「婦人伏於人也」とあり、「父母不悅出」とあり、「子婦無私貨」とあり、「男子居外、女子居内」とあり、「男不言内、女不言外」とあるからは形以下のごとは西洋流義を採用するも宜しからむが、道徳上の事に至りては西洋流は決して採るべからず、男女別なきは禽獸の道なり、女子外を言ふは先王家を正すの法を紊るものなり、女性崇敬、夫妻相伴などごは言語同斷のごとなりと、先王の法聖賢の教を前におし出し、後ろにひかへて必死ご

なりて防禦せむとす。然り而して先王の法聖賢の教は數百年來我が邦人の遵奉せし所なれば、其の名の爲めに瞞着せられて見易き理も見えず、曉り得べき理も曉ることを得ずして、徒らに社會改良の妨害を爲すこと少なからず、是れ支那流の道德主義を排斥すべきの理由なり。

道德主義を説くに  
は宗教をよ  
かりがらん  
よからん

さて支那流の道德主義の排斥すべきは上に述べたるが如くなるが、之を排斥すべきと同様に西洋流の道德は之を採用せずむばあらざるなり。而して天下の人多くはかくかくの行ひは理に適ひたるものなり、善良なるものなりとたゞ言ひ聞かするよりは、先王の法なりとか、お釋迦様の教なりとか言ひ聞かす方がはるかにキ、メ多きが故に、西洋流の道德主義を普く弘めむ爲めには、かくのことは理に適ひたることなり、開明社會に適したることなりとて唯説かむよりは、寧ろ孔子様にもお釋迦様にも勝るも劣らぬイエスキリストの教なりとて教へ聞かす方がよからむ。殊に一方には釋迦や孔子といふ歴々が居てシリオンをする所へ、たゞ理屈を説いても信する者は少なからむ。到底釋迦や孔子や、日蓮や、水天宮や、金刀比羅を信する如き人民を相手に爲さんとする時は、たゞ理屈ではかなふまじ。矢張り耶蘇とかマホメットとか云ふ本尊様を昇ぎ出すより外に手段は有らざるならむ。さ

孔子の教  
と耶蘇の教  
との異

風俗と宗  
教とは密  
着の關係  
あり

れば孔子の教にては、不順父母去、無子去、有惡疾去、多言去と種々雜多な理由の爲めに婦を去る事を許してあれども、其の様に婦を去るは開化人の夫婦の道にはあらずとたゞ言ひ聞かするよりも、元始に人をつくりたまひしものは之を男女につくれり。此の故に人父母を離れて妻に合ひ二人の者一體となりと言へるを未だ讀まざるか。さればハヤ二つにはあらず一體なり。神のあはせたまへるものは人之を離すべからずとては、これはこれイエスキリストの教なり、即ちマコトの夫婦の道なりと言ひ聞かす方が大いにキ、メあらむ。又支那聖賢の教によれば、夫死不嫁と言へども、これは天理に悖りたる教なりとたゞ言はむよりは、夫生る間は妻法に繋がるふなりされど、夫若し死なば隨意に嫁することを許さる。これはこれイエスキリストの教なりと説かむには信する者も却つて多く有ることならむ。

孔孟の教をして封建制度を助けしめたる如く、耶蘇教をして今日の社會改良を助けしむるは決して失策にあらざるならむ。夫れ風俗と宗教とは密着の關係あるものなり。支那日本の風俗に孔孟の教が密着の關係あるものならば、耶蘇教の如きも亦之と同じく西洋の人情風俗と實に密着の關係あるものなり。西洋の人情風俗を慕ひ之を我が邦に輸入なさむことを願ひながら、西洋人の宗旨を拒絶せむとする

將來の日本に於ては、孔子の教を主とする者、孟子の教を主とする者、老子の教を主とする者、諸宗に分れる。今この耶穌教を主張する者は、大體二派に分れる。

耶穌教と西洋音樂との關係

如きはヒトリ愚の至りのみならず到底得べからざることもならむ。往時孔孟宗旨の我が邦に行はれたるは其の當時の時勢に適したる故なるが、將來我が邦の大勢に適するものは孔孟宗旨にあらずして却つて西洋宗旨なるが如し。而して今の耶穌教を主張する者は通例二派に分るゝが如し。即ち一は尋常信徒の如く凡そ宗旨と云へば、耶穌教のみに限る如く思ひ、他の宗旨は皆イツハリのものにして、耶穌教ひとり眞なりと主張するヤカラにして、又一は耶穌教其のものは他宗と別に違ひたる所は無けれども、西洋人と毛色を同じうせねば交際上大損なれば其の爲めに耶穌教になるべしといふものなり。二者の考へは素より各尤もなる所もあれども、耶穌教を主張するの理由は尙ほ此の外にもありと思はるゝなり。其の理由は第一音樂進歩の爲め、第二同情發達同心協力の爲め、第三男女交際の爲め等なり。蓋し耶穌教の西洋社會に直接の影響ありしことは莫大にして、素より測るべからざる所ならむが、耶穌教が上の如き諸點に於て間接に西洋社會に著しき影響を及ぼしたることも亦疑ふべからざる所なり。

第一 音樂史に徴するに西洋の音樂は教堂中に生れ、教堂中に育てられたる者といふべし。西洋音樂の濫觴を原ぬるに其起りは神樂カミガキにありて、中古に至り舞能即ちオペラ興れる前にありては、作樂者の技倆を顯はせるは皆な教堂に於てし、其の願ふ所は最も美麗なる音樂を以て教堂を飾らむことにてありき。オペラ興りし後と雖も神樂カミガキを作らざりし作樂者は幾んど稀なり。されば神樂カミガキ者の中には西洋作樂者の最も名人と言はるゝ仲間ウヂマに位する者素より少なからず、バック、ハンデルの如きは則ち斯の如き者なり。而してヘードン、メンデルソーンの如きはバック、ハンデル等の作の爲めに妙趣を覺れりといふ。實に西洋音樂は耶穌教の賜ものなりといふも過言にはあらざるならん。然り而して耶穌教の音樂を裨益せしはひとり之に其の發達の舞臺を假しバック、ハンデル、ヘードン、メンデルソーンの如き名人を出現せしめしのみならず、信徒をして常に音樂を聴かしむる上に、且各自をして自から唱歌せしむるの慣習によつて、廣く天下に音樂の嗜好を養成するの媒となりたり。音樂は人の心を優美に爲し、高尚なる情を起し、且聽衆の心と心との間に同情を催すの力あるものなれば、耶穌教人の如く教堂に於て常に音樂を聴き且自から唱歌するの慣習の社會進歩に裨益ありたることは決して少なからざるならむ。されば廣く日本人中に音樂の嗜好を養成なさむ爲め、音樂を進歩せしめむ爲め、并に音樂の徳によつて人の心を高尚優美に爲さむ爲めには、耶穌教こそ極めて便利なるも

のならむが、殊に我が邦從來の下等なる音樂を廢して、西洋の優美なる音樂を採用せむ爲めには、教堂に於て常に洋樂を聴き、洋樂を誦ふことより慣らし込む如きは最も輕便にして最も自然の法なりと思はるるなり。

第二 人類は群集動物なるが故に和合群集して苦樂を俱にするは快樂を増すにも苦痛を減少するにも効能あるものなり。之に反して單身獨居する者は苦痛を慰むる者も無く、快樂を賛成する者もなければ、苦痛は多く快樂は少なし。されば群集するときは優美なる情の發達に便にして人類をして互に相愛慕するの念を愈、固からしむると雖も、單身獨居するときは鄙劣偏屈なる情を増長せしめて、世を怨み人を嫌ふの念は益、強くならむ。蓋し人類には群集和合同心協力することほど大切なるものはあらざるならむ。野蠻人の開明人と異なるの點は枚擧に遑あらずと雖も、其の最も著明なる者の一は野蠻人には孤立の性多く開明人には群集の性多きこと是れならむ。これ野蠻人の進歩に大いなる妨げを爲すものなり。故に何に限らず人をして群集せしむるの効驗あるものは社會の進歩に裨益あるものといふべし。彼の人生財産を毀損し慘狀見るに忍びざるの觀を呈出すること戦争其のもの如く甚だしきものと雖も野蠻人を群集和合同心協力せしむるの効驗あるもの

耶穌教の  
同心協力  
の風との  
關係

ならば社會進歩人類發達の爲めに大いに裨益ありたるものといふべし。我が邦人の西洋人に接すること愈、繁く、西洋の事情を知ること愈、委しくなるに従ひ、常に慨歎に堪えざる所はひとり兵備の劣る故にあらず、學術進歩の及ばざる故にあらず、和合一致同心協力するの性に乏しきこと亦是れなり。歐米人に此の性の多きは素より一朝一夕の故には有らざるべしと雖も、一年三百六十五日毎週一回必ず教堂に會して、同じ神を拜み、同じ祈りを聴き、同じ經文を讀み、同じ音樂説教を聴き、念を通じ情を同ふし、憂ひのことあれば共に憂ひ、喜びのことあれば共に喜ぶの風によること少なからざるならむ。艱難に遇ひ損害を被ふるの同胞あらむには等しく之を憐れみ、共に融金して其の難儀を救ひ、國家の柱石民の父母とも稱へらるる人の死去に際しては、國民俱に教堂に集まりて喪を表し其の死を哀しみ、若し斯の如き名望人にして狂人の刃にかゝり非業の死を遂ぐるなどいふことも有らむには、共に其の死を惜しみ共に其の功を稱へ老輩をしては神の命の不思議なることを愈、曉らしめ、壯者をしては益、愛國心を固からしめ、戦争に勝てば共に天帝に禮を述べて愈、勇み、戦争に負ければ共に祈禱を爲して心を勵まし、教育のことも慈善のことも教堂に集まりて共に之をはかる者は是れ歐米各國耶穌教人の風なり。耶穌教堂は

則ち歐米人をしてよく同心協力することを學ばしめたるの學校なり。政治のことにも商業のことにも歐米人がよく結合一致して事を爲すを知るは毎週一回教堂に集會する昔日よりの慣習によること多きに居るといふも過言にはあらざるならむ。實に歐米のことにして直接に宗教上の親和によりしもの少なじとせず。其中にて最も著明なる一例を挙げば、彼の亞米利加の合衆國の首とも頭ともいふべきニューイングランドの最初の住民ピュリタン宗人の如きは、本國英吉利に宗旨の自由なき爲めに父母の國を去りて新國に移り、信ずる所の宗旨を思ふまゝに奉せむと欲して萬里の波濤を超えて來れるものなり。而してピュリタン人をして百折不撓始終よく困難に打ち勝ちて、遂に今日の如く盛大富強なる國を興すに至らしめたるは、其の勇氣と其の神を信ずる心の深きとに専ら因ることは素より疑ひ無しと雖も、若し之をして結合力に乏しき者ならしめたらむには、怒濤に勝ちて萬里を超え、野人に勝ちて大陸を占め、壓制に勝ちてよく自由を得ることは決して出來ざりし所ならむ。兵器軍艦備はると雖も、結合力に乏しき時は戦争は決して出來まじ。商業工事の別なく、其の盛衰を結合力と共にせざる者は有らざるなり。蓋し蟲の最も高等なる者蟻たり、蜂たり、共に結合力に富む者なり。動物中最も高等なる

耶蘇教と  
男女同伴  
の風との  
關係

者は人類なり。動物中最も結合することを知る者なり。人の最も高等なる者は歐米人なり。蓋し人類中最も結合することを知る者なり。國の隆盛をはからむと欲せば宜しく結合心を養成するの法を求めざるべからず。結合心を養成するに裨益あること彼の耶蘇教の如きもの豈之を輕忽に看過すべしや。

第三 男女相伴は軍務社會に行はれずして産業社會に行はるゝものなることは既に前陳せる如くなるが故に、其の行はるゝと否とは到底社會の性質如何によることなるべしと雖も、之に宗旨の勢力を假さむには行はるべきときは益々行はれ、行はるべからざるときは少しも行はれざる様になるものなり。支那孔孟の教が我が邦に入り來り時勢を助けて男尊女卑の風を愈々強盛ならしめ、男女相伴などいふことは士族社會よりは全く跡を絶つに至らしめたることは前に陳べたる如くなるが、耶蘇教が西洋社會の事情を助けて女性崇敬男女相伴の風を盛んならしめしは、孔孟の教の我が邦に於けると幾んど同一なりと思はるゝなり。耶蘇の教は孔孟の教と異なりて大いに女子の地位を高くせるものたることは前に示せし如くなるが、耶蘇教にて男女共に毎週一回教堂に集會するの法の如きは男女交際の最もよき媒となり、男女相伴の風を養成せしものといふべし。耶蘇教會堂の如きは男



女をして互に能く相馴れしめ淫奔に流れずしてよくハニカマザルの風を興したるものといふべし。毎週一回男女必ず教堂に集まり、同じ神を拜み同じ情を覺ゆるが如きは男女を同等のものと爲す傾向あるものにあらずや。共に慈善の事に與かり共に教育の事に従事するが如きは共に男女の交際を親密ならしむるものにあらずや。近頃我が邦の有志者中には我が邦男女交際の疎遠なるを慨歎し、此の風を破らむとして或ひは舞踏を主張するものあり或ひは國會即ちガーデンパーティーを主張する者もあり。兩者の考案は共に殊勝なるものには違ひ無しと雖も、余輩の考へによれば之を矯正するに最も勢力ある方便は尙ほ此の外にありと思はる。夫れ舞踏たり宴會たり善は即ち善なれども、これ等は素より一般社會に及ぼし得べきの方法にあらずれば、一般社會の改良を圖り一般社會の風俗を矯正せむと欲すれば廣く一般社會に及ぼし得べきの方法を求めざるべからず而して余の考へには其方法決して之なきにあらず。即ち耶穌教を擴張し晴雨を問はず毎週一回男女相伴して教堂に到るの風を興し、男女をして毎週一回は必ず親しく相接することを爲し、慈善の事にも救恤の事にも共に與かり常に相親しみ常に相往來する様に爲すこそ最上の方便ならぬ。今の社會改良を唱ふるものは宜しく此に注目せず

宗教の事  
決して輕  
忽して看  
過すべから  
ず

むばあらざるなり。

夫れ宗教の事は社會改良に關しては最も大切な問題にして決して輕忽に看過すべきものにあらず。從來我が邦に行はるゝ宗旨にして將來我が邦社會の有様に適したるものならむには素より宜しと雖も、其の果して然るや否やに至りては大いに疑ひ無きにあらず。東西宗教の優劣を決せむことは素より容易に出來べきことにはあらざるが、茲に二事實の明白なる者あり。即ち一は佛教は宗教としては我が邦上等社會の間には勢力少なきこと、また一は我が邦上等社會の間に勢力を選しくしたる孔孟の教は將來我が邦の事情に適せぬものなること是れなり。世には我が邦上等社會には宗旨は決していらす、ひとりいらざるのみならず、現に今日まで宗旨はクスリにしたくも有らざりしなど言ひ張る者もあれども、其はたゞ宗旨の名に拘泥したる論にて實情を探りたるものにあらざるなり。いかさま封建主義ムライは佛教とか回々教とか名の附きたる宗旨を信仰したる者にはあらざりしと雖も、封建宗旨といふ一種の立派なる宗旨を信仰せしことは蔽ふべからざるの事實なり。封建宗旨とは如何なるものぞ、其の本尊は祖廟にして人の最も大切な義務は君父の讐を報するにあり而してかの孔孟の教に屬する忠孝の主義、男尊女

封建宗旨

卑の主義の如きは皆な此の封建宗旨の主義となりて、武士の深く信仰せし所なり。而して此の宗旨の爲めに淘汰せられたるものには男女共に中々立派なるものありき。細川忠興の奥方の如き武林唯七の母の如きは此の宗旨を最もよく守りたる者にして、此の宗旨の爲に最も名譽となり、此の宗旨の最も誇り得べきものなり。然れどもかゝる人物を作り出すことは今日の要用にあらざれば、かゝる人物を作り出すに適したる宗旨の如きは、將に破れむとするの時勢なり。然らば如何すべきか、佛法は上等社會の間に勢力なく、而して封建宗旨にして破れたらむには、我が邦上等社會の人は無宗旨の民たらむか、世界廣しと雖も無宗旨の民は未だ有らざるなり。たゞ其の宗旨の精粗に異動あるのみ、且や封建宗旨を信仰せし者の中多くは其の本然の宗旨外なる狐狸妖怪の類を信せしことなれば、封建宗旨が破れ道徳主義は排斥せらるゝも、狐狸妖怪の類若くは木石などを神として見上げ之を拜み之に祈願を懸るなどいふことは依然遺るべければ、道徳上の主義は無くなりてたゞ認信のみ存する如き事情ならむ。其れにてすておかむには、少なくとも數十年の間は道徳上の有様は頗る紛亂を極め國の進歩は爲めに妨害せらるゝならむ。今日封建宗旨を排斥するヤカラの間には既に幾分か斯の如き道徳上の無主義を生じ、磁石

日本人果して無宗旨の民たるべきか

なき船に乗りて大洋のオモテをユクへいづくも白浪にフラ／＼たゞよふ如きもの決して無きにあらざるなり。確乎たる道徳主義なしにたゞ水天宮や、金比羅や、狐狸木石を信仰して之を拜みたつるが如きは決して感服すべき風俗にあらず、決して良き風俗なりとして誇り得べきものにあらず、到底かゝることも信仰せねば満足せぬ如き心ならば、確乎たる道徳主義の具はり居りて風俗矯正に裨益ある如き宗教を採用して社會改良を助けしむるには若かざるならむ。殊に將來の社會は男女の交際大いに親密になるべきものとせむか、之をして肉交に流れしめず善く樂んで淫せざるものたらしめむと欲せば古の人に告げて「姦淫すること勿れ」と言へることあるは汝等が聞きし所なり。されど我れ汝等に告げむ凡そ婦を見て色情を起す者は中心既に姦淫したるなり。凡そ人の妻を出さんこそせば之に離縁狀を興ふべしと。されど我れ汝等に告げむ、姦淫の故ならで其の妻を出す者は之に姦淫なさしむるなり。又出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふ者なり。などいふ立派なる主義ある宗教を信仰するは豈必要の事にあらずや。社會改良を圖る者は舞踏だの園會だのと區々たる方便のみを用ふべきにあらず。西洋風俗に戀々して之に倣はむことを欲しながら、之に最も親密の關係ある宗教を採用することを務めざるの有

志輩は見識なき者か將た勇氣なき者か。二者其の一たるの譏りを免かるゝ能はざるなり。(公刊)

## 女子の教育を論じ併せて耶蘇 教擴張の法を説く

(明治十九年六月)

人の賢愚を知らんと欲する者は、何よりも先づ其の母の賢愚を問ふべし。國の開化を進めむと欲する者は、宜しく先づ其の國の婦人を改良することを務めざるべからず。今日我が邦に於て人の注意を要することは、擧げて數ふべからず。雖も蓋し婦人の教育ほど之を要する者は、他には有らざるならむ。我邦將來の命脈は我が邦將來の婦人の強弱賢愚に繋るものと言はざるを得ず。強健にして英敏なる母の胎内にやどり、強健にして英敏なる母の手に育ちたる者にあらすむば、稍々生長したる後に如何程善良なる教育を授くればとて、決して善き人物にはなり能はざるならむ。我が邦にても追々教育の大切なるを曉り、政府にて大學、中學等を立てらるれば、民間に於ても何協會、何専門學校と唱へて種々の高等學校を立つる様に成りたるは、喜ばしきことの限りながら、其の中に憂ふべきは、此等高等學校は概ね皆な男子の爲めに立てられたるものにして、女子の爲めに立てられたるものは、僅に一二

女子の教育を論じ併せて耶蘇教擴張の法を説く

の微々たるもの有るのみに止ること。是れなり。男子の高等教育が必要ならば、女子にも高等教育は必要なり。今日は斯の如く女子の教育を投げ遣りになし置く時勢なるが故に、女子の高等教育は如何なるものたるべきかと云ふ問題に關して、世人の懐ける考への如きも至つて漠然極まるものなり。然れども女子の高等教育の必要なることを説くものは、其の何様のものたるべきか豫じめ定まりたるものを懐かざるべからず。余輩不肖なれども聊か其の考なきにあらず。特に其の考へ有るのみならず、其の教育を我が邦の女子に授くるの方法に關しても、亦其の説なきにあらず。讀者諸君靜かに余輩の説く所を聽かれよ。

教育は素より當時の時勢に適したるものたらざるべからず。武家の世の教育は武家の世に相應じ、文明の世の教育は文明の世に相應したるものたらざるべからず。女子に薙刀の使ひやうを習はしたり、自害の仕様を教へたり、家に在りては親に従ひ、嫁しては夫に従ひ、老ては子に従ふべきものなりなど、氣の毒千萬なる覺悟を爲さしむる教育の如きも、封建時代の婦人には素より適當したる教育にてありしならむ。いつ敵から攻めらるゝかも知れず。何時君辱められて臣死せねばならぬかも知れぬ如き時代に在りては、女子と雖も薙刀の使ひ様位は之れを知らねばな

らす。潔く最愛の子の喉元を懷劍にてつらぬき、其の身も共に及に伏すなど云ふ覺悟を爲さしめ置くも、素より必要なることにてあらむ。さりながら文明の世には薙刀三味や、懷劍騒ぎの教育は毛頭入らざることなれば、かゝることをば文明の御代の女子に教ゆるは素より無用のことにぞある。されば日本帝國も封建制度が廢せられ、目出たく海内一統して天下泰平の御代となり、文明かせに化せられて一から十まで舊來の野蠻の風を脱却し、開化の風に改まる勢ひなれば、教育の如きも二十年以來其の面目を更ためたることに實に著しきことにして、女子の教育の如きも亦大いに改良したりと言はざるべからず。さりながら他の事物と共に女子の教育も改良するにはしたれども、其の改良の度は余輩に決して満足を興ふる能はざるなり。讀み書きを習はしたり、理化學を學ばすることのみを以て教育なりと思ふは大いなる誤りなり。蓋し人の教育の多分にして且つ最も大切なものは、教場にて授業時間中に得るものよりは却つて其の授業外に得る所のものならむ。教授の授業外の教育とは如何なるものか。生るゝと直ぐ父母或は乳母より受くる教育、稍々成長しては子供仲間より得る教育、學校に往ては學友より得るの教育、教師の品行、動作を見て得る所の教育、社會に出でゝ事を執るに當つては、種々の人物に接し、種々

の事物に觸れ種々の經驗によつて得る教育等則ち是れなり。此の種の教育は學校教育を受くる者も之を受けざる者も共に受けざるべからざるものなり。如何ほど善良なる學校教育を受くるも、此等の教育が善からぬものならむには折角受けたる學校教育も水の泡に屬すること尠しとせず。

何人を論せず某社會に生れ其の社會中に成長したるものは、よしや學校教育とては左のみ受けしこと無き者と雖も、よく其の社會上の地位を保ち居ることを得るは何によるか。全く學校外に受けたる教育の徳によるなり。開化國の人は學校教育とては左のみ受けしこと無き者と雖も、開化人の資格を存し、亞米利加インヂアンの如きは、之れを開化國の大學校に入れて高等教育を授くるも、到底野蠻人の資格を脱する能はざるものは、蓋し遺傳の性質の爲めによること少なからざるには違ひなしと雖も、學校教育の影響僅にして、幼年の時よりインヂアン社會中に於て自然に受け得たる教育の勢力の強きによることも亦少なからざるならむ。インヂアンは到底インヂアンたることは免かれ難きことながら、之をして最も多く他のインヂアンと違はしめ、開化人に最も近からしめむと欲せば、幼少の中より之を開化人中に生ひ立たしめ、常に開化人の人情風俗に染まらしむるより外に手段はあら

ざるならむ。今の日本人の中にて最も西洋風に化し、最も開化人の資格を具へたる者は、必しも専門學科に熟達したる者にはあらず、専門學科は何も學び得たるもの無きも、幼年の時より開化國に渡り終始開明の空氣を吸ひ、開化人の人情風俗に化せられながら成人したるものにぞある。専門學科は誰よりも多く學び得たる者と雖も、開化國に留まりしこと僅に二三年に過ぎざりしのみならず、其の二三年の間も開化人との交際などには、少しも意を用ひしこと無く、只々一心に専門學科に従事せし者の如きは、其の専門學科は萬々結構なるも、其の人柄たり思想たり、多くは純然たる日本人に過ぎざるならむ。然れども海外に留學する者は、イヤでもオウでも多少開化人と交際をせねばならざるが故に、如何なる頑固者と雖も、幾分か開化人になりて歸り來らざるは稀なり。假令僅の間と雖も開明國に留學し開明人と交はりたる者は、開化人の資格を具ふること、曾て開化人に接したること無き者に比ぶれば幾分か優らざるものは稀ならむ。然り而して國をして眞に開明の地位を得せしめむ爲めには、各種の専門學に長じたる者の國に多く出來むことは、素より缺くべからざることなれども、また同様缺くべからざるは開化人と人情を同うし、開化人と思想を同うする如き者の多く國に出來むこと是れなり。學校教育が盛んに

なりたればとて、専門家が多くなりたればとて、其れにて一概に國が開けた文明になつたなどと誇る譯には決してゆかざるなり。不充分ながらも我が邦が今日の如く、開化諸國人と交はりの眞似ごとでも出来る様になりたるは、全く幾分か西洋の事情に通じ西洋人の思想を以て、事物を考へ得ることの出来る如きものが政府にも民間にも追々多くなりたるが爲めなり。即ち西洋人の喜ぶ所を喜び、西洋人の哀む所を哀み、西洋人の怒る所を怒り、西洋人の耻る所を耻る如きものゝ幾分か、我が邦に出来たるが爲めなり。而してかゝるヤカラが政府にも民間にも幾分か出来たるは、維新以來年々歳々數多の日本人が、或は留學と號し、或は視察と唱へ、或は大使のお供と出かけ、或は公使館の書記生となり、或は博覽會の出張員となり、或は取調べ、或は研究と種々雑多な名を付けて、開化國に渡り開化人と交はり開化の空氣を吸ひ、開化の人情に化せられて歸り來れる者の日に月に絶間なきが爲めなり。國の進歩の爲めには上等社會の者の洋行は實に必要のことなり。洋行するにあらずむば眞に西洋風儀に化せられむことは甚だ難し。然れども洋行の必要なるは、特り男子のみに限らず、女子も亦同じ。特り男子が開明の風儀に化するのみならず、女子も亦之れと同様に開明の風儀に化するにあらずむば、其の邦は決して開明の域に達

すること能はざるなり。然るに今の有様にては男子には開化人の風に化せらるゝ者日に多きを加ふれども、女子に至りては西洋風儀に化せらるゝ者實に僅々にすぎず。これ一は男子の學校教育に比ぶれば女子の學校教育は大いに忽がせにせられたると、又一は女子には開化國へ渡り久しく開化人に接して開化風に染る如き者至つて少なきが故なり。然るに學校教育を改良するは易きことなれども、婦人をして男子の如く多く洋行せしめむことは到底出来がたきことなるべし。さりながら我が邦の婦人をして親しく開化人に接せしむるにあらずむば、到底我が邦の進歩は充分なること能はざるならむ。されば婦人を少なくとも男子に負けざる開化人と爲さむと欲せば、一方に於ては女子の高等教育を改良し、且つ盛んになすことを務め、又一方に於ては我が邦の婦人をして親しく開化人に接することを得せしむるの方法を考へざるべからざるなり。

世間には女子の教育と云へば、讀み書き、算術、理化、博物、唱歌、舞蹈、裁縫、圖書等の學科を授くるに止まる如く思ふ者往々有り。雖も斯の如き學科のみにては女子の教育は極めて不完全ならむ。女子の教育にして家事經濟と家内衛生の二科を缺きたるものは、決して完全なる教育とは云ふべからざるなり。この二科は何れの國の婦

人にも缺くべからざるものなれども、殊に我が邦今日の婦人に於て然りとす。而して余の所謂家事經濟たり、家内衛生たり、西洋主義の家事經濟、家内衛生の事にして日本主義の家事經濟、家内衛生の謂にはあらざるなり。我が邦の婦人が西洋流の家事經濟と、家内衛生とに通せむことは今日に於て最も必要なり。今日我が邦の男子には西洋風のくらし方を慕ひ居る者漸く多しと雖も、斷然之れに變へる者の少なきは多くは婦人が西洋風のくらし方を知らざるによる。例へば日本流の食事を廢して西洋風の食事に改めむには、高き給料の料理人を雇ひ何もかも之れに任せ置かねばならず。又子供に洋服を着せむと欲せば、かむり物から足袋に至るまで之れを總べて商賣人の手に任せ置かねばならぬと云ふ如き事情では、我が邦の如き貧乏國に西洋風の衣食を廣く行はしめむ爲めには、牛肉を買つても骨は何の役に立ち、アブラミは何の用になると、少しもムダの無き様に爲すことを知り、親父の古洋服をきりつめて子供の股引チャケットを拵へること杯を心得居る婦人が多くならねばならぬなり。又家内衛生の如きに至ては婦人がよく之を心得居るにあらずむば、イクラ男が衛生學に明るきも、到底コレラの豫防も熱病の防ぎも充分に出來ず。何程男が西洋風の子供の仕立方に感服しても、女子が其の道に暗くしては

決して西洋風に子を育てることは出來ざるならむ。將來我が邦の男子は婦人にこの二科の必要なるを感ずること愈々多くなるならむ。婦人が此の二科を心得居るにあらずむば、西洋風のくらし方を爲さむこと到底出來がたきことならむ。さりながら家事經濟の如き、家内衛生の如きは親しく西洋の婦人に就きて之れを學ぶにあらずむば、決して學び得らるべき事柄にあらず。されば此の事に關しても我が邦の婦人が西洋の婦人に親しく接するの必要なるは明かなり。

さりながら將來我が邦の婦人の殊に必要な資格は尙ほこの外にあり。之れを舉れば即ち將來の婦人は、成るだけ男と同感の出來る如きものたらざるべからず。婦人と雖も人には人たる者の義務あることを知る如き者たらざるべからず。セルフレスペクトの心を存じ徒らに人前のみを飾るが如きものたるべからず。男子と同等のツキアヒが出來、社會に出でよく交際をなすべく事を爲す如きものたらざるべからず。久しく西洋に留學して西洋の風俗に化し西洋人の感ずる如く感じ、西洋風の考へを持つたる男子の妻たらむものは、等しく西洋人の感ずる如く感じ、西洋風の考へを持つものたらざるべからず。男同士でも久しく西洋人と交りてよく西洋風に化したる者と、全く日本風に育ちたる者と、學問に於ては優劣少しも無

きも、兎角何やかにかにつけ口の合はざることは皆人のよく知る所なり。女子でも其の通り學校教育のヨシアシは兎もあれ、西洋人と親しくつきあひて西洋風の心になりたる女子にあらずむば將來の高等男子とは到底口は合はざるならむ。而して封建時代の如くに夫婦の關係は奴隸と主人との如きものなりと思ふこと無く、夫婦は全く同等一體のものなりとか、最も親じき相談相手たるべしとか思ふ如き者に取りては、口の合はざる者を妻とし娶らむことは素より好まざる所ならむ。將來我が邦の婦人は交際家の妻となつては夫を助けて共に交際に従事することも出來、學者の妻となつては夫の仕事をよく理解しよく感賞することが出來、慈善家の妻となつては共に慈善の事に與かり、男子が某々の會を設くれば女子も亦某々の會を設け、男の手を假らずして慈善の事を爲し救助の事に従事する如きものたらざるべからず。

然れども殊に將來の婦人に必要な改良は少しく、「ヴァニチー」の心を減じて、之れに代るに「セルフレスペクト」の心を以てせむこと是れなり。何れの邦を論せず女子と云ふものは兎角「ヴァニチー」の多き者なるが、我が邦の女子は子を愛する心の外は「ヴァニチー」心の爲めに最も多く支配さるゝものなり。而して其の「ヴァニチー」たる實に下等なる性質の者にして、上等なる者は甚だ少なし。我邦に於ては女子のみならず、男子にも「ヴァニチー」が多けれども、男子の「ヴァニチー」は功名手柄をなして、人から賞められむとする如き稍々高等なる者もあり。然るに女子に至りては其働きの範圍極めて狭く、廣く社會に對しては少しも關係なき者なるが故に、其「ヴァニチー」は僅に髪飾りの事や、衣服の事に關する者、若くは容色自慢等の如き極めて淺劣なる者多し。素より女子には廣く人を愛するの心だの、社會に對しての義務だの、人たる者の道だのと云ふ考は藥にしたくも無きが常なり。道とか義務とか云ふ考へは少しは有るには有りても、貞女兩夫に見えずとか、浮世の義理とかいふ位の事にして、これ等の道を履む者は自ら好んで之れを爲すに非ず、いや／＼ながらに詮方なしに無理往生の心中と同様に泣く／＼従ふ道にぞある。佛法の徳薄くして慈悲の心は我が邦の人には至つて少なき故、善事を爲して樂みと爲さむと思ふ如きものは、後生を願ふ婆々の外は稀に一人も有るか無し。概して言へば今日まで我が邦婦女子の生活は蛆虫同様の生活に少し毛の生へたるものに過ぎざるなり。かく淺ましき風俗を一洗なして、幾分か開化國の婦人の資格を得せしめむことは、今日極めて要のことなるが、又極めてむづかしきことなり。前にも言へる如くこの改良を遂



げむ爲めには、特り學校教育を頼むべからず。我が邦の婦人をして親しく西洋の婦人に接せしめて、其の風習に染まらしめむこと最も必要なり。さりて前に言へる如く婦人を多く洋行させむことは到底出来ざることなるが故に、余の考へにては女子の高等教育は之れは宣教師社會に託するの外別に上手段はあらざるならむ。宣教師の少なき所は如何ともすべからざれども、東京の如く各派の宣教師數多居るの土地に於ては、其の宣教師輩が互に一致和合せむには、五六の女學校を設立せむことは左のみ難きことにはあらざるならむ。五六の女學校が東京府内に出来むには、東京府中の高等教育は其の學校にて全く引き受けることを得む。四五人の宣教師と其の夫人と二三人の日本人とが一學校の教授に従事せむには、教授は其れで充分ならむ。教科は讀み書き、會話、裁縫、音樂等を専らとすべければ、専門學科の教師などは決して入らざるなり。若し理化學、博物學等の一斑を知らしむる事を必要とせば、専門學者を頼み一月に一回若しくは二回其の學問上の談話を爲して貰はむには、其れで全く充分ならむ。今では専門學者にも婦人の改良を熱心に希望する如きもの追々多くなりたれば、かゝる仕事を最も快く引き受け呉れる如き者決して乏しくはあらざるならむ。かゝる學校が出来て教師の婦人若しくは女宣教師が深

切に生徒を取り扱ひ、授業のアヒ間若しくは折々教師の宅へども招ぎて、懇ろにくらしの事や子供の育て方の事などを教へながら、開化人の品行風俗人情を聞き習はしめ、見習はしめむには、我が邦の婦人の有様を改良するに如何ばかりか益有るべし。されば宣教師輩に向つて余の切に望む所は各地宣教師輩が互に和合一致して、前の如き女學校を設けられて我邦の高等社會の女子教育を、宣教師社會にて全く引受けられむこと則ち是れなり。此の論を聞いて宣教師輩の中には成る程余輩が専ら日本婦人の教育に従事したならば、其の方の都合はよからむが、自分たちはもど教育が主意にて來れる者に非ず、耶蘇教を弘めるが趣意にて來れる者なり。杯と旨はんこせらるゝ如き者も定めて有るならむが、余輩の考へにてはかゝる説を爲す者は宣教師の道知らざる者と言はざるべからず。いかさまチヨット聞く時は宗旨を弘むる爲めに來れる者が、教育の事に専ら従事しては肝腎の趣意に背くことくに見ゆれども、眞に耶蘇教を弘めむと思はゞ、宣教師社會にて我が邦上等社會の婦人の教育を、一と握りに握つてしまふにこしたる手段はあらざるならむ。洗禮を受けて拙者は耶蘇宗で御座ると看板をかける者の數の如きは、イザ知らず、眞實最も耶蘇教に化せられたるものゝ數を増さむと思はゞ、諸方をかけまはりてキ、メ

の薄き説教を爲し居らむよりは、深切に教育を爲し乍ら耶蘇教人の品行に服さしめ、耶蘇教人の深切に感せしめて、教育の間、交際の間、次第々々に耶蘇教に歸依せしむるが萬々上策ならむ。耶蘇教を聞かするより寧ろ耶蘇教を見せしむべし。抑、何れの國を論せず其の宗旨を變へさせむと思はゞ先づ其の國の婦人を改宗せしむるに若くは無からむ。婦人を生捕るは男子を生捕るよりはるかに易ければ、男子を生捕ることを務めむよりは、寧ろ婦人を生捕ることを務めざるべからず。而して一たび婦人を生捕りたる上は男子を生捕ることは亦易きのみ。最初西洋人が耶蘇教に歸依するに至りしも婦人の力によりしこと實に少なからざりしなり。且や母親の信仰する所の宗旨は其の子の信仰する所たらざるは稀なり。一たび我が邦の婦人を耶蘇教に歸依せしめたらば、其子たる者は洗禮を受けしと受けざるに係らず、其の精神の如きは必ず耶蘇教の信仰者として成長せむこと決して疑ふべからざるなり。

人或は思はむ。我が邦の父兄には耶蘇教家の設けたる學校に其の女子をおくる事を好まざる者多からむ。殊に中等以上の者は大概皆な宗旨嫌ひなるが故に、中等以上の者の女にしてかゝる學校の生徒たらむ者は至つて少なからむと。この懸念たる一應は尤もの様に聞ゆれども、余輩の考にてはかゝる懸念には決して及ばざるならむ。余輩の考へにては我が邦中等以上の者が宗旨嫌ひなるは、かゝる學校の繁昌の爲めに不利なることにあらずして、却つて幸のことならむ。何となれば若し我が邦中等以上の人にして、土耳其人の如くに其宗旨に深く凝り固まりたるものならむには、其れこそ耶蘇教學校の繁昌なき望みは無かるべしと雖も、我が邦の中等以上の人は何宗にも凝り固まりたる人にあらずして、何宗をもをこなべて嫌ふ如きものなるが故に、土耳其人の如く既に固まりたる宗旨のあるものに比ぶれば、却つて始末が宜からむ。殊に我が邦人の宗旨を嫌ふは之を恐るゝ故に非ずして、寧ろ之を輕蔑するによるが故に、耶蘇教でも回々教でも之と關係を付けむには我に大なる實利益を得らるべしと信せむには、何宗でも御座れ之と忽ち睦じくせむとする如きものなればなり。而して今日世間の様子を見るに、耶蘇教を餌に使ひて我が邦に實利を得むと欲し、爲に耶蘇教に戀慕をば仕懸むとする如き者、政府にも民間にも漸く起らむとするが如し。これ耶蘇教の爲には實に失ふ可からざるの時なり。この時に乗ずることを知らざる耶蘇教人は、自ら助くることを知らずして、徒らに天の助けを受けむことを願ふ如き愚か物と言はざる可からず。

女子の教育を論じ併せて耶蘇教擴張の法を説く

蓋し婦人の教育に余の論するが如き改良を要することは、洋行歸りの男子が殖え西洋氣風の男子が殖えるに従つて、追々切になるは自然の勢にして、輒近我が邦上等社會の者が婦女子に、斯る教育を授けむことを一般に希望するに至らむことは鏡に懸けて見るが如し、このをりは耶蘇教擴張の爲には實に好機會なり。この時は決して失ふべき時にあらざるなり。今日まで宣教師輩が行ひ來りし宣教の法にては、我が邦上等社會の人を耶蘇教に歸依せしめむことは到底能はざるべしと雖も、余の説く如き法に従がはむには、上等社會の人を耶蘇教に歸依せしめむこと決して難きことにはあらざるならむ。日本は教育を得むと欲して遂に耶蘇教に引き込まるゝならむ。宣教師輩は宗旨の爲には教育に従事する事は素より厭ふべからざるなり。日本人は我が欲する所の教育を得む。耶蘇教は其の欲する所の信徒を得む。雙方の爲めに利益多き交易は繁昌せざると云ふことなし。交易のことに英敏なる西洋人にしてこの利益多き交易に氣の付かざるは千慮の一失と言はざる可からず。余輩より宣教師輩がアチコチに設けたる一二の學校あることを知らざるに非ずと雖も、これは余の欲する如き資格のものにあらざるのみならず、又其の數の少なきを憾むなり。余の欲するは前にも言へる如く學科の高尙なることは素より

要せざれども、男女の外國人の手は可なり揃ひ居らねばならぬものなり。又築地や麻布、青山などの如く片よりたる場所にのみ設けずして、五六の學校を東京市中の盛なる場所にマンペンなく備へ置くことこそ願はしけれ。文部省が高等女學校を建てられたるは實に結構なることなるが、東京市中にたゞ一の女學校では足るべきにあらず、且や高等女學の如き其の教員の多數は日本人なるが故に、女子に高等なる學校教育を授くることは素より出來べけれども、余が將來の日本婦人に必要なりと信ずる資格の多分は、現今の高等女學校の如きものにては到底充分には得難からむ。高等女學校をして余の欲する如き教育を生徒に授けしめむ爲には、外國教師の數を大に増加し、其の組織も大に改めずんばあらざるなり。さりながら、或は高等女學校の組織にして、斯の如く其の性質を變ずるとするも、尙ほ數多の女學校を要することは免かれ能はざるなり。眞に高等なる學科を生徒に授くる高等の學校は、東京市中に一つあれば其れは素より充分なるべしと雖も、余輩が廣く中等以上の婦人に必要なりと認むる如き教育を授くる爲の學校に至りては、畢竟我が邦中等以上の婦人をして學校教育を受け乍ら、親しく西洋人と交際して其の風俗人情に化せしむるが大主眼なるが故に、課程を高くせむよりは學校の數を多から

しめて成るべきだけ廣く行はれしめむこと素より願はしきことなり。かゝる目的なるが故に、これ等學校に於ては既に人の妻になりたるものにて、到底正面の課程を履むこと能はざるものゝ爲には、變則科を設けて西洋人と交際するの道を開き、西洋風のくらし方並に交際のことより、其の他總べて西洋の風俗人情の一般に通せしむることも亦最も必要なりとす。

上に陳べたる如き教育を日本婦人が要することは決して疑ひ無きことなり。而してこの教育はひとり宣教師社會の手を借りて得らるべきものたることも亦疑ひ無き所なり。ひとり疑はしきは宣教師社會の人に余の論を解し得るもの多く有る無しの一點のみ。今の宣教師の風として諸方をかけまはりて、既に心のかたまりたる日本人にロクに分らぬ片言の日本語にてきゝめの薄き説教を爲すを以て、宣教師の道なりと心得居る者多きが如くなれ共、かゝる宣教師の法は、かたき地面へ僅の水をバラ／＼とまくと一般地に吸ひ込まるゝもの少なく蒸發するもの多く、到底骨折損が多き者ならむ。之に反して幼き女子の教育よりして取りかゝる如きは、柔かき地面に多くの水をまくと一般地にしみこむもの多くして蒸發する者少なし。この宣教師の如きは最もきゝめ有る者にして、最も儉約なる者と云はざる可らず。刊公

## 耶蘇教擴張の新法

(明治二十年九月)

耶蘇教擴張の最も好き方法は、耶蘇教社會にて善良なる女學校を多く設立して、我邦中等以上の婦女の教育を掌握し、之を耶蘇教に感化せしめ、將來我邦中等以上の男子の妻たる者、中等以上の兒童の母たる者をして、耶蘇教信徒たる者たらしむるに若く者なきことは、既に先年説きたる處であります。が、耶蘇教擴張の方法はまだ此外にも甚だ好き者が一つあります。私の考へでは夫の女學校の方法と、今是から茲に論じようと思ふ方法をよく實施なさんには、我邦を耶蘇教國となさん事は左まで六ヶ敷ことではありますまい。ナポレオンやモルトケのやうな善き大將が戰爭をなす時には、ラチスボンとかストラスブルグとか云ふやうな敵の手にあれば味方の爲に非常に不爲になり、味方の手にあれば敵の爲に非常に不爲になる。如き大切なストラテジックポイントは力を盡くして之れを取ることが必ず務めるでせう。新なる宗旨の速に擴まること否とは、之を擴めんとする者がナポレオンやモルトケが戰爭をなすの法と同様の法に従ふや否やに、大に關係することと思は

れます。今耶蘇教徒が耶蘇教を擴めんとするの法を見ますに、ナポレオンやモルトケが戰爭をなすの法とは、大に違ふかの様に思はれます。同じ金を費し、同じ力を費して出来る事ならば定まりたる方案もなしに唯ぼつ／＼と尋常人を歸せしむるよりは、一度耶蘇信者とならむには耶蘇教隆盛の爲に甚だ助けとなる如き人、社會の上流に居て大なる勢力を有する如き人達を、先第一に歸せしむる方が萬々優りたることでは御座りませんか。今日我邦にて宣教するものゝ仕方を見ますに、斯る點には少しも注意せざる様であります。が、イグナシユス、ロヨラでも居りたらば如何でムりまじやうか。

今日宣教師社會にて最も注目すべき一個の人種が我邦にあります。それは外の者ではありません。帝國大學の學士であります。帝國大學の學士を耶蘇教信徒たらしむるご否やとは、耶蘇教隆盛の爲に著しき影響あることでありませう。私の考では帝國大學の學士ほど、將來の日本社會に勢力を有する人種はなからうと思ひます。今日に在ては大學卒業生の數は猶僅少であります。夫れでも此の輩が日本社會に對して既に有する所の勢力は、實に莫大なる者であります。醫者社會并に教員社會に於て此の輩の跋扈して居ることは勿論のことでありませう。其

外の社會に於ても此輩の勢力の強きことは、一方ならぬことでもあります。其證據はと申せば、先づ第一に代言社會では如何で御座ります。此社會で最も名望あり、最も繁昌するものゝ中には、法學士が多くありはしませんか。故の高橋一勝を始め、増島岡山砂川、大谷木等は、代言人會で最も歴々たるものゝ中ではありませぬか。而して此人達は皆な法學士ではありませぬか。曾て代言社會にて雷名を轟かされたる鳩山和夫君の如きも、是亦大學出身の人ではありませぬか。東京代言人組合の會長は如何なる人でありませぬか。鳩山でなければ高橋、高橋でなければ増島、増島でなければ大谷木ではありませぬか。判事や檢事の中に追々屈指の士となる様に見ゆる人達は如何なるものであります。司法省の法學校、若しくは東京大學出身の人々ではありませぬか。日本國中に多くの鐵道が出來ますが、日本人にて多く此事業に與り鐵道を造て呉れる人は原口、増田等の學士達ではありませぬか。筑後川其他の川を浚ひ、堤防を築いて之を改良して呉れるものは古市、沖野等の學士では御座らぬか。日本人にて西洋風の家を多く建築する人は山口、辰野等の學士で御座りませう。電信の大將は志田學士にして、電氣燈の受持は藤岡學士であります。工場の改良は誰が與つて居りますか。谷口、平賀等の學士で御座ります。山を開て金銀銅鐵を

掘出すものは是れ亦多くは學士では御座りませぬか。佐渡の金を掘るにも渡邊渡といふ學士の手を借りなければなりません。官吏になるは是迄の處では強ちに學力や人物に依る者でもありません。故に、まだ學士にて夫れ程よき役人になつたものはありませんが、今日でも眞に學力が入り、眞に馬鹿では勤まらぬ如き彼の各省大臣の秘書官の如きには、矢張り學士が大分居ります。外務大臣の秘書官は如何なる人で御座りますか。齋藤學士でなければ都築學士で御座いませう。文部大臣の秘書官たる木場貞長氏、司法大臣の秘書官たる栗塚省吾、菊地武夫二氏の如きも、何れも學士なるか。學士同様の人達であります。内務大臣には三人の秘書官あれども、其中最も圓く出來たると評判ある中山寛六郎其人の如きも、是亦大學出の人であります。秘書官と云ふものは常に大臣に接するものでありますから、其賢愚不肖の影響は随分大臣にも及ばないとは云へぬものであります。随分森蘭丸をきめこむことも出來ないとはいへますまい。斯る大切なる職に學士の斯く多きは盛なることでは御座りませぬか。又前に申せし如く、教員社會にて學士連が跋扈して居ることは、今更申すまでもなきことなれども、凡そ今日我邦の學校中私立でも官立でも苟も盛なるものならば、其教員の重なる者に學士の居らぬ如き學校は少ないこ

とで有ませう。帝國大學は申すに及ばず、高等中學校でも尋常中學校でも、官立公立のものには申すに及ばず、私立學校でも、専門學校の如き、専修學校の如き、英吉利法律學校の如き、東京法學校の如き、其教員にして學士なるか。然らざれば學士同様のものできなきものは至て僅かで御座りませう。是に由て之を觀ますに、今日に於て業に既に我邦社會に於て甚だ勢力ある元素を爲して居りますが、此人種は將來益々増加して其勢力は愈々強くなる事と思はれます。將來我邦が益々開明の域に入ることせば、其れは第一、學士の多少に大に依ることです。又國が開けるに従つて學士の需要が多くなるは疑なきこと。御座います。教育が盛んになれば、其れだけ多く學士が入りませう。鐵道が盛んになれば、其れだけ多く學士が入りませう。電信が盛んになれば、其れだけ多く學士が入りませう。造船が盛んになれば、其れだけ多く學士が入りませう。産物が盛んになれば、其れだけ多く學士が入りませう。探鑛冶金が盛んになれば、其れだけ多く學士が入りませう。官吏登用法が定まりたらば、其れだけ多く學士が入りませう。條約改正が出来たらば、其れだけ多く學士が入りませう。將來の日本に於ては、學士ほど大切なる人種は決してありませんまい。

左れば政黨でも宗教でも將來勢力を違ふせんと欲するものは、少しも多く學士を味方に付けることを今より宜しく勉むべきではありませんか。之を勉めざるものは大將となりてナポレオンやモルトケたることの出來ざるものでありませう。若し私が政黨の首領でありたらば、少しも多く學士を味方に付けることを勉めるでありません。若し私が宗教社會で勢力ある人でありたらば、何は措きても學士を多く我が宗教に入れん爲に盡力するであります。宣教師輩が茲に注目せざるは彼等の爲に惜むべきことであります。中には學士輩を信徒となすの必要を感じ居るものもありませう。又今私が申す所を聞きて、何に様學士は日本社會中最も大切な原素なり、之を信徒と爲すは耶蘇教の盛衰に最も關係多きことなりと悟らるるものもありませうが、さて之を感化して耶蘇信徒とならしむるの手段の如きに至りては、皆な甚だ當惑する處でありませう。成程貴君の言はるゝ通り學士は日本社會に於て最も勢力を有し、最も大切なる人種となるものならんとは予輩も悟り居る所にして、之を信徒中に加へんことは我が宗旨の隆盛に最も關係あることなりとは信すれども、その方法は如何である、教育ある日本人を信徒となさんことは極めて六ヶ敷ことではないか、殊に學士の如き教育を受けたる日本人を感化せし

めんことは至難ではないか、學士を信徒と爲すの必要は感じ居れども、その手段には甚だ苦しめり、良説もあらば聞かんと言はるゝ者もありませうが、私の考へでは随分よき方法があると思ひます。此の方法に従へば將來學士を悉く耶蘇教信徒となさんことも決して六ヶ敷き事ではありますまい。宣教師等が帝國大學の學士などを信徒となさんと思立つときは、大學の近傍へ會堂でも立て、日曜日毎に説教でもなしたらよからうと思ふが、常の事のやうに見えますが、そんな迂遠の法では學生や學士を信徒とすることは出來ますまい。成程立派なる會堂を建てテイーン、スタンレイとかヘンリー、ウード、ピーチャー、とかヒリツプス、ブルックスとか云ふ様な學識ある人柄の僧侶が説教して呉れる譯ならば、夫れは日曜日のみならず毎日でも學生も學士も聴聞に出掛るであります。尋常宣教師の説教ではさう聞きには參りません。スタンレイやピーチャーの様な人なら格別、左もなくば會堂説教で學生や學士を多く信徒となさん事は、甚だ覺束ない事のように思はれます。されば如何なる方法を用ゆべきであるかと申せば、私の考へでは別段六ヶ敷ことは御座いませぬ。即ち耶蘇教社會にて善良なる高等中學を設立して、將來學生となり學士となりて世に大なる勢力を有すべき人達を、豫め五箇年間その高等中學に於て教

育し薫陶して感化することでありませう。大學學生や學士を日曜日説教の力で信徒と爲さんことは甚だ六ヶ敷ことでありませうが、大學豫備校五箇年の教育の間に信徒と爲んことは、何より易きことでありませう。私の考へでは、耶蘇教社會で善良なる大學豫備校の二ツや三ツ日本に設立するのは、何の譯けもなきことかと思はれます。素より少しは資金を要するでありませうが、結果の重大なるを考へんには、決してこれを吝みて躊躇すべきではありません。又或は夫れ程新に資金を要せずとも、一ツや二ツ高等中學を設けることが出来るかも知れません。夫は、どう言ふ譯かと思せば、東京の如きは耶蘇教會にて設けたる學校にして、可なり盛大なるものが一ツ二ツあるではありませんか。麻布には英和學校があり、青山には尙ほ盛大なるものがあり、築地にも可なりなるものあり、高輪邊には近日盛んなる學校を立てんとするの計劃ある由ではありませぬか。されば此等學校の中一ツを擴張して純然たる大學豫備校に變せんには、それで東京丈けは濟むかも知れません。若し耶蘇教社會にて善良なる大學豫備校を東京に於て立てんには、七八百人の生徒を得て、年々百人位その學校の卒業者を帝國大學へ送ることが出来ませう。左すれば僅に唯一つ大學豫備校を耶蘇教會で持つて居りても、年々百人位耶蘇教信徒を大學學生

と爲し、年々百人位耶蘇教信徒を學士と爲して、社會に出て、大切な地位を占めさせることが出来ませう。さて耶蘇教會にて高等中學を設けるとせば、場所のことも能く考へねばなりません。高等中學には通學生も素より多くあるべきですから、若し生徒の便利を謀れば、若し生徒の多からんことを欲せば、麹町區か神田區の如き中心の地を選んで之を立つべきであります。若し耶蘇教會にて斯る學校を設け、東京のみで年々百人程の信徒を大學々生たらしむることを得ば、耶蘇教の勝利は必然のことでありませう。

今日では大學の學生となるものは、皆な第一高等中學にて仕立らるゝ所のものがあります。その生徒は凡そ千四五百人程あります。大學々生たる生徒を凡そ七八百でも教育する學校は、實に盛なる影響を有する學校ではありませんか。耶蘇教社會で斯の如き學校を持つて居りたくはありませぬか。今までは大學の豫備校は唯第一高等中學のみで有りました故に、大學へ入らんと欲するものは、皆第一高等中學の生徒となりましたが、善良なる大學豫備校が外に出来れば、其善良なる度に從て、何程でも大學の豫備生徒を茲に引き集むる事が出来ませう。若しその學校の校長は眞の教育家なり、その教員は皆學問に富みて且つ甚だ親切なり、その生徒は何れ



も皆な品行よしなどいふ評判の世間に立たんには、子弟を大學の學生となさんと欲する父兄は、皆豫備の爲には之を此の學校に送くるであります。また耶蘇信徒の立てたる學校ならば素より斯る評判を得べき譯であります。又斯る大學豫備校が官立高等中學の外に出来んことは、官立學校の爲にも甚だよき事で有りませう。何んごなれば、斯る私立大學豫備校が出来て官立高等中學と競争なさんには、官立學校も負けぬ氣になりて少しも善き教員を選び、少しも多く親切に生徒を教育することに勉めるであります。斯る私立大學豫備校の出来んことは、生徒の爲には實に喜ぶべきことでありませう。されば既に東京の耶蘇教會の重なる學校は申すに及ばず、西京の同志社の如きも、少なくともその一部分は、之を純然たる大學豫備校に改むべきではありませぬか。多くの資金を費やして何にとも付かぬ中ぶらりんの人を作る學校を設け置かんよりは、純然たる大學豫備校を立て、一人も多く大學學生の種を作り、大學々生たるものを一人も多く耶蘇信徒たらしむる事を勉むべきではありませんか。大學々生たるものは多くは耶蘇教社會の學校より出るごせば、官吏も多くは耶蘇教信徒たるべし、代言人も多くは耶蘇教信徒たるべし、裁判官も多くは耶蘇教信徒たるべし、學校教員も多くは耶蘇教信徒たるべし、

醫者も多くは耶蘇教信徒たるべし、工藝家も多くは耶蘇教信徒たるべし、新聞記者も多くは耶蘇教信徒たるべし、演説家も多くは耶蘇教信徒たるべし、著述家も多くは耶蘇教信徒たるべしと思はれます。何んごさうではありませぬか。東京には第一高等中學といふ大學豫備校が一ツあるからそれで十分なれば、その他にはいらぬといふ如きものあるかは知らねども、東京中に一ツの大學豫備校では、未だ十分なりとは言へざる様に思はれます。如何なる學校でも餘り生徒が多くて、餘り多くの生徒を一組に詰め込むは授業上害あることであります。全く「レクチュール」で教授する如き場合の外は、餘り多くの生徒を一度に教授せんとする時は、是非教授が行届になります。蓋し中學の學科の中に於て最も大切なるものは語學、數學等でありますが、是等の學科を教授するには、一度に教授する生徒の数が餘り多きは、生徒の爲に甚だ不爲であります。止むを得ざれば仕方ありませんが、成べくは一組の生徒の人数は、餘り多からぬ様にしたきものです。然るに現今第一高等中學には、生徒の數千四五百人ありて、一組の生徒の數四十人程あるが通例であります。學校に千四五百人生徒あるは盛なることであります。一組に四十人詰め込むが如きは、決して喜ぶべきことではありますまい。斯く多くの生徒を一組に詰め込

むは畢竟教員の數に比して生徒の數が多過ぎるからのことでありませぬ。然れども志願者の數は甚だ多きにも拘らず、學校は僅に一ツで、その學校には金のなき爲に、教員の數を増すこと相叶はざること事情なるに於ては、よしむば一組に四十人詰め込むも、少しも多く生徒を入學せしめざるを得ますまい。今の事情では一組に四十人詰め込むも止むを得ざることでありませぬが、どうかして止むを得るやうにしたいものであります。さうするには第一高等中學の定額を増して教員の數を今より多くするか、左もなくば學校の數を増すより外はありません。併し今の文部省の定額では、高等中學の定額を多く増すといふことも、又その數を増すといふことも、中々六ヶ敷ことで御座いませう。よしむば高等中學の定額を尙ほ多く増すことが出来るにもし、一個の學校に生徒の餘り多きは、管理上其他の點に於て大に不都合を見ることでもあります。經濟上より考ふるときは、二個の學校を設くるよりは、一個の學校へ多くの生徒を詰め込む方が、萬々勝ることでありませうが、生徒の爲には之れを二個の學校に分つ方が、却て宜しふ御座りませう。若し文部省にて東京に二個の高等中學を設け得らるゝにせよ、二個とも文部省官立の者なるよりは、その一をして私のものならしむるを得ば、その方が萬々勝りたることでありませ

う。競争の必要なは、獨り商業上のみではありません。前にも申せし如く公私の學校があらんには、互に油斷は出來ず、ごちらの學校の主人も少しも我が學校の評判をよくせんと謀り、少しも多く好き生徒を出さんと勉むるで有ませう。素より主人その人を選択するの人は、之が選擇に注意せざるを得ざるのみならず、主人其人はまた教員の選擇に、一々よく注意せざるを得ざる理で御座いませう。官立學校のみありて教員の專賣特許を有する如き有様は、決して喜ぶべきものではありません。地方の學校はいざ知らず、東京の如きは大學豫備校は一個にて足るや否やは、一概には決し難きことであります。現今の場合では十分と思はれませぬ。第一高等中學の生徒は千四五百人ほどありて、一組四十人も詰め込む勢ひでありますから、年々入學志願者の數は千人程ありても、入學せしむることは僅に二百名位に過ぎませぬ。幸に現今の處では試験に於て及第するものゝ數、至つて少なきが故に、夫れ程不都合も覺へませぬが、よしや及第者の數が多くても、僅に二百名位の外は入學せしむることは出來ませぬ。千人も入學志願者があるに、僅かに二百名位の外は、その願を達せしむるを得ざるといふは、實に悲しむべきことではありませぬか。説を爲すものは申じませう。何様今日の處では東京に唯一個の高等中學では足りぬか

も知らねども、將來は大阪、金澤、熊本、仙臺等に高等中學があることなれば大學々生たらんと欲するものは、素より第一高等中學のみへ來るべきにあらず。第一に入るべき餘地なくば、第二へ行くべし、第二に餘地なくば、第三へ行くべし、第三に餘地なくば、第四へ行くべし、第四に餘地なくば、第五へ行くべし、到底一高等中學の生徒の数は五六百人に止め置くも、五個も高等中學があれば夫れで十分ならんといひませうが、夫れは實際の便不便を考へぬ理論上の話といふものでありませう。成程地方の高等中學の如く、到底高等中學の立つて居る場所に、多くの入學志願者を出す程の人口なく、生徒多くは他の場所より來るものとせば、甲の高等中學に入るも乙の高等中學に入るも、生徒は格別不便を感ぜざるべしと雖も、東京の如きは、大に之と異なりて、子弟を高等中學の生徒となさんと欲する如き、父兄の数は極めて多く、その父兄やその子弟の爲には、東京にて修學をさせたり修學をしたりすると、熊本や金澤へ遣りたり往きたりすることは、その便利甚しき違ひゆる、若し東京にて大學豫備が出來ればよし、左もなくして熊本や金澤下りへ送りたり送られたりする譯なれば止むを得ず志を轉せざるを得ざる如き者も、往々あることで御座いませう。無理をすれば東京に唯一個の高等中學で足りるかも知りませんが、若し私立の者に

て今一個大學豫備校が出來たらば喜ぶものは多いことでありませう。偕又一步を進めて、高等中學は文部省にて立てられたる五個のものにて十分需用に足り、その外には一個も要用なく、東京の如きと雖も第一高等中學が一個あれば、夫で十分事足れりとしたらば、如何でありますか。斯る場合に於ては、東京でも大阪でも何處でも私立高等中學の立派なるものが出來たらば、其場所にある文部省の高等中學こそ、之を廢しても宜しう御座いませう。畢竟私立の善き學校がなければこそ、官立の學校も必要なれ。私立學校の善きものが出來れば、官立學校は素より入らざるものでありませう。若し私立の高等中學が出來て、高等中學が多過ぎることせば、文部省は其高等中學を廢して、其定額を以て益々大學の事業を擴張すべきではありませんか。多分そうなるに違ひはありますまい。若し耶蘇教社會にて數多の善良なる大學豫備校、即ち高等中學を設立するに至りましたらば、高等中學の事業は大概その學校にて引受ける様になるに違ひはありません。果してそうなたならば、耶蘇教の天下とすることは容易なることでありませう。高等中學五年の間の教育は實に大切なるものであります。人が果して善きものになるか悪しき者になるかは、大概此の時分に於て定まることでありませう。その前に

受くる所の教育も素より大切なる者であります。何程其教育が善くても、十四五より十八九までの教育即ち高等中學大學豫科時分の教育も亦甚だ大切の者であります。その前に如何程善良なる教育を受けたりと雖も、まだ心も體も固まらぬ中々、高等中學時分の教育で之を打崩すことも出来ませう。體を強壯に爲すのでも、道徳心を堅き時と雖も、幾分か矯め直すことも出来ませう。體を強壯に爲すのでも、道徳心を堅固に爲すのでも、十八九までの所が肝腎であります。

是まで述べたる所を摘むで申します。大學の卒業生即ち將來我邦の社會に立て最も大切なる地位を占むる所の人種を、我黨の者を爲さんと欲する者は、政黨でも宗教でも之を能く高等中學時分に於て、養ひ化せしむるに若くはありますまい。將來我邦の社會にて最も大切なる原素を爲すの人種は大學の學士であります。之をして悉く耶蘇教信徒たらしむることは決して六ヶ敷ことではありますまい。その方は耶蘇教社會にて大學の豫備教育を掌握するにありませう。然して若し之を爲さんと欲せば、既に處々にある耶蘇教社會の學校即ち東京にて麻布、青山の學校、西京の同志社、仙臺の東華學校等の如きものを或は擴張し或は變化して、高等中學となすことより着手すべきであります。學校繁昌の點より考へても、それが一番宜しう

御座いませう。耶蘇教社會の人が茲に目の付かぬは、不思議なることではありませぬか。或は此方法あるを知らぬにはあらねども、善き方法にあらずとして捨置かるゝののかも知りませぬが、若し又此方法あることに是まで心付かれざりし譯ならば、私の説く所を聞きて、大に發明せられて、之を贊成せらるゝ向きもあらんと思ひます。若しこの方法を不可とせらるゝか、取るに足らずとせらるゝものは、勞を吝まらずの論を駁せられんことを望みます。